



* 0049855000 *

0049855-000

特 275-157

受験必携根抵となる国語漢文講座

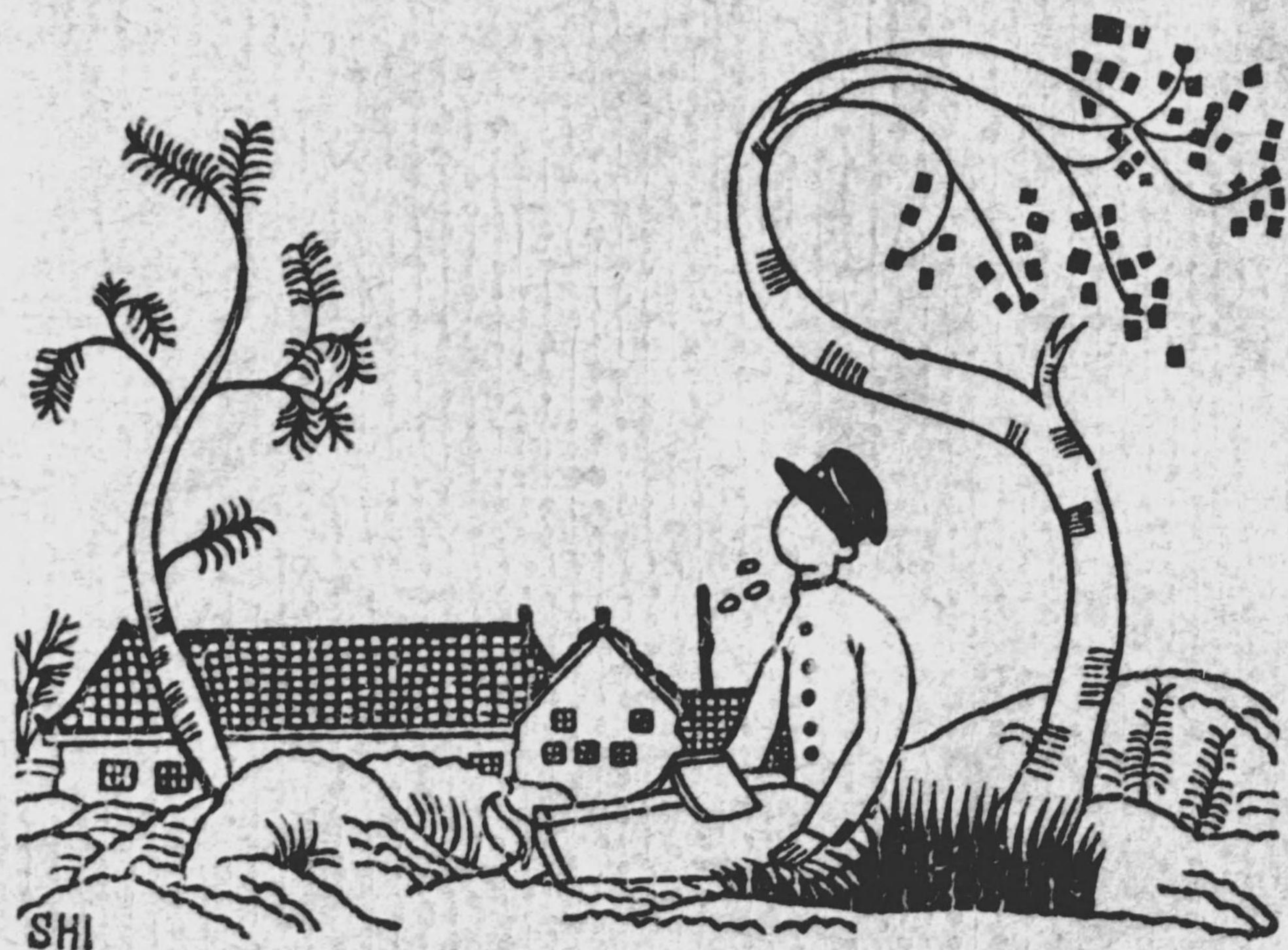
松寿堂・〔編〕

松寿堂出版部

昭和5

AHJ

特



國語漢文講座

東京

松壽堂出版部

特 273
157



受驗必携
根抵とたす

國語漢文講座



緒言

國語漢文は實に我國文化の精粹なり故に高校をはじめ如何なる主要専門學校の入學試験にも必らず國語漢文の問題が課せられる此の見地から不必要なる課目は復雜をさけるため錯除し必要かくべからざる課目のみを網羅して極く簡易に解りやすく受験用として自習獨學用として編纂せり。青年諸兄の實力養生として是非一讀を奨む。

編者識す

第二章 那須與一宗高の扇的……………四〇

第三章 楠正成について……………四一

第四章 書を読む楽しみ……………四三

第五章 旅行の楽しみ……………四四

受験漢文講座

漢文を學ぶ必要……………四六

漢文について……………四六

大日本帝國……………四九

平氏篇……………四九—八六

目次 終り

國語受験的頭腦養成講座

【一】世のなりはひはもとよりおのゝ我が身のためにいとなむわさなれど身のためになすと意ふ時はおのづからわたくしごと出で人の心よせを失ひ思はくをそこなふこともありぬべければおなじことも人の爲にして我はまた世の人に養はれむと心得べきなり何事にも人の爲に身をいたづき心つくさば人も亦我がために情をかけ誠をはこびて我が身は世の人より養ひて賜はるものなり。(橋守部—待間雜記)

(語釋) 「なりはひ」生業。家業。「わたくしごと」自分のみの利益をはかること。「人の心よせ」人望。人が心を寄せること。「思はく」他人の氣うけをいふ。「いたづく」骨を折る。苦勞をする。「心をつくす」心配する。「誠をはこぶ」眞心をよせる。眞心を以てつくす。

(解釋) 世の生計の業は、勿論各自が我が身のためにすることではあるけれども、そ

れが我が身のためにしてゐるのだと考へてする時には、自然自分のみの利益をはかることが起つて、世の人望を失ひ、人の氣うけを損ずることもあるであらうから、同じ事をするにも、自分のことは考へず、他人の爲になるやうにとなし、自分は又世の人から養はれるやうにしやうと思はねばならぬことである。何事をなすにも、他人のために自ら骨折をなし、心配をしてやるならば、他人も亦、自分に對して情をかけ、眞心を以て盡し、かくして我が身は世間の人から養つて下さるものである。

【二】よろづ何のわざにも古より法となすしるべありてそれによらざらむはまことの心を得がたくそののりを得たるはまめやかなりとて人もうべなふめりこはもとよりこゝとわりさることながらふかく事のもとを考ふるによろづの事はじめにのりをまうけおきて後にそのわざをなし出づるにはあらずそのわざあるが上にこそ法てふことは出て來めれかかれればわざは本にて法は末なりかれ何のわざにもよく心を深めてその道に入りたらむ人はわれより法をばはじめつべしすべてくだりたる世人の心ぐせにて法にな

づみあとにかかづらひてかへりてあらぬ方にひがみもて行くだぐひも多かるをやもろこし人の詞に法はのりなきがうちにありといへるはその詞あぢはひありとこそあはゆめれ。(村田春海—琴後集)

(語釋) 「わざ」[技藝]。「法」[ノリ]。法則。法規。「しるべ」[案内]。手引。やり方。「まこと」の心を得難し[眞の妙趣に達し難いとの意]。「のりを得」[規則にあてはまつてゐること]をいふ。「まめやか」[まじめ]。「うべなふ」[承認する]。よいと認める。「ことわり」さることながら[道理はさうであるが]。「もと」[根本]。重要なこと。「すゑ」[重要ならぬこと]。輕いこと。「かれ」[故に]。「心を深めて」[その事に深く心をとどめて]。「その道に入る」[その道を深くきはめる]。「くだりたる世」[衰へたる末の世]。「心癖」[あもしろくない習慣]。「法になづむ」[規則に拘泥する]。「あとにかかづらふ」[「あと」は先人の定めた法則をいひ「かかづらふ」は「なづむ」に同じ]。つまりこれも「規則に拘泥する」の意である。「あらぬ方」[よくない方]。「ひがみもて行く」[次第にわるい方に

片よつて行く。「ひがむ」はねぢけかたよるをいふ。「法は法なきがうちにあり」眞の法則とすべきは、普通の法則に束縛されることなく、これを超越して、自家獨得の妙を發揮する中にあるといふ意。「味はひあり」深長な意味を含んでゐるといふ意。

(解答) 何の藝道にもすべて昔から法則となるしかたがあつて、その法則によらないものは眞の妙趣に達し難く、その法則にあてはまつてゐるものはまじめでよいといつて、誰もこれをよいと認めてゐるやうである。これは勿論道理はさうであるが、深く根本を考へて見るにすべての事は、最初に法則をきめてゐて、然る後其の法則にあはせてその事をやりはじめたのではなく、最初にその道があつて後にはじめて、それに関する法則が現はれて来るやうである。だから、わざそのものが根本の大切なものであつて、法則は重要なものではない。それ故、何の道によらず、深く心を止めてその道をきはめる人は、自分でその道の法則を創始するであらう。總じて、衰へたる末の世の人のわるい習はしとして、法則に拘泥してそのために却つて

よくない方にだん／＼と片寄つて行く類の人も多い位だから、猶更法則を重んじ過ぎる弊を知るであらう。支那人の詞に「眞の法則は、法則にとらはれずして、これを超越して自身の獨特の妙を發揮するが中にある」といつたのは、その詞の意味が深長であるやうに感ぜられる。

【三】 芳宜園の月のまどひは年ごとのちぎりなればこよひも例の人人まうで來にけりさるは降りくらしたる雨の名残はれ行かむ空もおぼえずましてさやけき光まち出でひはいとこ心もとなきを更け行かばかくのみにはあらじをこよひは寢で明かしてましなどいひつつ伊豫籠むなしうかゝげて空のみうちまもらるゝもいとわりなしや今宵は名に負ふ園生の花もいたづらに夜の錦にて淺茅がもとの松蟲のみやう／＼聲添はりゆくも猶あかぬわざながらさすがにあはれは添へつべし。(村田春海—琴後集)

(語釋) 「芳宜園」ハギゾノ。加藤千蔭の屋號。「月のまどひ」月見の會合。「まどひ」はまろく居並ぶことで、轉じて會合の意に用ゐる。漢語の團圓の語にあたる。「ちぎ

り「約束」。「まうで来」參り來るの意。「さるは」この語「しかし」といふ意に用ゐられることがある。こゝもその意味に解するがよい様に思ふ。「晴れ行かむ空もおぼえず」晴れさうにも思はれぬ。「心もとなし」「おぼつかない」と云ふ意と「待ち遠し」とがあるが、こゝは「おぼつかない」と解するがよいと思ふ。「伊豫籬」伊豫の國から産す籬の一種。篠竹の小さなのを編んで作る。「むなしう」徒らに。月が出ぬのに籬をかゝげるのはむだであるから、「むなしう」と云つたのである。「うちまもらるゝ」思はずうち見守る。「るる」は動作の自然に起る意をあらはす助動詞である。「わりなしや」しやうのないことであるよ。「やは感歎の意をあらはす助詞。「名に負ふ」有名な。「園生」ソノフ。「園」に同じ。庭園。「花」秋草の花である。「夜の錦」美しさものゝ、人の目につかぬことの譬。「淺茅」アサヂ。短くて繁らぬ茅。「もと」下蔭をいふ。「さすがに」さうはいふものの。「あはれは添へつべし」秋夜の情趣をば添へることが出来るの意。

(解答) 芳宜園(加藤千蔭の宅)における月見の會合は、毎年毎年の約束であるから、本年の中秋にあたる今晚も、いつも集る人人がやつて來た。しかし、終日降つた雨の名残がのこつて、一向晴れさうにも思はれぬ。まして、さやかに照らす明月の光のあらはれ出づるのを待ちうけることは、いよ／＼以ておぼつかなく感ぜられたが「夜が更けて行つたならばこんなにはかりもあるまいから、今晚は寝ないで夜をあかして月の出るのを待たう」など、いひながら、伊豫籬(篠竹を編んだ籬)をいたづらにかかげて、月がもう現はれるかも現はれるかと、思はず空ばかり眺めるのも本當にしかたのないことである。今晚は有名な庭園の秋草の花も、月がないから暗くて人の目にもつかず、淺茅(短い茅がや)の下の松蟲ばかりが鳴く聲が増して行くのも、月がないからやはり物足らぬこと、はいひながら、さうはいふものゝ、とにかく感興を添へる種とはなり得る。

【四】 平家は敵すでに寄すと聞えしかば取る物も取りあへず太宰府をこそ落ち給へ主

上腰輿に召されけり國母をはじめまゐらせてやんごとなき女房たちは袴の裾を高く取り大臣殿以下の卿相雲客は指貫のそばを高く挟み徒跣で我先に我先にと箱崎の津へこそ落ち給へ折ふし下る雨車軸の如し吹く風砂を揚ぐとかや落つる涙ふる雨わきていづれも見えざりけり垂水山鶉濱などいふさかしき險難を凌がせ給ひて渺々たる平砂へぞ赴かれけるいつならはしの御事なれば御足より出づる血はいさごを染め紅の袴は色をまし白き袴は裾紅にぞなりにける。(平家物語)

〔語釋〕「寄す」攻め近づく。「取る物も取りあへず」猶豫なく。すぐに。「太宰府」筑前の國にある。天満宮のある所。「主上」天子。安徳天皇を申す。「腰輿」手で昇ぎ行く輿。「召さる」お召しになる。お乗りになる。「國母」天皇の母后を申す語。皇太后のこと。即ち安徳天皇の御母建禮門院の御事である。「やんごとなき」たふとい。「女房」禁中の官女をいひ、また貴人の侍女をもいふ。ここは前の意で、官女のことであり、又平家一門の人人の妻室をも含めたのである。「大臣殿」前大臣宗盛のこと。

〔卿相雲客〕公卿殿上人といふに同じ。「公」は攝政關白、及び大臣をいひ「卿」は大納言中納言、參議、及び三位以上の人をいひ、「殿上人」は四位、五位、及び六位の職人をいふのである。「指貫」サシユキ。「奴袴」ヌバカマともいふ。裾を括るやうに作つた袴で、直衣、狩衣の裝束の時につける。「そばを高く挟む」「そば」袴のももだちのこと。ももだちの所を取つて帯に挟み、裾を高くかかげること。「徒跣」乗物に乗らず、しかも穿物をはかずして歩くこと。「我先に」先を争ふ意。「箱崎」筑前の海岸。博多の東に接し、箱崎八幡宮のある所。「津」港。「車軸の如し」大雨の形容。雨の線の大きなことを、車軸の大きさにたとへたのである。「わきていづれも見えざりけり」涙であるか雨であるか、いづれとも區別しかねたの意。「わきて」は「區別して」の意である。「垂水山」タルミヤマ。筑前の國にある。「鶉濱」ウヅラハマ。筑前の國。「さかしき」けはしき。「凌ぐ」困難ををかして進むをいふ。「渺々」ひろく遙かなさま。「平砂」たひらな砂地。「いつならはしの御事なれば」何時經驗なされたことも

ない事であるから。「習はし」は慣れること。「シヤン」砂。「裾紅」裾の部分が紅色に染めてあること。

(解答) 平家は、敵がはや攻め寄せてくると云ふ噂であつたから、しばらくの猶豫もなしに太宰府をお逃げなされた。天皇は行幸の時にいつもお乗りになる鳳輦ではなくて、手で昇ぐ輿にお召しになつた。皇太后をはじめとして、身分高い貴婦人たちは、袴の裾を高くかかけ、前内大臣平宗盛公以下の公卿殿上人たちは、括り袴の股立を取つて高く帯にはさんで、男女ともにはだしであるいて、先を争ふばかりにして、箱崎の方へお逃げなされた。折柄降る大雨は車の軸の如くであり、吹く風は砂を空に吹きあげるばかりであつたとかいふことである。悲しさつらさに泣く涙とおつる雨の雫と亂れ落ちて、いづれが涙いづれが雨と、區別しかねるばかりであつた。垂水山だの鶴濱だのいふ険しい難所を、苦しい思をしながら通り越して、はるかに廣い平坦な砂地に赴かれた。こんな困難な事は、今までに何時だつて経験なされた

ことがないのであるから、御足は傷ついて、流るゝ血潮は砂を染め、紅の袴は紅血に浸つて一層色が濃くなり、白い袴の裾は血に染んで紅の色となつた。

【五】すべて人に愛樂せられずして衆に交はるは恥なりかたちみにくく心おくれにして出で仕へ無智にして大才に交はり不堪の藝をもちて堪能の座に連なり雪の頭を載せてさかりなる人にならび況や及ばざる事を望みかなはぬ事を憂へ來らざることを待ち人におそれ人に媚ぶるは人の興ふる恥にあらず貪る心にひかれてみづから身をはづかしむるなり貪ることの止まざるは命を終ふる大事今ここに來れりとたしかに知らざればなり。(吉田兼好—徒然草)

(語釋) 「愛樂」アイゲウ。愛し好むこと。親しみ愛すること。「心おくれにして」心が愚かであつて。「出で仕へ」官途にあつて出仕することをいふ。「不堪」フカン。拙いこと。堪能ならぬこと。「堪能」カンノウ。巧妙。上手であること。「座」席。「雪の頭」しらがのかしら。「さかりなる人」少壯の人。「かなはざる事をうれふ」出來

ない事について心を痛める。「命を終ふる大事」死ぬると云ふ大事件。

(解答) 總じて、人から親しみ愛せられずして、世の中の人と交際するのははづかしいことである。例へば、容貌がみつともなく、心が愚鈍でありながら、官途に出で仕へたり、智慧のない身でありながら大才の人と交際したり、下手な藝でありながら上手の人の集る席上に列席して見たり、白髪の老人でありながら、少壯の人と同席して見たり、まして、及ばぬことを望んだり、出来ない事について心配して見たり、来る筈のない事を待ち望んだり人をおそれたり媚びへつらつたりするのは、人として耻辱とすべきことであるが、これらは人が興へる恥辱ではなくて、自分の食欲の心に引かれて、自分で自分の身をはづかしめるのである。食欲心のやまないのは、死といふ大事件が、今自分のすぐ近くに近づいてゐるといふことを知らないからである。

國語講座

第一篇 熟語の讀解

熟語成語の讀み假名を附せしめ其簡単な解釋を爲さしむるは一般の讀書力、常識力を見るに最も都合のよい方法である。

イの部

- 【有機能】(イウキタイ)生活機能をもつてゐるもの。
- 【悠々閑々】(イウイウカンカン)のんきにかまへるさま。
- 【優渥】(イウアツク)手あつち。情ぶかい。
- 【育英】(イクエイ)教育。英才を教育すること。
- 【因果應報】(インダツオウハウ)原因と、結果とは感應して報い來るとの意。
- 【陰謀】(インボウ)秘密のたくらみ。
- 【優游不斷】(イウイウフダマン)ぐづぐづして決定しないこと。

【宥免】(イウメン) 罪をなだめゆるすこと。

【猶豫】(イウヨ) 時日を延ばすこと。

【陰徳陽報】(イントクヤウハウ) 人の知らぬ様に恩徳を施すと、外に現れた報が来る。

【一時を糊塗す】(イチジチコトス) まに合はせに一時を繕ふこと。

【一知半解】(イツチハンカイ) 僅な智慧。低級な智識。半可通。

【股儘速からず】(インカントウカラズ) そういふ例が近くにあること。

【一舉兩得】(イツキヨリヨウトク) 一度に二つの利益を得ること。

【威風堂々】(イフウドウ) 威勢あり。威厳あるありさま。

【一瀉千里】(イツシャセンリ) 威勢よく進むこと。勢のよいこと。

【一視同仁】(イツシドウジン) 何れも同様、別け隔てぬ仁慈の心。

【一舉手一投足】(イツキヨシユイツトウソク) 僅かな動作。行爲のこと。

【二陽來復】(イチヨウライフク) 舊年去つて新年の來ること。

【二網打盡】(イチモウダジン) 一舉に捕へ盡すこと。

【隱見出沒】(インケンシユツボツ) 見えたり、かくれたり、出たり引つこんだり。

【隱忍自重】(インニンジチヨウ) ちつと耐へて、落付いてゐること。

【因循姑息】(インジュンコソク) 公正ならぬ徹底せぬ一時休み。

【因襲打破】(インシユウダハ) 是までの習を打破ること。

【一葉落ちて天下の秋を知る】(イチヨウオチテテンカノアキヲシル) 一枚の葉が落ち散つて、秋が來たことを知る。

ロの部

【露見】(ロケン) 人に知られること。

【論旨不明】(ロンシフメイ) 議論の筋道や趣旨が分らぬこと。

【論駁】(ロンバク) 議論して非難すること。

【論鋒】(ロンボウ) 議論の鋒先。

【籠絡】(ロウラク) 人の心をとりにし自己の意の儘に左右すること。

【籠城】(ロウジヤウ) 城に立こもること。

【陋習打破】(ロウシフダハ) 悪い習慣を打破ること。

【老婆心】(ロウバシン) おせつかい。とり越し苦勞の世話焼。

【老練】(ロウレン) 經驗があつて、熟練してゐること。

【壘斷】(ロウダン) 獨り占め。

【隨を得て蜀を望む】(ロウヲエテシヨクヲノゾム)人の慾に際限のないこと。

【直落】(ロボ)行幸の行列。

【漏洩】(ロウエイ)もれる。もらす。

【魯鈍】(ロドン)馬鹿。鈍物。

【兩巷】(ロウカウ)きたない小路。ろぢ。

ハの部

【派遣】(ハケン)四方に手わけして出張させること。

【杯盤狼藉】(ハイバンラウセキ)盃や皿などのとり亂れてゐるさま。酒席混亂の狀をいふ。

【背汗】(ハイカン)恥ぢる餘りに背に冷汗の出ること。非常に恥ぢること。

【悻悻】(ハイトク)徳義にもとること。正義に反する道德。

【撥亂反正】(ハツランハンセイ)みだれを除き治め正しきにかへす。亂世を治め直す。

【反響】(ハンキョウ)鏡の如く、或行爲に對して起る反射現象。

【排斥運動】(ハイセキユンドウ)人を或地位より押除けんとする運動。

【氾濫】(ハンラン)洪水等の場合(に限らず)水のおふれること。

【反響】(ハンバツ)反動で切ぬ返す力のこと。

【半可通】(ハンカツウ)全部に通ぜぬ。半知りの知識。生かぢり。

【半信半疑】(ハンシンハンギ)半分信じて半分疑ふこと。全部信じ難きこと。

【反比例】(ハンビレイ)一方が増せば反對に一方が減る。比の反すること。

【煩悶】(ハンモン)もだえ苦しむこと。わづらひもだへること。

【彷彿】(ハウタワウ)ふら／＼さまよひ歩くこと。彷彿佇立など言ふ。

【馬耳東風】(バジトウフウ)人の言葉、諫言等を耳に入れぬ。きかぬこと。

【伯仲】(ハクチュウ)兩者優劣なきこと。

【破天荒】(ハテンタワウ)前例のないやうな大きなこと。

【配所の月】(ハイシヨノツキ)音速くへ流された人等が悲哀の心で月を眺める心。今尙舊地から
低き下の役に落しまわされた人等が、しやれて配所の月を見る等謂ふ。

【薄利多賣】(ハクリタバイ)利益を薄くして澤山賣つて結局儲けること。

【破邪顯正】(ハシヤケンセイ)よこしまを破つて正しきをあらはすこと。

【反旗を翻へす】(ハンキテヒルガヘス)反對すること。味方が敵になること等。

【汎太平洋會議】(ハンタイヘイヤウクワイギ)太平洋沿岸國の學者の集會にして諸種學術研究
を爲す會議なり。

【破鏡の嘆】(ハキヤウノタン) 縁談の崩れたこと。多くは夫婦の離別(種々の事情に依る生別)の場合のなげきを謂ふ。

意志薄弱と同じ意。

【薄志弱行】(ハクシジヤクカウ) 志の弱いこと。心もとない心のこと。

【薄氷を踏むの心】(ハクヒヤウヲフムココロ) 非常にあぶない、湖や河を後ろに退却の出来ないやうな地形に陣取つて死守死戦

【背水の陣】(ハイスキノヂン) 湖や河を後ろに退却の出来ないやうな地形に陣取つて死守死戦すること。

【罵詈雑言】(バリザンボウ) 人をそしりあらゆる悪口を言ふこと。悪口雑言。誹謗。罵倒等概ね同一なり。

【破竹の勢】(ハチクノイキホヒ) 竹の割れる様な凄じい勢ひ。

【抱負】(ハウフ) 自己の心に抱いてゐる考。

【破廉耻】(ハレンチ) 正道に外れたる恥しき行。

【跋扈】(バツコ) はびこる。跳梁跋扈など言ふ。

【腹が黒い】(ハラガクロイ) 正道でないこと。腹のよくないこと。

【覇氣がある】(ハキガアル) 人を壓するやうな元氣々慨があること。

【花より團子】(ハナヨリダンゴ) 花より實を採る。理想よりは現實のこと。

【抱腹絶倒】(ハウフクゼットウ) おかしくて腹を抱へて大笑ひすること。

【版圖】(ハント) 國の領土のこと。

【波瀾重疊】(ハランチョウウヂョウ) 生活上に問題屈折の多いことを云ふ。

【半疊を入れる】(ハンジョウウライレル) 人の話談、論說の間に一寸一言揶揄的言辭を放つこと。からかひ半分の一言。

二の部

【二重生活】(ニヂュウセイクワツ) 自分の理想が現實されないものと考へて、現實的に妥當な生活をして生きること。例へば心に隠者の生活を求めながらパンのために新聞記者などになつてゐる者の生活。商人でありながら詩人であるが如きものゝ生活など。

【二枚舌】(ニマイジタ) 言語の前後矛盾し又人によつて二様に言ふこと。

【認諾】(ニンダク) みとめ承知すること。

【忍辱】(ニンジュク) はづかしめをしのぶこと。

【行潦】(ニハタツミ) たまりみづ。

【如是我聞】(ニョゼガモン) 我はかくの如く聞きたりの意。

【新墾】(ニヒハリ) 新に開墾すること。

【入舞】(ニフギヨ) 宮中に入り給ふ。

【人間萬事無輪が馬】(ニンゲンバンシサイラウガウマ) 人間の一生はよいと思ふ事が悪かつたり悪いと思ふことがよかつたり分らぬものとの意。

【肉薄する】(ニクハクスル) せまる。身接する迄に近寄る。接戦の意。

【二兎を追ふ】(ニトチオフ) 二道かけて事をする事。

【肉を食ひ骨を舐る】(ニクチクラヒホネチネブル) 徹底すること。

【日量】(ニチウン) ひがさ。

ホの部

【保釋】(ホシヤク) 裁判所が病氣等の事故ある未決の罪人から其の願出を容れて何時でも呼出の有り次第出頭する旨の證書と保証金とを預つて一時之を釋放すること。

【奉陪】(ホウタイ) 謹み承つて陪行ふこと。その旨を奉じて身に行ふこと。

【鋒芒を現す】(ホウバウヲアラハス) 包み隠れて現れなかつた針先のやうな鋭い意氣を現すこと。

【放縱怠惰】(ホウジユウタイダ) やりつばなし。なまけること。

【初旬】(ホフタ) はらばふこと。道ふ。

【望洋の嘆】(ボウヤウノタン) 大海の果しなきが如く、手にあまる事業。成功覚束なき事に悲観す。

【没頭】(ボツトウ) くびをつきこむ。専らその事にたづまはる。熱中する。

【凡庸】(ボンヨウ) つねなみ。

【傍若無人】(ボウジヤクブジン) そばに人の居ないように無禮な振舞。

【放擲】(ホウテキ) なげうつ。やめる。やりばなし等の意。

【翻譯】(ホンヤク) 他國の言語や文章を自國の言語文章に直すこと。

【輔佐】(ホサ) たすけ。

【撲滅】(ボクメツ) うちほろぼすこと。根だやしすること。

【膨脹】(ボウチャウ) ふくれること。

【蒲柳の質】(ホリウノシツ) かよはいこと。

【朴訥】(ボクトツ) 正直で物堅い田舎の人の如きを言ふ。

【暴虎馮河の勢】(ボウコヒョウガノイキホヒ) 大變威勢のよいこと。猛勢のこと。

【凡骨】(ボンコツ) 並の人。一般普通の人で偉人でない人。

【墨守】(ボクシユ) 今迄のことをふみ守る。舊套を墨守等。

へ の 部

- 【剽盜】 (ヘウタウ) おびやかかしぬすむ。剽掠。
- 【漂泊】 (ヘウハク) さまよふこと。さすらふこと。水にたゞよふこと。流浪。漂蕩。漂流。
- 【表彰】 (ヘウシヤウ) あらはしあきらかにすること。
- 【渺茫】 (ベウバウ) 限りなくひろがるさま。
- 【騙取】 (ヘンシユ) かたり取る。
- 【偏頗】 (ヘンパ) 公平でない。不公平なこと。
- 【偏重】 (ヘンチュウ) かたより重んず。
- 【弊履】 (ヘイリ) 古い悪い履物。
- 【鞭撻】 (ベンタツ) むちうちをしますこと。
- 【閉塞】 (ヘイソク) とざしふさぐ。
- 【霹靂】 (ヘキレキ) 大きな音。雷其他大きな音を謂ふ。青天の霹靂の語あり。
- 【僻陬の地】 (ヘキスウノチ) 田舎。山村淋しき片田舎のこと。
- 【睥睨】 (ヘイゲイ) にらみ。
- 【蔑視】 (ベツシ) さげすみ見る。馬鹿にすること。

- 【變態性慾】 (ヘンタイセイヨク) 性的に變つたことをすること。
- 【平々凡々】 (ヘイヘイボンボン) ありふれた普通。

ト の 部

- 【屠殺】 (トサツ) 屠り殺すこと。
- 【訥辯】 (トツベン) 下手な辯舌。
- 【塗抹】 (トマツ) ぬりつけること。ぬりけすこと。
- 【塗炭の苦】 (トタンノクルシミ) 非常な苦しみ。
- 【徒黨】 (トタウ) 事を共にしようとする團結。
- 【屠所の羊】 (トシヨノヒツジ) 屠所につれて行かれる羊。死の刻々に近づく譬。
- 【土匪】 (ドヒ) あだをなす土民。
- 【統轄】 (トウカツ) すべをさめること。
- 【統治權】 (トウヂケン) 國を治むる唯一最高の權力。
- 【特赦】 (トクシヤ) 天皇の大權命令を以て、特定の犯人に對し確定した刑罰の全部の執行を免すること。
- 【督勵】 (トクレイ) とりしまりはけますこと。

- 【儉安姑息】(トウアンコソク) 安逸をむさほり徹底的に事をせぬこと。
- 【騰貴】(トウキ) あがる。
- 【當路者】(トウロシヤ) 其局に當る者。當局者に同じ。
- 【獨斷專行】(ドクダンセンカウ) 人に相談せず獨りで勝手に事を行ふこと。
- 【都鄙】(トヒ) 都市と田園。
- 【怒髮天を衝く】(ドハツテンチツク) 毛髪をさか立て非常に怒ること。
- 【徒爾】(トジ) むだごと。
- 【踏襲】(トウシユウ) 以前のことをふみつぎ行ふこと。
- 【度外視す】(ドグワイシス) 必要以外に見る。重要視の反對。
- 【刀圭家】(トウケイカ) 醫師のこと。
- 【彌膿】(ドクロ) 死人の頭蓋骨。
- 【得失相償ふ】(トクシツアヒツグナフ) そんとかが差引同じ位のこと。
- 【登龍門】(トウリウモン) 上に登り出世する關門。
- 【洞察】(ドウサツ) よく觀察すること。
- 【淘汰】(トウタ) ゑりふるつて悪いのをはね除けること。

【陶冶】(トウヤ) やききたへること。教育と略同じ。

チの部

- 【緘密】(チミツ) こまかなこと。くはしいこと。
- 【衷心】(チユウシン) まこと。本心。
- 【誅戮】(チユウリク) 罪ある者を殺す。
- 【懲罰】(チョウバツ) こらしめて罰を加ふること。
- 【闖入】(チンニフ) 突然はいちこむこと。
- 【陳情】(チンジャウ) 下から上へ情をのべてたんがんすること。
- 【痴情】(チジヤウ) 淫猥なる男女の性的關係。色戀の道。
- 【陳腐】(チンプ) ありふれて、古めかしいこと。
- 【沈思默考】(チンシモクカウ) ちつと靜に深く考へること。
- 【逐鹿戰】(チクロクセン) 大勢で勝を争ふこと。選舉の當選を争ふ等。
- 【鎮撫】(チンプ) しづめ安んずること。
- 【昵懇】(チツコン) 親しいこと。心やすいこと。
- 【逐條審議】(チクデウシンギ) 條を逐ふて一條々々審議すること。

【躊躇逡巡】(チュウチュウシユンジュン)ためらつてまごつくかたち。

【誅求苛察】(テウキウカサツ)監督や取締や政治等が嚴に過ぎ不可なること。

【熟慮斷行】(ヂクリョダシカウ)よく考へて之を行ふには斷然行ふこと。

【治に居て亂を忘れず】(チニキテランチワスレズ)平和に處して亂世を忘れぬこと。平常事なき

時に事ある時の用意をすること。

【竹帛の功】(チクハクノコウ)書物の上に勳功を残し止むること。

【直情經行】(チヨクジヤウケイカウ)性質が素直で邪しまのないこと。

【朝三暮四】(チヨウサンボシ)非常に忙しいこと。多忙なかたち。

【朝令暮改】(チヨウレイボカイ)法令改廢の激しいこと。變改の多いこと。

リ の 部

【輪廻】(リンエ)人の靈魂の、肉體と共に死せず他の肉體に限りなくうつり行くこと。

【倫常】(リンジャウ)人倫の常の道。

【綸言汗の如し】(リンゲンアセノゴトシ)王侯貴人の言は口外に出たら引込ぬ。

【龍顏】(リユウガン)天子の御尊顏。

【龍蟻虎搏】(リユウジヨウコハク)龍と虎と相闘ふやうな激烈な戦ひ。

【龍頭蛇尾】(リユウトウダビ)初めは大きなふれこみで、其實最後には蛇の尾のやうに小くなる

こと。龍の頭で蛇の尾のやう。

【流言蜚語】(リユウゲンヒゴ)根據なき風説。

【立脚點】(リツキヤクテン)たちは、世上に進む立場。

【臨機應變】(リンキオウヘン)時と場合とに付適切に處すること。

【理不盡】(リフジン)理論條理を度外したる亂暴なる所置。

【吝嗇】(リンシヨク)深く物をしむをすること。やぶさか。

【利己主義】(リコシユギ)自己の利益のみ念とする主義。

ル の 部

【縷述】(ルジュツ)細々と説くこと。

【流轉】(ルテン)因果の相續いで極りないこと。

【流浪】(ルロウ)墮落してぶら／＼渡り歩くこと。

【累進】(ルキシン)しきりにすすみのほること。

【累卵の如し】(ルイランノゴトシ)卵を累ね積んだやうに危いこと。

【類例】(ルイレイ)事柄の同じやうな他に例のあること。

【類似】(ルイジ) 似てゐること。一物の他物に似てゐること。

【類推解釋】(ルイスイカイシヤク) 他の解釋を以て同一種類の事を解すること。

【流布】(ルフ) 諸方にひろめること。

【羅織の苦】(ルイセツノクルシミ) 羅目にかゝる。獄舎につながられる。

ヲ、オの部

【謳歌】(オウカ) 衆人の聲をそろへて歌ふこと。轉じて衆人の共に其の徳をほめたゝへること。

【應對流る如し】(オウタイナガル、ゴトシ) うけたたへが水の流るゝやうに言葉によどみがな
い。

【温藉】(タンシヤ) 度量廣々、舉動しとやかなこと。

【温情主義】(タンジヤウシユギ) 親愛なる態度で人に對して、自然と己を敬ひ従はしめるやり
口。

【温故知新】(タンコチシン) 右をたづねて新らしきを知る。

【温厚篤實】(タンコウトクジツ) 温和で落付て人格の高い人のこと。

【恩威並び行はる】(オンイナラビオコナハル) 威嚴があつて而も温情あること。

【恩赦】(オンシヤ) 大赦、特赦等犯罪赦免の恩命。

【恩賜】(オンシ) 陛下、皇室より御下け賜はること。

【穩波滄澗】(タンハレンエン) 靜かな波が寄せること。水面靜平のこと。

【憶測】(オクソク) はかり知る、推知、揣摩憶測等言ふ。

【王化】(チウクワ) 陛下、朝廷の御威光。

【横溢】(チウイツ) 一ぱいにあふれ漂ふて居ること。

【大内山】(オホウチヤマ) 皇居のこと。宮城。

ワの部

【和製】(ワセイ) 日本製品。

【和樂】(ワラク) たのしみ。

【和氣霽々】(ワキアイク) 平和で仲のよい睦じいこと。

【和文英譯】(ワブンエイヤク) 日本の文章を英語にやくすこと。

【感瀟】(ワクヂキ) まどいおほれる。

【矮軀】(ワイク) 低い小さい身體。

【猥褻】(ワイセツ) 人の劣情を挑發するやうな事。

【宛白】(ワンバク) あばれんほうな小兒のこと。

カ の 部

【可責】 (カシヤク) 叱り責めること。

【酷詭】 (カイギヤク) じやうだん。おどけ。

【綱紀肅正】 (カウキシユクセイ) 國家を治める規則や政治や又は社會の秩序をたてる道徳をきちんと正しくすること。

【陽炎】 (カゲロフ) 快晴の日に蜘蛛の網のやうなものが空中に見える現象。

【喝破】 (カツバ) 聲を轟まして他の辭を抑止すること。どなりつける。邪を闢き蒙を挑して眞理を説きあかすこと。

【割愛】 (カツアイ) をしいけれどもする。戦慄すること。

【寒心】 (カンシン) 心を寒からしめる。驚き恐れてぞつとする。戦慄すること。

【緩和】 (カンワ) 強烈なるものをゆるめやはらげること。

【隔靴搔痒の感】 (カツカサウヤウノカン) 靴を隔て痒きをかき感じのことで物たりない徹底しない感じのこと。

【寡言篤行】 (カゲントクカウ) 口數をきかずして行ひの正しいこと。

【我田引水】 (ガデンインスイ) 我が田へ水を引く、自己の利慾のみ欲して他人の利益を度外にする

る得手勝手。

【快刀亂麻を断つ】 (カイトウランマヲタツ) 事物の處理が適切敏速なること。

【侃々諤々】 (カンクガクク) 議論を盛にたゝかはすこと。

【核心に觸る】 (カクシンニフレル) 問題の中心に觸れること。

【環境】 (カンキヤウ) 人の生活の周圍の狀況。境遇と殆ど同じ。

【語るに落ちる】 (カタルニオチル) かくそうとする事がつい話す事に知らず識らず言ふて仕舞ふこと。

【感激】 (カングキ) いたく深く感心すること。

【感銘】 (カンメイ) 感じて其事を深く心肝に記銘する意。

【擴張】 (カクテヨウ) ひろげる。大きくする。盛にする。

【閉却】 (カンキヤク) 忘られる。輕んぜられること。

【葛藤】 (カツトウ) いきさつ。ごたごた。からみあつた問題。

【概念】 (ガイネン) あらまし。おゝよその觀念。大體の觀念。

【渴しても盗泉の水を飲まず】 (カツシテモトウセンノミヅヲナマズ) のどがかはいて死すとも盗んだ水などのまね、何處までも正しい心。

- 【客死】 (カクシ) 旅又は外國で死亡すること。
- 【海中に投ず】 (カチユウニトウズ) 問題の中に引きこまること。
- 【勝手遠ひ】 (カツテチガヒ) 馴れぬ事柄で様子が遠ひ分らぬこと。
- 【勝て兜の緒を締る】 (カツテカブトノヲチシメル) 戦に勝つても直ぐ油断せぬこと。
- 【恢復】 (カイフク) なほる。又奮へかへること。
- 【藤辨慶】 (カゲベンケイ) かけで人の居ない所で威張ること。
- 【過渡期】 (カトキ) 舊から新へ移變る中間期。
- 【慨歎】 (ガイタン) なげく。
- 【攪拌】 (カクハン) かきまはす。
- 【頑迷固陋】 (ガンメイコロウ) かたくて意地張り強くて人の言を聴かぬこと。
- 【閑居】 (カンキヨ) 静な閑な住居。
- 【頑強】 (ガンキヤウ) つよい。
- 【確執】 (カクシツ) 互にかたかたつて譲らぬ意見。争ひ事。
- 【我を折る】 (ガヲラル) 強硬な意見を捨て讓歩すること。
- 【臥薪嘗膽】 (ガシンシヤウタン) 薪に臥し膽をなむ。非常な苦心をすること。

- 【肩を持つ】 (カタヲモツ) ひいきをし、かばふこと。助けること。
- 【薑餅に歸す】 (ガベイニキス) 無駄になつた。徒勞に終つたこと。
- 【間髪を容れず】 (カンバツヲイレズ) きはどい、非常に急なきはどいこと。
- 【早魃】 (カンバツ) 日でり。雨が降らぬ天氣つゞきのこと。
- 【解讓】 (カイラン) 船のともづなを解く。出帆すること。
- 【邂逅】 (カイゴウ) 消息の分らなかつた人に巡り逢ふこと。
- 【蝸牛角上の争】 (カギウカクジャウノアラソヒ) つまらぬ小さいことの争。
- 【狡猾】 (カウカツ) づるい。こすい。利己主義の卑しい心。
- 【貫徹】 (カンテツ) つらぬく。やり通す。目的のかんてつ等。
- 【寛恕】 (カンヂヨ) ゆるす。
- 【寛容】 (カンヨウ) をだやかな態度。
- 【完結】 (カンケツ) 物ごとが出来上つて終つたこと。
- 【簡潔】 (カンケツ) かんたんでさつぱりしていること。

ヨの部

- 【容装】 (ヨウサウ) 姿態服装。

【容解】 (ヨウカイ) とかす。

【容赦】 (ヨウシヤ) ゆるす。

【容態】 (ヨウタイ) 病氣の模様状態。

【容喙】 (ヨウカイ) 口を入れる。横から口ばしを入れること。

【抑制】 (ヨクセイ) をさへる。せいする。

【抑留】 (ヨクリユウ) 自由を制し留め置くこと。

【與黨】 (ヨトウ) 政府派の政黨。

【輿論】 (ヨロン) 世間多數の人の賛同する意見主張。

【擁護】 (ヨウゴ) かばひまもる。

【豫感】 (ヨカン) 豫めの感じ。

【豫波】 (ヨハ) なごり。又、影響。

【餘弊】 (ヨヘイ) 残つた弊害。

【羊頭狗肉の策】 (ヨウトウクニクノサク) 羊の肉を賣る如く見せて犬の肉を賣るが如きごまかすこと。

【宵月夜】 (ヨヒヅキヨ) 宵の間のみ月の出る夜。

【黄泉】 (ヨミ) 死んで魂の行くといふ所。

【欲望】 (ヨクバウ) もとめのぞむこと。

【翼賛】 (ヨクサン) そばから力をそへて助けること。

【踊躍】 (ヨウヤク) をどりあがること。

【膺懲】 (ヨウチヨウ) うつてこらすこと。

夕の部

【大義】 (タイギ) 君臣間の大道。

【大器晩成】 (タイキバンセイ) 大才は早熟することなく、晩く成就するものであるといふ意。

【大地】 (タイクワイ) 大地。

【台覧】 (ダイラン) 高貴の人の物を御覽あせらるゝこと。

【台臨】 (ダイリン) 高貴の人の御臨席になること。

【泰斗】 (タイト) 人に仰ぎ尊ばるゝ者をいふ。

【大赦】 (タイシヤ) 刑罰を許す恩典。

【據頭】 (タイトウ) 段々頭をあけ勢のつくこと。

【大同小異】 (ダイドウセウイ) 大體は同じで少しの部分が異つてをること。

【馳騁】(タイトウ) 春ののどかなさま。

【覆腹】(タイハイ) くすねすたること。

【逮捕】(タイホ) 召し捕ること。

【暗晦】(タウクワイ) あとをくらますこと。

【道化】(ダウケ) おどけ。滑稽。

【淘汰】(タウタ) 不用のものを除くこと。洗ひ去ること。

【當路之人】(タウロノヒト) 國家の樞要の地位にあつて治を掌る人。

【卓見】(タクケン) すぐれた意見。

【唾棄】(ダキ) 唾をはきかけて棄る如くひどく忌み嫌ふこと。

【竹の園生】(タケノソノフ) 親王又は皇子の異稱。

【妥協】(ダケフ) 双方の折合をつけること。

【他山の石】(タザンノイシ) 他山は山の名。他山の石は極めて粗悪な石である。然しこれで玉を

磨くことが出来る。よつて悪人も善人の徳器をみがく助となるといふ喻。

【短刀直入】(タントウチヨクニウ) 手取り早いこと、直に問題に觸ること。

【達観】(タツクワン) 充分に物の道理を見て殘すところのないこと。

【體驗】(タイケン) 身を以て經驗すること。

【彈劾】(ダンガイ) 排斥攻撃すること。

【怠慢】(タイマン) 怠りなまける。

【打破】(ダハ) 打ち破ること。

【他聞】(タブン) 他人の耳に入ること。

【墮落】(ダラク) 品行をさます、品性のいやしくなること。

【赧顔】(タイガン) 赤面すること。

【大厦高樓】(タイカコウロウ) 宏壯雄大な建物、大きな家屋。

【坦塊】(タンクワイ) 胸にわだかまりのないこと。

【斷腸】(ダンチャウ) 悲しみの甚だしいこと。

【端緒】(タンチヨ) いとぐち。こぐち。

【擔保】(タンボ) 抵當。

【貪婪】(タンラン) 欲の極めて深いこと。

【圓樂】(ダンラン) 楽しい會合。

【膽大心小】(タンダイシンセウ) 度胸は大きくして用心深いこと。

レの部

- 【連署】(レンシヨ) 共に姓名を連ね記すること。
【連綿】(レンメン) 引きつゞいて絶えないこと。
【憐憫】(レンピン) あはれむこと。
【列聖】(レツセイ) 代々の天子。
【速速】(レウエン) 速いこと。
【瞭然】(レウゼン) 分명한さま。はつきりしてゐるさま。
【了悟】(レウゴ) さとること。
【玲瓏】(レイロウ) 玉の聲。又、美しく尤りかゞやくさま。
【伶俐】(レイリ) かしこいこと。
【黎明】(レイメイ) 夜あけがた。
【靈廟】(レイベウ) たまや。
【隷屬】(レイゾク) 他人の支配に屬すること。
【勵精】(レイセイ) 精神をはげますこと。ふるひはげむこと。
【囹圄】(レイゴ) 牢獄。

- 【厲行】(レイコウ) 嚴重に履行すること。
【靈柩】(レイキウ) 死骸を入れる柩。
【例證】(レイシヤウ) 前例のあることにより證すること。
【料簡】(レウケン) 思案。かんがへ。
【廉潔】(レンケツ) 恥を知り正道を履み、物質に恬淡なること。
【零落】(レイラク) おちぶれること。
【輦轂】(レンコク) 天子の御乗物。
【聯想】(レンサウ) あることに關聯して、他のことを思ふこと。

ソの部

- 【付度】(ソンタク) 他人の心中を思ひはかること。
【尊屬】(ソンゾク) 父母と同等以上の血族關係ある者。
【遜色】(ソンシヨク) 劣つてゐるさま。
【存恤】(ソンジュツ) あはれみめぐむこと。
【疎漏】(ソロウ) おろそか。ておち。
【素養】(ソヤウ) 平素の修養。

【粗笨】(ソホン) あらくて、つたないこと。

【素封】(ソホウ) 財産家。

【素朴】(ソボク) かざりけなく、すなほなこと。

【粗放】(ソハウ) あらいこと。

【率直】(ソツチヨク) すなほ。

【卒爾】(ソツジ) 軽々しくあわただしいさま。

【疏通】(ソツウ) 滞りなく通ずること。

【措置】(ソチ) 取りはからひ。

【措大】(ソダイ) 書生。

【祖宗】(ソソウ) 先祖。

【蘇生】(ソセイ) よみがへること。

【訴訟】(ソシヨウ) うつたへ。

【組織】(ソシキ) 物を組み立つること。

【咀嚼】(ソシヤク) よくかみ食ふこと。よく物事を了解すること。

【阻止】(ソシ) さへぎりとどめること。

【沮喪】(ソソウ) くじけて元氣なくなること。

【齟齬】(ソゴ) くひちがひ。あてはずれ。

【狙撃】(ソゲキ) ねらひうち。

【疎遠】(ソエン) うといこと。

【素懷】(ソクワイ) 平素の願。

【測量】(ソクリヨウ) はかること。

【束縛】(ソクバク) 自由を奪ふこと。

【俗塵】(ソクジン) 世間の煩はしいこと。

【息災】(ソクサイ) 無事なこと。

【惻隱の心】(ソクインノココロ) あはれみ痛はしく思ふ心。

【疎隔】(ソカク) うとくなること。

【總攬】(ソウラン) 一つにすべること。

ツの部

【追跡】(ツイセキ) あとをつけること。

【追従】(ツイシヤウ) へつらふこと。

【通牒】(ツウテフ)書付で通知すること。

【通達】(ツウダツ)その道によく熟練してゐること。

【杜撰】(ツサン)正確でないこと。

【痛痒】(ツウヤウ)痛さと痒さ。痛痒を感じずと言へば自分に利害關係のないこと。

【痛罵】(ツウバ)ひどくのゝしること。

【通好】(ツウカウ)よしみを通ずること。

【津々浦々】(ツツウラウラ)國の端から端までのこと。

【追善】(ツキゼン)死者の冥福を祈つて、善業をなすこと。

【頭腦明晰】(ヅノウメイセキ)頭がよくて英敏なこと。

【葛籠】(ツヅラ)衣類などを入れる籠。

【痛快】(ツウクワイ)小氣味よいこと。

ネの部

【熱中】(ネツチュウ)その事に一心不乱に心をそそぐこと。

【饒舌】(ネウゼツ)おしゃべり。

【捏造】(ネツザウ)ないことを實際あつたやうにしらへていふこと。

【念願】(ネングワン)心の願ひ。

【熱鬧】(ネツタウ)人のこみあうてさわがしいこと。

【倭奸】(ネイカン)うはべは正直で内心のよこしまなもの。

【寧日なし】(ネイジツナシ)忙しく事故多くて安逸の日なきこと。

【年中行事】(ネンチュウギヤウジ)一年中にきまつて行ふこと。

【捻出】(ネンシュツ)無理算段してこしらへ出すこと。

【年齒】(ネンシ)年齢と同じ。

ナの部

【捺印】(ナツイン)印をおすこと。

【備殺】(ナウサツ)心を苦しめ悩ますこと。

【内帑】(ナイド)君主の財貨。

【内證】(ナイシヨウ)内々のこと。うちわのこと。

【内助】(ナイジヨ)内部の助。主として妻の夫を助けることをいふ。

【内憂外患】(ナイイウグワイクワン)國內における憂と外國から攻めて來る患。

【内偵】(ナイテイ)内密に偵察すること。

【名を竹帛に垂る】(ナナチクハクニタル) 名を史の上に載せて、後世に傳へる。

【内規】(ナイキ) うちわの規則。

【難局】(ナンキョク) 處理するに困難な場合。

【苗代】(ナハシロ) 苗を育てる田。

【内諾】(ナイダク) 内々非公式の承諾。

【曩日】(ナウジツ) 先日。

ラの部

【濫用】(ランヨウ) みだりに用ゐること。

【懶惰】(ライダ) なまけること。

【辣腕】(ラツワン) すごい手腕。

【樂天】(ラクテン) 自分の境遇に安んずること。

【浪費】(ラウヒ) むだづかい。

【狼狽】(ラウバイ) うろたへさわぐこと。

【磊落】(ライラク) 志の大きく、小事に拘泥せぬさま。

ウの部

【蘊奥】(ウンアウ) 學問技藝の奥深い所。

【迂遠】(ウエン) まはりどほいこと。

【宇宙】(ウチウ) 天地四方と古往今來。

【烏合の衆】(ウガウノシウ) 統一のない民衆。

【有爲轉變】(ウキテンベン) 浮世の物事は移り變つて止まらぬこと。

【雲烟過眼】(ウンエンクワガン) 一時の快を取つて、長く執着せぬこと。

【胡亂】(ウロン) 怪しいこと。

【迂闊】(ウクワツ) 事情にうといこと。

【鬱憤】(ウツブン) 長い間腹の中に止めておいた憤。

【卯月】(ウヅキ) 陰曆四月の稱。

クの部

【熏陶】(クンタウ) 教育すること。

【頑冥】(グワンメイ) 頑固で物の道理のわからぬこと。

【款待】(クワンタイ) 親切にもてなすこと。

【緩急】(クワンキフ) 危急の意に用ふ。

- 【官衝】(クワンガ) 役所。
- 【具體的】(グタイテキ) 個々の事物の實體に關すること。
- 【果斷】(クワダン) 思ひ切りよく物事を行ふこと。
- 【光風霽月】(クワウフウセイゲツ) 心の氣高く清らかなことを、雨後の風月にたとへた語。
- 【具申】(グシン) 事情を上申すること。
- 【曲者】(クセモノ) わるもの。

ヤの部

- 【野蠻】(ヤバン) 人智のひらけぬこと。
- 【野心】(ヤシン) そむく心。馴れなつかぬ心。
- 【躍然】(ヤクゼン) 躍り立つさま。
- 【野黨】(ヤトウ) 政府黨でない即野にある黨。
- 【擲擲す】(ヤユス) からかふこと。
- 【羊腸】(ヤウチョウ) 羊の腸のやうに曲つてをること。つららむ。

マの部

- 【麻著】(マンチャク) 欺くこと。たぶらかすこと。

- 【網羅】(マウラ) 残らず集め收めること。
- 【反省】(マウセイ) よくよく反省すること。
- 【盲從】(マウジユウ) 最非善惡を辨へずして、わけもなく従ふこと。
- 【高引】(マンビキ) 物を買ふふりをして品物をかすめ盜むこと。
- 【枚舉】(マイキョ) 物を一つ一つかぞへあぐること。
- 【抹殺】(マツサツ) ぬり消すこと。

ケの部

- 【獻身】(ケンシン) 我が身の利害を考へないで力を盡すこと。
- 【牽制】(ケンセイ) 引きとどめて自由を妨げること。
- 【乾坤一擲】(ケンコンイツテキ) 乾坤は天地。自分の全滅を賭けて事をなすをいふ。
- 【懸隔】(ケンカク) かけはなれてゐること。
- 【脅迫】(ケフハク) おびやかし迫ること。
- 【懈怠】(ゲタイ) 怠ること。なまけること。
- 【下手人】(ゲシユニン) 自ら手を下して人を殺した者。
- 【矯正】(ケウセイ) ためる。ただす。

【昏暈】 (ケイラ) 見まはつて非常をいましむること。

【僥倖】 (ゲウカウ) こぼれさいわい。

【敬虔】 (ケイケン) うやまひつつしむこと。

【炯眼】 (ケイガン) 鋭い眼力。

【鶏口牛後】 (ケイコウギウゴ) 鶏口は小なるも深く上につくこと、牛後は大きい汚いもの、あ
とにつくこと。

【迎合】 (ゲイガフ) 他人の機嫌を察してへつらひ従ふこと。

フの部

【紛糾】 (フンキユウ) 物事のもつれ亂れること。

【粉骨碎身】 (フンコツサイシン) 身を粉にして働くこと。

【雰圍氣】 (フンキキ) 地球を包む大氣。或氣分の漂ふ其一帶の範圍。

【憤慨】 (フンガイ) なげきいきどほること。

【浮浪】 (フラウ) さまよふこと。

【不逞】 (フテキ) 行爲のよくないこと。

【拂底】 (フツテイ) 品物の缺乏すること。

【負擔】 (フタン) 身に引受けること。

【部署】 (ブショ) 手くばり。手わけ。

【誣告】 (フコク) 無實のことを偽つて人を告訴すること。

【輻輳】 (フクソウ) 寄り集ること。

【覆轍】 (フクテツ) 物事の失敗のあとをいふ。

【不遇】 (フグウ) 不しあはせて、相當の立身出世の出來ぬこと。

【馥郁】 (フクイク) よい香のするさま。

【布疋】 (フエン) のべひろげること。

【風紀】 (フウキ) 風習の上の規律。

【風前の燈】 (フウゼンノトモシビ)

【諷刺】 (フウシ) それとなくそしること。あてこすり。

【浮華放縱】 (フカホウジュウ) うはつ調子でやりつばなし。

コ の 部

【後裔】 (コウエイ) 子孫。

【口角沫を飛ばす】 (コウカクアワヲトパス) はげしく言論する。

- 【貢獻】 (コウケン) 力をつくすこと。
- 【巷説】 (コウセツ) 世上の噂。
- 【拘泥】 (コウデイ) 或事にかゝはること。
- 【肯定】 (コウテイ) 承認すること。
- 【口吻】 (コウフン) 口ぶり。いひやう。
- 【吳越同舟】 (ゴエツドウシウ) 敵味方共に同じ舟に乗る。
- 【狐疑】 (コギ) 疑うてためらふこと。
- 【國是】 (コクゼ) 輿論の認めてよいとする國政の方針。
- 【沽券】 (コケン) 價值。
- 【糊口】 (ココウ) 生活すること。
- 【虎視眈々】 (コシタタン) 虎の目を張つて下を見るやうに威嚴あるさま。
- 【後生】 (ゴシヤウ) 死後の世。
- 【屈從】 (コジユウ) 貴人の傍にはんべること。
- 【鼓吹】 (コスイ) 勢をつけること。
- 【姑息】 (コソク) 一時のまにあはせ。

- 【糊塗】 (コト) 一時しのぎのごまかし。
- 【鼓腹擊壤】 (コフクゲキジャウ) 天下の太平を楽しむこと。
- 【顧盼】 (コベン) ふりかへつて見ること。
- 【固陋】 (コロウ) 見聞が狭くて頑固なこと。
- 【混淆】 (コンカウ) 入りまじること。
- 【言語道斷】 (ゴンゴダウダン) 甚だしいひがごと。
- 【混沌】 (コントン) 物事の區別の不明なさま。
- 【金輪際】 (コンリンザイ) 何處までも。

エの部

- 【演武】 (エンブ) 武藝を稽古すること。
- 【演釋】 (エンエキ) のべること。布衍。
- 【冤罪】 (エンザイ) むぢつの罪。
- 【沿革】 (エンカク) うつりかはり。
- 【淵源】 (エンゲン) 或事物の根源。
- 【圓轉滑脫】 (エンテンカツダツ) 言葉上手でじよさいないこと。

【疫病】 (エキビヤウ) 流行病。

【閲覧】 (エツラン) しらべ見ること。

【搖籃】 (エウラン) 子供を寝かす搖りかご。轉じて故郷の地をいふ。

【謁見】 (エツケン) 目上の人に見えること。

【窺覓】 (エウテウ) しとやかなこと。奥ゆかしいこと。

【叙慮】 (エイリヨ) 天皇の思召。

【天折】 (エウセツ) わかじに。

テの部

【天倫】 (チンリン) 兄弟。

【顛末】 (チンマツ) 事の始から終まで。

【天稟】 (チンピン) 天から受けた性質。

【天に應じ人に順ふ】 (チンニオウジヒトニシタガフ) 天命に應じ、人爲にしたがうて事をなすをいふ。

【輾轉反側】 (チンテンハンソク) ねがへりうつこと。

【天真爛漫】 (チンシンランマン) すこしもかざることなく、心のまゝを言語舉動にあらはす事。

【恬澹】 (チンタン) 心の靜かにやすらかなこと。

【天誅】 (チンチュウ) 天罰として殺すこと。

【醜梁】 (チウリヤウ) かけまはること。

【天網恢々疎にして漏さず】 (テンモウカイカイソニシテモラサズ) 天の網は廣大で、その目は疎いけれども悪い事をした者は何時か必ず其網にかゝつて捕はるの意。

アの部

【懊惱】 (アウナウ) 心をなやますこと。

【離解】 (アクサク) こせこせするさま。

【幹旋】 (アツセン) 他人の爲に世話すること。

【壓倒】 (アツクウ) 他人を凌ぐこと。

【軋轉】 (アツレキ) きしること。人と人との不和をいふ。

【押收】 (アフシウ) 人民の所有物を官府に没收すること。

【蛙鳴蟬噪】 (アメイゼンサウ) つまらぬ者共がつまらぬ事をいひさわぐ聲。

【阿諛】 (アユ) おもねりへつらふこと。

【亞流】 (アリウ) 第二位に立つ人。

- 【安心立命】 (アンシンリツメイ) 天命に安んじて、心に苦悶なきこと。
- 【暗中摸索】 (アンチュウモサク) たしかにわからぬことを想像にて推量すること。
- 【暗闘】 (アントウ) 表に見えない内部でひそかに争ふて居ること。
- 【暗雲低迷】 (アンウンテイメイ) 何事か大事が起りさうな恐しい模様のこと。
- 【安堵】 (アンド) 安心におなじ。
- 【曖昧】 (アイマイ) はつきりせぬこと。

サの部

- 【座右銘】 (ザイウノメイ) 常に自分の訓戒となす言葉。
- 【蹉跌】 (サテツ) ころぶ。失敗する。
- 【裁可】 (サイカ) 君主が臣下の奏議などを許可したまふこと。
- 【詐偽】 (サギ) いつはり。
- 【猜疑】 (サイギ) うたがふこと。
- 【造化】 (ザウクワ) 造物者をいふ。
- 【造詣】 (ザウケイ) 學問技藝の深く進み達してをること。
- 【操觚】 (サウコ) 筆を執ること。文人を操觚者といふ。

- 【相殺】 (サウサイ) 互に差引すること。
- 【蒼生】 (サウセイ) 人民。
- 【左傾思想】 (サケイシサウ) 危険思想。
- 【糟粕】 (サウハク) かす。
- 【斬新】 (ザンシン) 新奇なこと。
- 【酸鼻】 (サンビ) 悲しみ痛むこと。

キの部

- 【禁中】 (キンチュウ) 宮中。
- 【襟度】 (キンド) 度量。
- 【金科玉條】 (キンクワギョクテウ) 完全な規定若くは訓戒。
- 【均衡】 (キンカウ) 平均を保つこと。
- 【毀譽褒貶】 (キョウハウヘン) ほめられることとわるくいはれること。
- 【去就】 (キョウシウ) 背くと従ふと。
- 【玉碎、瓦全】 (ギョクサイ、ワゼン) 偉業をなして死ぬる事と、何事もなさずして、徒らに生き存へること。

【曲學阿世】(キヨクガクアセイ) 學問を曲解し、強ひて世の人の氣に入るやうな説を立ててへつらふこと。

【恐喝】(キヨウカツ) おどすこと。

【虐待】(ギヤクタイ) しひたけること。

【突應】(キヤウオウ) 御馳走。

【詭辯】(キベン) 理にあはぬことを、あつたやうに曲解すること。

【羅絆】(キバン) ほだし。

【木に縁りて魚を求む】(キニヨリテウヲモトム) 求めて求め得ず、勞して功なき事の譬。

【儀仗】(ギヂヤウ) 護衛兵。

【奇蹟】(キセキ) 自然法にあり得ぬ不思議な現象。

【機先を制す】(キセンヲセイス) 敵に先んじて事を行ひ、敵をおさへること。

【忌憚】(キタン) 忌み憚ること。

【機智】(キチ) よくはたらく智慧。

【疑心暗鬼を生ず】(ギシンアンキヲシヤウズ) 我が心に疑ひ恐るれば、その心から自ら種々の恐しい思想の湧き出でるをいふ。

【騎虎の勢】(キコノイキホヒ) やりかけて中止することの出来ぬ形勢。

【規矩準繩】(キクジユンジョウ) 法則。

【模範】(モカン) 模範。手本。

【義捐】(ギエン) 自分の財を他人に施すこと。

【九牛の一毛】(キユギユウノイチモウ) 澤山の中の最小部分。

【鳩首濶議】(キユウシユギョウギ) 人を集めてよく相談すること。

【杞憂】(キイウ) 取りこし苦勞。

【奇禍】(キクワ) 思ひもよらぬ災難。

【犠牲】(ギセイ) いけにへ。

【狂瀾怒濤】(キヤウランドタウ) 荒れ狂ふ波。

ユの部

【由来】(ユライ) 物事の來歴。

【勇猛精進】(ユウマウシヤウジン) 向上進歩をつとめておこたらぬこと。

【雄圖】(ユウト) 大きなもくろみ。

【融通】(ユウヅウ) さはりなく通すること。

- 【勇退】 (ユウタイ) 未練なく官職などから退くこと。
- 【融解】 (ユウカイ) 固体がとけて液体となること。
- 【勇往邁進】 (ユウワウマイシン) いさましく進むこと。
- 【唯物主義】 (ユイブツシユギ) 金銭物質を尊ぶ主義。
- 【遺誠】 (ユキカイ) 死後に残した戒。
- 【優勝劣敗】 (ユウショウレツバイ) 優は勝ち劣は敗ること。
- 【有司】 (ユウシ) 國の公職にある者。
- 【遊山】 (ユサン) 遊樂に出かけること。
- 【滄盟】 (ユメイ) 約束をたがへること。

メの部

- 【面皮を剥ぐ】 (メンビチハグ) 厚顔のものを辱しむること。
- 【面詰】 (メンキツ) 前でせめ問ふこと。
- 【面従後背】 (メンジョウウコウゲン) その人の前では従ひ、その人のをらぬ所では悪口をいふこと
- 【冥福】 (メイフク) 死後の幸福。
- 【明媚】 (メイビ) 景色のよいこと。

- 【酩酊】 (メイテイ) 酒によつばらふこと。
- 【明眸皓齒】 (メイボウコウシ) 澄んだ眼、白い歯、容貌よきこと。
- 【明哲】 (メイテツ) よく事理に通じて居ること。
- 【明秋毫を察す】 (メイシウガウチサツス) 眼力が明らかで、小さなものをも見わけける。

ミの部

- 【名聞】 (ミヤウモン) 世間に聞ゆるほまれ。
- 【微塵】 (ミヂン) ごくちひさなもの。
- 【未曾有】 (ミゾウウ) 前例のないこと。
- 【身を殺して仁をなす】 (ミヲコロシテジンヲナス) 命をなげだして仁の道を行ふこと。
- 【民意尊重】 (ミンイソンチヨウ) 民間の意見を尊重すること。
- 【耳を掩うて鈴を偷む】 (ミミヲオホウテスズヲヌスム) 悪い事をして人の聞くことを恐れ、我が耳を掩ふも效なきを言ふ。
- 【密接】 (ミツセツ) 関係の深いこと。

シの部

- 【蹂躪】 (ジウリン) ふみにじること。

【羞恥】(シウチ)はづかしいこと。

【柔能く剛を制す】(ジウヨクガウヲセイスイ)おとなしい者が却つて強い者に勝つての意。

【蒐集】(シウシフ)よせあつめること。

【秋波】(シウハ)ながしめ。

【愁眉を聞く】(シウビヲヒラク)心配事のなくなることをいふ。

【收賄】(シウワイ)まひないを取ることに。

【時代錯誤】(ジダイサクゴ)時代に逆行する事柄。

【嵐を逐ふ者は山を見ず】(シカヲオフモノハヤマヲミズ)一方に心を奪はれる者は他を顧みぬといふ意。

【自家撞着】(ジカドウチャク)言論の辻つまのあはぬこと。

【自業自得】(ジゴフジトク)自分で悪い事をすれば、その報は自分にかへつてくるといふ意。

【醜態】(シウタイ)醜いかたち。

【新界】(シカイ)その社会。

【至言】(シゲン)極めてもつともな言葉。

【獅子心中の蟲】(シシシンチュウノムシ)禍は内部から生ずるものであるといふ譬。

【思索】(シサク)考へもとめること。

【新陳代謝】(シンチンタイシヤ)古いものと新しいものが入りかはること。

【諮詢】(シジュン)尋ね相談すること。

【自首】(ジシユ)自分の罪を自ら申し出ること。

【神出鬼没】(シンシユツキボツ)出たり引込んだりする事の早いこと。

【指弾】(シダン)排斥すること。

【自然淘汰】(シゼンタウタ)外界の状態に適した者は競争に勝つて生存し、適しない者はまけて死滅すること。

【使巻】(シソウ)そそのかしてつかふこと。

【四通八達】(シツウハツダツ)四方八方に道の通じて居ること。

【桎梏】(シツコク)束縛。

【竝馳躬行】(ジツセンキウカウ)實際に自ら行ふこと。

【執着】(シフジヤク)深く思ひ込んで忘れ得ぬこと。

【四面楚歌】(シメンソカ)四方から反對をうけること。

【殉死】(ジュンシ)主君の死に従うて自殺すること。

- 【遵守】(ジュンシユ)したがひまもること。
 【揣摩臆測】(シマオクソク)推察想像すること。
 【聳動】(シヨウドウ)おそれ驚かすこと。
 【人口に膾炙す】(ジンコウニクワイシヤス)よく人の口に上ることをいふ。
 【宸襟】(シンキン)天子の御心。
 【森羅萬象】(シンラバンシヤウ)宇宙に存在する一切のもの。

ヒの部

- 【敏捷】(ビンセフ)すばしこいこと。
 【顰蹙】(ヒンシユク)顔をしかめること。
 【披瀝】(ヒレキ)心の中をかくさず述べること。
 【冰炭相容れず】(ヒョウタンアヒイレズ)氷と炭とが性質相反しているやうに相容れないこと。
 【譬喻】(ヒユ)たとへ。
 【百尺竿頭一步を進む】(ヒヤクセキカントウイツボラスム)工夫をこらした上に更に工夫を積むこと。
 【皮相】(ヒサウ)物のうはべばかり見て内實を見ぬこと。

- 【微行】(ピカウ)しのびあるき。
 【悲憤慷慨】(ヒフンコウガイ)悲しみ憤るの情。
 【失言】(ヒツゲン)言ひあやまり。
 【批准】(ヒジユン)上奏の文に勅許を與へ給ふこと。
 【鼻祖】(ビソ)元祖。
 【百折不撓】(ヒヤクセツフトフ)幾度失敗しても志を挫かぬこと。

モの部

- 【默契】(モクケイ)黙つてゐながらお互に意志の一致すること。
 【目撃】(モクゲキ)實際に目で見ること。
 【門閥】(モンバツ)家柄。
 【門外漢】(モンダウイカン)其の事に關係のない人。
 【模造】(モザウ)眞似て造ること。
 【模擬】(モギ)にせること。
 【目算】(モクサン)見つもり。
 【盲従】(モウジユウ)事の如何を問はず従ふこと。

【悶絶】(モンゼツ)悶へて氣絶すること。

セの部

【贅言】(ゼイゲン)無用の言葉。

【星霜】(セイサウ)年月。

【脆弱】(ゼイジャク)もろく弱いこと。

【掣肘】(セイチウ)さまたけて自由にさせぬこと。

【清貧】(セイヒン)潔白で貧しいこと。

【濟民】(セイミン)人民を助くる意。

【聖謨】(セイボ)帝王のはかりごと。

【紹介】(セウカイ)引きあはせること。

【逍遙】(セウエウ)そぞろあるき。

【消耗】(セウガウ)消やしへらすこと。

【焦躁】(セウサウ)いらだち、さわぐこと。

【憔悴】(セウスキ)心配して衰へること。

【小心翼翼】(セウシンヨクヨク)用心深いこと。

【消長】(セウチャウ)盛なると衰ふると。

【小成】(セウセイ)すこしばかりの成功。

【碩學】(セキガク)大學者。

【積極】(セキキョク)進むこと、改めること、肯定、正等をあらはす語。

【切齒扼腕】(セツシヤクワン)齒をくひしぼり、腕をおさへ、非常に残念がること。

【席捲】(セキケン)片端から土地を侵略すること。

【折衷】(セツチュウ)物事の中庸を取ること。

【切迫】(セツパク)さしせまること。

【辦理】(セツリ)すべととのふること。

【是認】(ゼニン)よしと認むること。

【捷徑】(セウケイ)近道。

【銓衡】(センカウ)人物を選んで官を授けること。

【詮索】(センサク)たずねさがす。

【潛勢力】(センセイリョク)外部に現れず内にひそんでゐる力。

【善後策】(センゴサク)あとのしまつをよくすること。

【蟬脱】(センダツ)蟬の皮をぬけるやうに超然として世外に脱すること。

【戦々兢兢】(センセンキヤウキヤウ)びくびくすること。

【洗濯】(センデウ)あらひすすぐこと。

【先哲】(センテツ)昔の賢人。

【煽動】(センドウ)すすめおだてること。

【先入主となる】(センニウシユトナル)早く聞いた方が信ぜられやすい。

【羨望】(センバウ)うらやむこと。

【僭越】(センエツ)身分に過ぎた事をなすこと。

【千篇一律】(センベンイチリツ)いつも同じ調子で、變化の乏しいこと。

【政綱】(セイコウ)政治の大綱。

【先覺者】(センカクシャ)一般の人より先に眼覺めたる人をいふ。

スの部

【寸鐵人を殺す】(スンテツヒトヲコロス)短い替句替語を以てよく急所をつくをいふ。

【出納】(スイタフ)金銭物品の出し入れ。

【垂涎】(スイセン)物を欲しがらるさまにいふ。

【衰頹】(スイタイ)おとろへくすること。

【醉生夢死】(スイセイムシ)酒によへるが如く、夢みるが如く、何事もなさずして生涯を送ること。

と。

【瑞相】(ズキサウ)めでたいしるし。

【推薦】(スイセン)人を上へ取り持つこと。

【隨喜】(ズキキ)ありがたがること。

【推敲】(スキカウ)字句を練ること。

【誰何】(スキカ)人の姓名を詰問すること。

【揣摩】(スリ)きんちやくきり。

【宿世】(スクセ)前世。

【趨勢】(スウセイ)なりゆき。

【樞機】(スウキ)肝要な所。

【趨向】(スウカウ)かたむき。

【水泡に歸す】(スイホウニキス)水の泡のやうに何にもならぬこと。

【寸善尺慶】(スンゼンシヤクマ)世の中にはよいことは少くて悪いことが多いといふ意。

- 【數奇】 (スウキ) 時にあはず、世に容れられぬこと。
- 【寸志】 (スンシ) 心ばかりの贈物。
- 【推親】 (スイバン) 人をよい位置に推しすすめること。
- 【崇拜】 (スウハイ) あがめおがむこと。
- 【雲條】 (スキタイ) みどりのまゆすみ、遠山の色の形容。

受験國語講座

各試験問題解答(一)

- 一 左ノ語ニ讀方ヲ附ケ解釋セヨ。
- イ、矛盾 ロ、抽象 ハ、邂逅 ニ、淬厲 ホ、從容
- 【解答】 イ、矛盾 前後相違すること。ロ、抽象、形體のないこと、無形のこと。ハ、邂逅、豫想せずして出會ふこと。ニ、淬厲、とき磨くこと、一生懸命に精を出す。ホ、從容、動作振舞がゆつたりとして迫らざるさまに云ふ語。
- 二 左ノ語句ヲ解釋セヨ。
- イ、齒牙に掛くるに足らず。ロ、間髪を容れず。ハ、斯學泰斗。ニ、群雄割據。ホ、消費節約。
- 【解答】 イ、なんだ、かんだととりあけていふ程のこともない。ロ、物事の極めて接迫したこと、
- イ、鬚毛一本もさしいる、間もないこと。ハ、語學なら語學博物なら博物とその學問に最も秀ですぐれた大家。ニ、多くの英雄が各自に地所を分割して占領して居ること。ホ費用をむだにせずつつましくすること。
- 三 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。
- イ、いうあく ロ、くわくちやう ハ、さうじゆ ニ、ばいかい ホ、つるべ
- 【解答】 イ、優渥 ロ、擴張 ハ、操縱 ニ、媒介 ホ、釣瓶
- 四、左ノ語ニ讀方ヲ附ケ且解釋セヨ。
- イ、黜陟 ロ、曠沛 ハ、複郁 ニ、儻舌 ホ、賑恤 ヘ、辛辣 ト、蹙蹙 チ、駘蕩 リ、鞏固

又、編縛

【解答】イ、黜陟 位階動等をしりぞけ又はほのぼせること ロ、頤沛 しばしの間 ハ、馥郁 芳しき香の發するさまにいふ語 ニ、饒舌 多辨なること ホ、賑恤 物をめぐみ與ふること ヘ、辛辣 からくきびしいと ト、飄蕩 雲のたなびきわたるさまにいふ語 チ、馳蕩 春の景色のどかなること リ、鞏固 基礎などのかたきこと

五 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

イ、ふかん ロ、みいづ ハ、しぐれ ニ、らくえき ホ、うらほんる

【解答】イ、俯瞰 ロ、御稜威 ハ、時雨 ニ、絡釋 ホ、孟蘭盆會。

六 左ノ語句ヲ解釋セヨ。

イ、傍若無人 ロ、浩然の氣 ハ、徳を以て怨に報ゆ ニ、念には念を入れ ホ、立つ鳥もあとを濁すな。

【解答】イ、人を憚らず勝手に振舞ふこと ロ、ひ

ろく雄大な心 ハ、怨があつても仕返しするやうなことをせず恩徳をもつて施すこと ニ、いやが上にも念を入れて大事をとること ホ、水鳥の飛び去るとき水を濁さずして立つ如く人も今まで居た所を去るに際してはあとを立派にして置くやうに意を用ひよと云ふこと。自分が居らなければ、構はぬといふことはいけぬ。

七 左ノ讀方ノ意義ヲ記セ。

イ、團樂 ロ、胆勉 ハ、挽回 ニ、冤罪 ホ、慇懃

【解答】イ、團樂、樂しきよりあひ ロ、胆勉精を出してつとめること ハ、挽回、もとへひきもどすと ニ、冤罪、無實の罪 ホ、慇懃、ていねい

八 左ノ片假名ノ部分ヲ漢字ニ直セ。
イ、「ケンゼン」なる「ニクタイ」に「ケンゼン」なる精神「ヤド」る。ロ、家「ロウ」なりと雖も「ヒザ」を「イ」るゝに「タ」る。ハ、一旦の「サテツ」に「シツ

パウ」すべからず。ニ、櫻花は「シン」に我が日本人の「リサウ」であり「シダウシヤ」である。

【解答】イ、「健全」なる「肉體」に「健全」なる精神「宿」る。ロ、家「陋」なりと雖も「膝」を容るゝに

【足」る。ハ、一旦の「蹉跌」に「失望」すべからず。

ニ、櫻花は「眞」に我が日本人の「理想」であり「指導者」である。

九 左の文を解釋せよ。

停車場で客の手荷物を運搬する所謂赤帽は、特に鐵道業者から其の營業及乗降場の出入を承認されて居るに過ぎないもので、鐵道自體の經營するものでないことは、我國に於ける常態である。従つて赤帽の行爲に就いては、鐵道は責任を負はない。

【解答】 停車場で客の手荷物を持ち運びをする普通赤帽と呼ばれる者は、特に鐵道業をしてゐる者から、其の職業を營み、乗降場への出入りを許されて居るに過ぎず、鐵道の方でそれをやつてゐるのでない事は我が國では普通の事とされてゐる。従つて赤帽のした事に就いては鐵道としてその責

任を持たない。

十 左の讀方並に意義を記せ。

イ、淬礪 ロ、毀譽 ハ、明晰 ニ、博愛 ホ、供給

【解答】イ、淬礪、とぎみがくこと ロ、毀譽、けなしたりほめたりする ハ、明晰、明らかにはつきりして居ること ニ、博愛、博く平等に愛すること ホ、供給、そなへ出すこと

十一 左の片假名の部分を適當なる漢字に直せ。
イ、カントクをキビしふせらるればウラムユルム

せらるればアナドルは小人の常なり。
ロ、艱クにタへて年月をスゴし、タへてユウモンの色なし。
ハ、チに居て亂を忘れず。
ニ、キンジュウでさへオンを知る。
【解答】イ、監督を厳しふせらるれば恨み、緩ふせ

らるれば悔るは小人の常なり。
口、艱苦に堪へて年月を通し、絶へて憂悶の色なし。

ハ、治に居て亂を忘れず。
ニ、禽獸でさへ恩を知る。

十二 左ノ文ヲ解釋セヨ。

我等は人間天賦の能力を善養し利用しその畢世の事業は以て我等が父母師長國家社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て更に餘裕の紳々たるものあり後世子孫をして永くその餘澤を受けしめ國家は我等を得て一段の進歩をなしたることを永へに追憶せしむることを期すべし。

【解答】 われは人間の生れつきのはたらきをよく養ひ上手に有益に用ひその一生涯に成し遂げる仕事はわれが親や教師や又は國家社會から受けたところの大きな恩に仕かへしすることが出来るばかりでなく將來子孫をしてながくその餘つた恩恵を受けさせて國家がわれわれのために一層の發達をなしたことをいつまでも想ひかへさせ

ることが出来るに違ひない。

十三 左ノ各項ヲ解釋セヨ。

イ、その聰慧なる往々儕輩を壓す。
口、たとひ己の欲せざることなりともその爲さるべからざることなる以上甘んじてなさざるべからず。

【解答】 イ、その才智がすぐれて物事のわかりのよい事は時々同僚をおさへつけた位である。
口、たとへ自分の望まぬことであつてもそれが自分でせなければならぬことであるからにはこころよく進んでそれをせなければならぬ。

十四 左ノ文ノ片假名ヲ漢字ニ直セ。

すばるたの「クウイクジョ」に「オ」ける「セウネンセイネン」の「セイクワツ」は「モツバ」ら「レンケツシツソコツキニクタイ」の「キシヤウ」を「タンレン」するを「モクテキ」としその「キソク」は「スコブ」る「ゲンカク」なりき。

【解答】 すばるたの「教育所」に「於」ける「少年青年」の「生活」は「専」ら「廉潔質素克己忍耐」の「氣

象」を「鍛鍊」するを「目的」とし其の「規則」は頗る「嚴格」なりき。

十五 左ノ成語ニ假名ヲ振り解釋セヨ。

前哨、絶倫、要訣、從容、會釋、話柄。

【解答】 前哨、前にある見張りの兵。絶倫、人にまさりてすぐれたること。要訣、重要な究極。從容、舉動のゆつたりとしてせまらざるさま。會釋、挨拶。話柄、はなしのたね。

十六 左ノ語ヲ用ヒタル文ヲ作レ、但シ文ノ數ハ制限セズ。

當然、偶然。

【解答】 仕事を完成すべきは當然のことであるこの勝利は偶然の事である。

十七 左ノ文ヲ解釋セヨ。

嗚呼天下の廣き逝く者は日夜に之あり。而して其の死の天下に知らるゝ者幾許ぞ。一旦死すれば國を擧げて之を悼惜す。時豈丈夫の本懐にあらずや。
【解答】 廣い世の中には死ぬる人は晝夜絶えずあるのである。しかしその死んだことを世の中に知

られるものはその中のどれ丈であらうか。實に僅かなものである。一度死ぬれば國民こそつて其の死をいたみ惜むといふことは實に男子たるもの、本望ではなからうか。

十八 左ノ各項ヲ解釋セヨ。

イ、覆車の轍を踏まじと心に省る所ありき。
口、噴々傳稱すること久うして衰へず以て千古に不朽なるべし。

【解答】 イ、前に失敗したのを考へて再び失敗を繰り返さぬと我が心に反省する所があつた。
口、口から口へと少しの間も賞め傳へることがやまないでいつまでもその名は朽ちないだらう。

十九 左ノ成語ニ假名ヲツケ意義ヲ書ケ。

剽那。三伏。粗漏。軸體。操縱。輕佻。淘汰。掠奪。

【解答】 剽那。一寸の時間、極しばらくの時間。
三伏。暑さの最も厳しい氣候。
粗漏。おろそかにして手落のあること。
軸體。舟のへさきとも。

操縦、あやつり動かすこと。
輕佻、かるはずみなること。
淘汰、不用のものを除くこと。

二〇 次の文中側線ある假名を漢字に改めよ。
「モツバ」ら力を内治に用ひて、財政を「セイリ」し、
「セイド」を改正し、法典を「ヘンサン」し、教育を
「シヤウレイ」し、文藝を「ホゴ」し、「キンユウキ
クワン」を「サウセツ」し、「ウンユ」交通の便を開
く等、國政の改善に「コウケン」せし所舉げて數ふ
べからず。

【解答】「専」ら力を内治に用ひて、財政を「整理」
し、「制度」を改正し、法典を「編纂」し、教育を「奨
勵」し、文藝を「保護」し、「金融機關」を創設し、
「運輸」交通の便を開く等、國政の改善に「貢獻」せ
し所、舉げて數ふべからず。

二一 次の文中側線ある漢字に假名を附し且つ全文
を解釋せよ。

一、「敦厚」質素の美風を養はんことを期し、奢侈
を戒め、困厄を救ひ、孤獨を「慰撫」し長老を尊敬

し、又善行美蹟を「調査」して、村民「集合」の席上
に「公表」し、風紀取締員を各處に配置して、一般
風紀の監視を「分擔」せしむ。

【解答】一、人情あつくかざりのない美しい風俗
を養ふことをちかひ、分に過ぎたおごりをいまし
めて、生活等に苦しむ者を救つたり、ひとりさび
しいものをなぐさめ、或は老年者を尊び敬ひ、又
よい行ひや功蹟の見るべきものをしらべて、村の
人々が集つた場所で發表し、更に風俗を取締る人
を各方面にくばつておいて一般の風俗に氣をつけ
てみまらることを分けてうけもたす。

二二 左の文の本筋をたどつて出来る丈短くせよ
辛うじて焼け残つた下谷茅町の横山大觀畫伯は單
衣一枚の尻端折姿で長靴をはき、これがまあ一代
の巨匠かと思はれぬ勇しい姿で避難民の救護に奮
闘した。

【解答】横山大觀畫伯は輕裝して避難民を救護し
た。

二三 左の夫々二つの文の相違を述べよ。

イ、その多少を知るべきなり。
その多少を知るなり。
イ、感慨深からざるを得なかつた。
イ、感慨深くあつた。

【解答】イ、前者はその多少を知ることが出来る
のである。後者はその多少を知るのである。
べきは「出来る」と云ふ意味がある。

ロ、前者は感慨を深くせまいとしても自然と感慨
が深くなる。後者は感慨が別に深くもなかつたと
云ふ意である。両者は意味が反對である。

二四 左ノ文章ノ漢字ニ讀方ノ假名ヲ附シ全文ヲ解
釋スベシ。

快活の人は顔容常に微笑を含み、眼は正面に人を
見、身體は直正にして步調は整ひ、言語は明晰に
して語尾に力あり。起居進退すべて切目正しく、
舉動を曖昧にすることなし。心中に精神充實し、
爲すあらんとするの氣四體に溢れ、言行を妄りに
せず、如何にも頼もしき人物に見ゆるものなり。

【解答】快活の人は顔容常に微笑を含み、眼は正
面に人を見、身體は直正にして步調は整ひ、言語
は明晰にして、語尾に力あり起居進退すべて切目
正しく、舉動を曖昧にすることなし。心中に精神
充實し爲すあらんとするの氣四體に溢れ、言行を
妄りにせず、如何にも頼もしき人物に見ゆるもの
なり。

活潑な人はいつでも笑顔をして居て眼はまともに
人を見、身體はまつすぐに正しくしてあしなみそ
ろひ、言葉ははつきりしてあきらかて言葉じりに
力がある。立居振舞がすべてにきまり正しく様子
をうしろろぐらくするやうなことはない。心の中に
氣力がみちて何事かを爲しとけやうとする意氣が
體中に満ちあまつて言葉や行ひをさしてがましく
せず、何となくたよりになるらしい人柄に見える
ものである。

二五 左ノ語句ノ讀方ト意味ヲ記スベシ。
イ、四海兄弟。ロ、粉骨碎身。ハ、風聲鶴唳。
ニ、寒心ニ堪ヘズ。俯仰天地ニ愧ヂズ。

【解答】 一、四海兄弟、天下の人々はすべて同じ人類であるから親恩疏怨の隔てのないこと。

二、粉骨碎身、力のあらん限り骨を折ること。

三、風塵鶴唳、怖気つきて少しのことに感じ驚くこと。

四、寒心ニ堪へズ、心配でならぬこと。

五、俯仰天地に愧ぢず、公明正大なこと。

二六、左の文章を解釋せよ。

一郷の爲に功あるものは死して一郷の爲に惜しまれ一郡の爲に盡くせるものは一郡の爲に哀しまる若し夫れ其の事業國家全體の進歩を助成し其忠誠よく國民に認めらるゝものに至りては其の取る所何の道たるを問はず其の人の存否は直接間接に國家の進運に關すること甚だ大なるものなり。

【解答】 一村の爲に功勞のある人は死んでから其の村の爲に人々から惜しがられ、又一郡の爲に盡力したものは其郡の爲に惜しいことであると云はれる、而して若しも其の事業が國家全體の進歩を助け其の眞心がよく國民に認められるものであつたならば其事柄の如何に拘はらず其の人の生存し

てゐるといふのは直接にも間接にも國家の將來進歩發達すべき運命に關係することが甚だ大きいものである。

二七、左の字句の意義を記せ。

一、一軍の食一瓢の飲。ロ、兄たり難く弟たり難し。

二、斬然頭角を見はす。ニ、紳々として餘祐あり。

三、少しの食物、少しの飲物。ロ、五角

【解答】 一、少しの食物、少しの飲物。ロ、五角

で何れが優り何れが劣ると云ふ事は出來ない。ハ

一段と他の人々より優つてゐること。ニ、ゆとり

が充分なること。

二八、次ノ語ヲ漢字ニ直セ。

1、しうぜん 2、いんさつ 3、ぬりかへ

4、ちゆうもん 5、でんせつ 6、せいとん

7、じゆくれん 8、きゝめ 9、じやう物 10、

ずるい

【解答】 1、修繕 2、印刷 3、塗替 4、註

文 5、傳説 6、整頓 7、熱練 8、利目

9、滋養物 10、隨意。

二九、左ノ漢字ニ假名ヲ附シ且ツ解釋セヨ。

一、犠牲的精神。ロ、造化の妙。ハ、奠都。ニ、寂寞。ホ、傳播。

【解答】 一、犠牲的精神、身を殺してまでも他のために盡す心。ロ、造化の妙、宇宙萬物を形づくる神技の巧みなること。ハ、奠都、都をさだめおくこと。ニ、寂寞、さびしいこと。ホ、傳播、傳はりひろまること。

三〇、次ノ句ヲ解釋セヨ。

一、人口に膾炙す。ロ、英國皇儲。ハ、萬木凋落

ニ、大喝一聲。ホ、冥途に旅立つ。

【解答】 一、普く人々の口の端に上ること。ロ、英國皇太子。ハ、凡ての木が枯れしほむ。ニ、大聲にてしかりとばす。ホ、死ぬこと。

三一、左ノ語ニ讀方ヲ附ケ且解釋セヨ。

一、價值 ロ、内裏 ハ、巨利 ニ、嫡子 ホ、納涼

ヘ、摸擬 ト、落魄 チ、麾下 リ、剩ヘ

ヌ、熱慮

【解答】 一、價值、ねうち。ロ、内裏、天皇のおいでになる宮殿。ハ、巨利、大きい寺院。ニ、嫡

子、家督を相続する子。ホ、納涼、すゝみ。ヘ、摸擬、真似すること。ト、落魄、おちぶれること

チ、麾下、旗下。リ、剩へ、これのみならず。ヌ、熱慮、よく考へること。

三二、左ノ語句ヲ解釋セヨ。

一、ぬかづく。ロ、忘れがたみ。ハ、下弦の月。ニ、端武者どもに目な懸けそ。

【解答】 一、ぬかづく、頭を地につけて拜禮す。ロ、忘れがたみ、父の死後母の胎内にのこる子。ハ、下弦の月、陰曆二十三日頃の月。ニ、端武者どもに目な懸けそ、雜兵どもに目をくれるな。

三三、左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

一、ドリヨク ロ、キシツヒン ハ、ジュランシヤゼツ

ニ、イツカダンラン ホ、ユダンタイテ

【解答】 一、努力 ロ、遺失品 ハ、縦覽絶謝

ニ、一家團樂 ホ、油斷大敵

三四、左ノ語ニ讀方ヲ附ケ且解釋セヨ。

一、薰陶 ロ、摸倣 ハ、斟酌 ニ、推薦 ホ、

左遷 へ、矯正 ト、悽愴 チ、畏服 リ、暴露
又、瞥見

【解答】 イ、薰陶、徳を以て人を感化すること。
ロ、模倣、まねならふこと。ハ、斟酌、ほどよく
とりはからふこと。ニ、推薦、人をすゝめあぐる
こと。ホ、左遷、高き官職より卑き官職におとす
こと。へ、矯正、ためなほすこと。ト、悽愴、い
たましきこと。チ、畏服、おそれしたがふこと。
リ、暴露、悪事などの現はるゝこと。又、瞥見、
ちらりと見ること。

三五 左ノ語句ヲ解釋セヨ。

イ、一騎當千 ロ、有無相通す ハ、造詣深し
ニ、天真爛漫

【解答】 イ、一騎當千 一騎の力よく千人にあた
る程。ロ、有無相通す 有るものと無いものとう
めあはせ合つてよくすること。ハ、造詣深し 學
問又は技藝に熟達してゐる。ニ、天真爛漫 つゝ
みかざりなきこと。

三六 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

ゼンジヤクタリ。

【解答】 イ、鬱蒼たる樹木丘の上に立つ ロ、驕
を未發に防ぐ ハ、春風千里山青く末かすむ ニ
無用の贅澤をなす ホ、泰然自若たり

三九 左の誤りを訂正せよ。

イ、組織 ロ、辯償 ハ、憐世 ニ、統括 ホ、
薰陶
イ、組織 ロ、辨償 ハ、濟世 ニ、統括 ホ、
薰陶

四〇 左ノ文章ノ意義ヲ記セヨ。

イ、世界有数の奇觀なりと謂ふも豈不可ならんや
ロ、誰か俯仰懐古の情を禁ぜんや。
ハ、百年の大亂を定め人民塗炭の苦を救はんが爲
なり。

ニ、燒野の雉、夜の鶴、さては乳虎の怒蕩の愛
ホ、聰明叡智を道德の極致とせり。

【解答】 イ、世界に數の少ないめづらしい觀物で
あると云ふてわるいことがあらうかさう云つても
よい。

イ、バツテキ ロ、チツツク ハ、フウキピンラ
ン ニ、ゲウカウ(思ひがけないしあはせ) ホ、
シヤウガイブツ

【解答】 イ、拔擢 ロ、窒息 ハ、風紀紊亂 ニ
僥倖 ホ、障碍物

三七 左ノ片假名ニテ記セル語ヲ漢字ニテアラハセ

1 國民のアンネイをイヂす。2 愛子をギセイとせ
るサンタンたるヒゲキあり。3 キテンがキク。4
黒色はインウツのクワンネンをジャクキす。5 敵
を近海にゲイゲキするケイクワクを定む。6 フリ
ヨの禍にアひても毫もラウバイせず。

【解答】 1 國民の安寧を維持す。2 愛子を犠牲と
せる慘憺たる悲劇あり。3 氣轉が利く。4 黒色は
陰鬱の觀念を惹起す。5 敵を近海に迎撃する計畫
を定む。6 不慮の禍に遭ひても毫も狼狽せず。

三八 左の片假名の部分を適當なる漢字に直せ。

イ、ウツソウたるジユモク丘の上に立つ。ロ、驕
をミハツにフセグ。ハ、シユンプウ千里山青くウ
ラかすむ。ニ、無用のゼイタクをなす。ホ、タイ

ロ、何人でも仰ぎ又俯して昔を想ふ心を拜へるこ
とが出来やうが出来ない。

ハ、永い間の亂世を治めて人民をひどい苦しみか
ら救ふ爲めである。

ニ、燒野の雉に夜の鶴とは親の子を思ふ愛情の切
なるを云ふ。雉子は自分の巢のある野原が焼けて
も子の側から離れず、鶴は子を守つて夜も寝ない
乳虎の怒とは子を育てるに極めて嚴格なのに喩へ
る。虎が子を育てるときは打つたり噛んだりする
ことが平常よりも一層はけしい。砥礪の愛とは親
牛が子牛を砥めまわしていつくしみ育てること。
全文の意味は親は子を受して時にはその身をも犠
牲にするが更に一方では嚴格な教養を行ひしかも
其の一面にはおさへきれないほど愛情があると云
ふ意。

ホ、かしこく智識のあるのを人間のふみ行ふ道の
終局の目的であるとしてある。

四一 左ノ文ノ大意ヲ書ケ。

イ、我が鐵道従業員たらむとする者は義務の觀念

強く職責を重んじ忠實業に服するのみならず活動を無上の快樂とし安逸を最大の苦痛として能く艱苦と戦ひ公共の爲めには私情を去り私利を抛ち自彊息まざるの覺悟あるを要す。

口、雲は離合集散常なく其の起るや來る所を知らず。其の散するや往く所を知らず。時々其の容を改め刻々其の色を變ず。

【解答】イ、鐵道従事員とならうとする者は己れのなすべきつとめをよくつくす考が強く職務上の責任を重んじ誠實に仕事をするばかりでなく働くことをこの上もないたのしみとしなまけて遊ぶことを最も大きな苦しみとしてよく艱難辛苦とたかつて一般社會公衆のためには自己の情實を斥け自分の利益を捨て、自らつとめ行うてゆくと云ふやうなころがまへがなければならぬ。

口、雲は離れたり合つたり、或は一とところに集つたり、散らばつたりして一向定まらない。雲が起るとそれはどこから來たかわからない、それが散らばるとどこに往くのか判らない、しばしその

形を違へ一刻一刻に其の色をかへる。

四二 解釋。

(一)似て非なるもの少からず、智と狡、勇と暴、儉と吝、禮と諂、固執と拘泥等皆然り。

(二)事物をたゞ一向にのみ思ひ做さず努めて樂地を見出す習慣を養ひうれば如何ほど窮苦不快なる中にありても人は自ら勇氣を得て苦中の苦に堪へ忍びやがて人上の人となり得ることもあるべし。

【解答】(一)よく似て居るが實は全くちがつて居るものが少くない、かしいことと、づるいこと勇氣と亂暴、つしまやかなことと、物をしみますること、禮儀とへつらふこと、かたくないことともの事にかゝりなづむこと等は皆さうである。

(二)物事をたゞ一途に思ひつめず、つとめて安樂な場所を見出すならはしをやしなふことが出來ればどれほどくるしみや不愉快な中にあつても人は自然と勇氣が出てくるしみの中のくるしみにこらへしので人間の凡情を超越した人となること出來ることもあるのであらう。

四三 左ノ成句ヲ解釋セヨ。

(一)殆ど言ふに足らず。(二)殊にゆかしきを覺ゆるにあらずや。(三)片言なほ天下の法とすべし。

【解答】(一)云ふ迄もないほどのことである。

(二)とりわけて何となく慕はしさを感ずるではないか。(三)一寸した言葉でも亦國のおきてとすることも出來る。

四四 左ノ熟語ニ假名ヲ附シ意義ヲ記セ。

措置。頒布。贅言。文學。先天的。寓話。

【解答】措置。とりはからひ。頒布。ひろくわかつこと。贅言。無用なる言葉。文學。文章、詩歌等に關する學問。先天的。此の世に生れ出ぬさきから備はつてゐること。寓話。事實を假りに設け意をほのめかす話。

四五 左ノ片假名ヲ漢字ニ直セ。

チヨチクはシンヨウを得るのキソなりジツゲフカにヒツヨウなるはシホンにあらずしてチヨチクなりムシロ、チヨチクを作るはコツキセツセイの力なり。

【解答】貯蓄は信用を得るの基礎なり實業家に必要なるは資本にあらずして貯蓄なり寧ろ貯蓄を作るは克己節制の力なり。

四六 左の文章中の漢字に讀假名を附し而して全文の意味を解釋せよ。

今の羅馬市は元の羅馬の邊隅にして、そのかみ大厦高樓の櫛比せしあたり、今はたゞ荒廢寂寞の巷たるのみ。羅馬に遊ぶものをして深き感興を催ふさしむるは、車馬絡繹たる街路にあらずして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる敗址殘壘なりとす。

【解答】今の羅馬市は元の羅馬の邊隅にして、そのかみ大厦高樓の櫛比せしあたり、今はたゞ荒廢寂寞の巷たるのみ。羅馬に遊ぶものをして深き感興を催ふさしむるは、車馬絡繹たる街路にあらずして、丘陵の上、郊野の間に寂しき影を留めたる敗址殘壘なりとす。

現在の羅馬市は昔の羅馬のかたほとりであつて、昔大きな建物や高い家が櫛の齒のやうに立ちならんで居た邊は今ではたゞ荒れはてゝものさひしい所になつて居る。羅馬を見物する人に深いおもしろみをおこさしめるのは車や馬がつらなりつゝいたまぢではなくつて岡の上やひろい野原の中にも、のさびしいありさまを残して居るところの城のいしずるやとりでの跡である。

四七 左の文章中括弧を付せる假名を漢字に改めよ
「じようき」の「ばうちやう」、「くうきのあつりよ
く」は「しぜん」の「まゝ」、「はうち」するときは「じ
んせい」に「えきをあたふ」ることなきもこれを「て
うせつ」するときはその「こうよう」の「みだい」な
る「はか」るべからざるの「くわん」あり。

【解答】「蒸氣」の「膨脹」、「空氣」の「壓力」は「自然」の儘に「放置」するときは「人生」に「益」を「與」ふることなきもこれを「調節」するときはその「効用の「偉大」なる「測」るべからざるの「觀」あり。

四八 次の文中括弧ある假名を漢字に直せ。

凡そ果物の中で、柿位人の心を動かすものはあるまい。「ウス」い黄味を帯びた「スキトウ」るやうな新芽は、袖や「パウシ」や「ハウキ」の「フ」るる度毎にほろりくと缺ける其の中に「モロ」い首の長い白い花が咲く、やがて實が見えて、それが「マメツブ」ほどになると、毎日「ハ」くやうに地に落ちる。それから「クワキ」の大きになり「タイラン」の大きになる。

【解答】凡そ果物の中で、柿位人の心を動かすものはあるまい「薄」い黄味を帯びた「透徹」るやうな新芽は、袖や「帽子」や「帯」の「觸」る、度毎に、ほろりくと缺ける。其の中に「脆」い、首の長い、白い花が咲く、やがて實が見えて、それが「豆粒」ほどになると、毎日「掃」くやうに地に落ちる。それから「蕨姑」の大きになり「鶏卵」の大きになる。

四九 次の文章ヲ解釋セヨ

貯蓄は勤儉の美風を起し、力行の精神を盛ならしむれど、奢侈は人をして浮誇ならしめ、薄志弱行に陥らしむ、かの二宮尊徳が夙く勤儉貯蓄を勤美

して之を畢生の事業としたるが如きは、今日のわが國民の基礎を造るに與りて貢獻したる所甚だ大なりといふべし。

【解答】貯蓄は勤儉の美しい風習をおこし、つとめ行ふこと、の精神をさかんにするけれどもおごることとは人をおちつきのないものにし、志を輕薄にし活動力をにぶらして終ふ、あの二宮尊徳がはやくから勤儉貯蓄をすゝめはけまして之を一生の仕事としたやうなことは、現在のわが國民のもとするをつくるのに役立つたことは非常に大きなものであるといふことが出来る。

五〇 イ左ノ語ニ假名ヲツケ其ノ上解釋ナサイ。

一、批准交換 二、蹉跌 三、御稜威
四、義捐金 五、入魂
左ノ句ヲ解釋ナサイ。

一、筆勢非凡にして丹精の妙いふべからず。二、畢生の知勇を振ふ。三、議論區々として容易に決すべくもあらず。四、春秋に富む。五、人口に膾炙す。

【解答】イ一、批准交換、批准とは當事國の全權委員が合議して定めた條約の案文を其の國の主權者が承認すること、批准交換とは批准を経た條約を當事國が互に交換すること、これによつて條約は効力を生ずる。二、蹉跌、つまづき。三、御稜威、天皇の御威光。四、義捐金、五、入魂、懇意にすること。

ロ一、筆つきが平凡でなく赤や青の色の配合が何とも云へぬほどよい。二、一生一代の智慧と勇氣を出す。三、議論がまち／＼でたやすくきまりさうでもない。四、まだ齡が若い。五、人々に云ひはやされてゐる。

五一 左ノ片假名ノ部ヲ漢字ニ直シテオ書キナサイ。

一、身體を「タンレン」し精神を「シユウヤウ」する。
二、蟹の「クワンヅメ」。三、社會の「アンネイチツジョ」を保つ。四、「テイサイ」を具へる。五、荒地を「カイタク」する。六、貧民を「キウサイ」する。七、事件を「テウサ」す。八、山櫻は我が「コクス牛」植物である。

【解答】一、身體を「鍛錬」し精神を「修養」する。二、蟹の「健詰」三、社會の「安寧秩序」を保つ。四、「體裁」を具へる。五、荒地を「開拓」する。六、貧民を「救済」する。七、事件を「調査」す。八、山櫻は我が「國粹」植物である。

五二 左ノ全文ニ振假名ヲ附シ且括弧ノ部分ヲ詳解セヨ。

次いで来る奇怪な舞踏曲は其の物凄さ「妖精」の夜出で、「庭の芝生」に狂ふ如く最後の「快速の調」は飛ぶが如く閃くが如く奔流巖に激し「怒濤岸を嘯み」「つぶさに變幻の妙」を極めた。

【解答】次で来る奇怪な舞踏曲は其の物凄さ「妖精」の夜出で、「庭の芝生」に狂ふ如く最後の「快速の調」は飛ぶが如く閃くが如く奔流巖に激し「怒濤岸を嘯み」つぶさに變幻の妙を極めた。

妖精 ばけもの

庭の芝生 庭の芝生の上。

快速の調 速くて心持のよいしらべ。

怒濤岸を嘯み いかつた波が岸をかむ。

つぶさに こまかくもれがない。
變幻の妙 すぐあらはれてすぐ消えるその巧妙さ。

五三 左ノ語ニ誤アラバ正セ。

(イ)記憶 (ロ)辨舌 (ハ)除行

(ニ)險約 (ホ)影嚮 (ヘ)重復

【解答】(イ)記憶 (ロ)辨舌 (ハ)徐行 (ニ)儉約

五四 左ノ語句ニ假名ヲ附セヨ。

イ、淬礪の誠 ロ、山茶花 ハ、煤けた陣子 ニ、

石花茶 ホ、榮螺

【解答】イ、淬礪の誠 ロ、山茶花 ハ、煤けた陣子 ニ、石花茶 ホ、榮螺

五五 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ

イ、テンジヤウムキユウ。ロ、コクタイのセイク

ワ。ハ、アイニクナテンキ。ニ、ユキダルマ。ホ、

牛カン(残念)。ヘ、ロウシフ(いやしいならば)。

【解答】イ、天壤無窮 ロ、國體の精華 ハ、生

憎な天氣 ニ、雪産摩 ホ、遺徳 ヘ、陋習

五六 左ヲ解釋セヨ。

イ、憂き事のなほこの上につもれかしかぎりある身の力ためさん。

ロ、とこしへに民安かれと祈るなるわが世を守れ伊勢の大神。

【解答】イ、つらいこと来るならばもつともつと此上つらいことがかさなればよい、自分は限りのある此のからだの力をためしてみやう。

ロ、私はいつまでも人民が安樂であるやうに祈るのであるが、伊勢の大神もどうか私の治める此世を守つて下さい。

五七 左ノ讀方並ニ意義ヲ記セ。

イ、食欲 ロ、冗員 ハ、精緻 ニ、徵發 ホ、

薫育 ヘ、推薦 ト、奇峭 チ、蘇生

【解答】イ、食欲非常に欲深いこと。ロ、冗員不用の人数。ハ、精緻極めてめんみつなること。ニ、徵發非常の場合に人民から金品や馬などを徵集すること。ホ、薫育徳を以て人を導くこと。ヘ、推薦人をすゝめあけること。ト、奇峭山の形のけはしいさまに云ふ。チ、蘇生一度息の絶へたる後再

び息をふきかへすこと。

五八 左ノ文中漢字ニ振假名ヲ附シ全文ヲ解釋セヨ。

頭腦明確にして、判断力に富み、事の利害得失を識別し機に臨み、變に應じて、斷行して感はざるを果斷と謂ふ。機會は汽車の如し、今來るかと思へば忽ち去つて其の跡を見ず。優柔不斷徒に恐れ、徒に惑ひ、狐疑し、躊躇し、思ひ切つて斷行する能はざるやうにては、折角好機會に遇ふもその機會を捉ふること能はざるなり。

【解答】頭腦明確にして判断力に富み、事の利害得失を識別し機に臨み、變に應じて、斷行して感はざるを果斷と謂ふ。機會は汽車の如し、今來るかと思へば、忽ち去つて其の跡を見ず、優柔不斷、徒に恐れ、徒に惑ひ、狐疑し、躊躇し、思ひ切つて斷行する能はざるやうにては、折角好機會に遇ふもその機會を捉ふること能はざるなり。

あたまがはつきりして確かで物事を考へきめる力が強く、事の利と不利をみわけ機會に應じ、不時の出來事にしたがつて思ひ切つて事を仕末して迷

はないのを果斷と云ふ。機會と云ふものは汽車のやうである、今來るかと思つてゐるとすぐに去つて終つて其の跡も見えない。柔弱で氣力がなく決斷に乏しく、わけもなく恐れ、迷ひ、疑ひ深く進退にためらひ、思ひ切つて行ふことが出來ないやうでは、わざわざ好い時機に遇ふてもその時機を利用することが出來ないのである。

五九 左ノ文字ノ讀方ト意義トヲ記セ。

障碍 廉潔 服膺 旺盛 風潮

【解答】 障碍、さまたけ。廉潔、慾がなく性行がいさぎよいこと。服膺、忘れずによく守ること。旺盛、さかんなこと。風潮、時勢のおもむき。

六〇 左ノ假名ヲ漢字ニ直セ。

ハソンホウクワイ。ヒガイタイキ。
チュウシンカンシヤ。シツジツガウケン。
コクカコウリユウ。

【解答】 破損崩壊 被害區域 衷心感謝 質實剛健 國家興隆

六一 左ノ文中片假名ノ部分ヲ釋字ニ直セ。

あり。後世子孫をして永く其餘澤を受けしめ、國家は我等を得て非常に進歩したること永久に追憶感謝せしめんことを期すべし。我等が將來有爲の少壯諸子に切望する所のは實に是に外ならず我々は人としてこの世に生れた時から備はつてゐる力を善い方に成長さす、それをよく使用しその一生の仕事は我々が父母先輩國家社會から與へられた大恩を返す事が出來て、その上に尙ゆとりが充分であつて、後の世では子孫に何時までもその恩恵を受けさせ國家は我々の爲めに進歩を遂げたことを永く忘れずに感謝させる事を心掛けなくてはならない。我々がこれからの有望な青年諸君に心から希望するものは全くこのことである。

六三 左ノ全文ヲ解釋セヨ。

丹念に磨くことである。磨きあけることであるそのうちに安らかなゆつたりとした息づかいで靜かにその人の息づかいそのままに磨かれてくる。さうしていつまでもその調子で續けてゆかねばなるまい。焦燥つたり騒いだりわめいたりいやきがさ

(イ)電信掛はミダリに電報のゴジをヘンコウすべからず。

(イ)電信掛はキミツ及親展の電報は勿論一般の電報と雖他にロウエイすべからず。

【解答】 (イ)電信掛は妄りに電報の誤字を變更すべからず。

(ロ)電信掛は機密及親展の電報は勿論一般の電報と雖他に漏洩すべからず。

六二 左ノ文讀方及講義。

我等は人間天賦の能力を善養し利用し、其畢生の事業は以て我等が父母師長國家社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の紳々たるものあり。

後世子孫をして永く其餘澤を受けしめ國家は我等を得て非常に進歩したることを永久に追憶感謝せしめんことを期すべし。我等が將來有爲の少壯諸子に切望する所のは實に是に外ならず。

【解答】 我等は人間天賦の能力を善養し、利用し其畢生の事業を以て我等が父母師長國家社會に負ふ所の鴻恩に酬い得て、更に餘裕の紳々たるもの

したりするうちはいかほどよい玉でも決してほんとうのよい光を出せる筈はない。

【解答】 玉を磨くには細心に注意して磨きあけるべきである。そして斯様にして磨いてゐるうちに、自然とおだやかなのんびりした息づかひで靜かに、磨いて居る人の息づかひのそのまゝにすべらかに磨かれて來る。さうしていつまでもそのおだやかなのんびりした調子でつゞけてゆかねばならないだらう。あせつたり、さわいだり、わめいたり又嫌氣がさしたりしてゐるうちはどんなによい玉でも決してほんたうのよい光を出せるわけではない。

六四 左ノ全文ヲ解釋セヨ。

ひねもすにくちをつぐみてうぐひすは谷にこもれどささかけにそらをうかがひすをいづるかまへやすらんかくて今春とはなれり。

【解答】 朝から夕まで口をとちて鶯は谷にとちこもつては居るが笹の葉影から空をのぞんで巢を出る準備をするであらう、かやうにして今は春はも

うすぐ近くに來て居る。

六五 左ノ成語ニ振り假名ヲツケツノ意味ヲ記セ。

墨守 獻替 祖述 陵夷 別業

【解答】 墨守、かたく守る。獻替、ものごとの可否に就て主君に申上けること。祖述、先人の道や學問を本として、それをおしひろめて説き述べること。陵夷、おとろへすたれること。別業別莊。

六六 左ノ文中ノ片假名ノ部ニ適當ナル漢字ヲアテヨ。

カウツウ、ウンユ、キクワンのハツタツするにシタガヒシヤウゲフのトリヒキはスコブるピンクワツとなりイウリヤウにしてレンカなるクワモツはヨウイにシヂヤウにコカクを求むるを得るに至れり。

【解答】 交通、運輸、機關の發達するに従ひ商業の取引は頗る敏活となり優良にして廉價なる貨物は容易に市場に顧客を求むることを得るに至れり。

六七 左の文を讀みて次の各問に簡單に答へよ。
一別以來御變りもこれ無く候や當地にてはとくに

苗の植付も終り南部にてははや稻の花盛りの由に御座候御地は今尙冬の季節と存候。

1、發信者と受信者との身分。

2、發信地と受信地との關係。

3、發送の時節。

4、手紙の何れの部分か。

【解答】 1、友人 2、南地と北地 3、春 4 冒頭

六八 左の假名を略字を用ゐて漢字に改めよ。

(一) 中は其意義なり
イ、ヘン(カハル) ロ、タク(サハ)
ハ、カク(オボユ) ニ、カ(カリニ)

【解答】 イ、交 ロ、沢 ハ、覚 ニ、仮

六九 左の文を省略せられたる部分を補ひて後解釋せよ。

年長じては敵も近づけ申すまじ幼き時に参りてこそ。

【解答】 年長じては敵も近づけ申すまじ幼き時に参りてこそ敵も討取るべし。(敵も討取るべし——を省略しあり) 成長したならば敵も近づけまい幼

い時に行つてこそ始めて敵を討取ることが出來やう。

七〇 左の熟語の讀方と意義を書け(讀方は右に意義は下に)

1、舐憤の愛 2、暴虎馮河 3、蹉跌 4 殿上人

【解答】 1、舐憤の愛 人の其の子を愛するに譬へて云ふ。

2、暴虎馮河 手で虎をうち舟なくして河を渡る様な、無手法な勇氣血氣の勇にはやること。3、蹉跌失敗すること。4 殿上人昇殿を許された人。

七一 左の意味を持てる熟語を書け。

1、人生ノ果敢ナキニ噓フル語
2、彼此ト差別テ立テズニ同様ニミテ論ズルコト
3、二ツノ物ガ互ニ助ケ合フコトニ噓フル語
4、深ク心ニ銘ジテ忘ル、能ハザルハヂニ噓ヘル語

【解答】 1、朝露 2、玉石混淆 3、唇齒輔車
4、會稽の耻

七二 次ノ語句ヲ解釋セヨ。

(イ) 舊法になつむ。

(ロ) 非凡。

(ハ) 猶豫。

(ニ) 販路。

(ホ) 好奇の目を注ぐ。

(ヘ) 鼓舞。

(ト) 今日の急務。

(チ) 途中の困難は言語の外であつた。

【解答】 (イ) ふるい法律に従ふ。

(ロ) 人並すぐれてゐる。

(ハ) 疑ひ惑ふて決せざること、又時日を延すこと。

(ニ) 商品の賣れ道。

(ホ) もの珍しげに目をつける。

(ヘ) はげましいいきほひづけること。

(ト) 目下急いで爲すべきつとめ。

(チ) 其の中途での難儀は言葉にも云ひ現はせない程であつた。

七三 次ノ語ニ讀ミ假名ヲツケヨ。

艦 袖 凱旋 幟 所以 直截 鮮か 輔弼

【解答】 鐘杣。凱旋。所以。直截。鮮か。輔弼。

七四 次ノ文中ノ片假名ヲ漢字ニ改メ左側ニ記セ。

セイケツなるクウキをコキウしてキンニクを勞すれば身體ケンゼンなり。

【解答】 清潔なる空氣を呼吸して筋肉を勞すれば身體健全なり。

七五 次ノ漢字ニ假名ヲ附セヨ。

(イ)紫陽花 (ロ)旋回中の激突 (ハ)君父の誓は俱に天を戴かず (ニ)虚榮心を誓む。

【解答】 (イ)紫陽花。(ロ)旋回中の激突。(ハ)君父の誓は俱に天を戴かず(ニ)虚榮心を誓む。

七六 次ノ讀ミ方及意義ヲ書ケ。

(イ)當推量。(ロ)糾弾。(ハ)紅旭。(ニ)眺向。(ホ)微衷。(ヘ)遺棄。

【解答】 (イ)當推量。何の根據もなくおしはかること(ロ)糾弾。とりたゞすこと。(ハ)紅旭。あさひ。(ニ)眺向。眺へどほりに出來て居ると(ホ)微衷。すこしばかりの心。(ヘ)遺棄のこしすてること。

七七 左ノ假名ヲ漢字ニ改メヨ。

(イ)なうずる。(ロ)ぐわいたう。(ハ)ぎせい。(ニ)きやうけんくわつばつ。(ホ)うぬほれ。

【解答】 (イ)騰籠。(ロ)外套。(ハ)犠牲。(ニ)強健活潑。(ホ)自惚。

七八 左ノ各項ヲ解釋セヨ。

(イ)今年何事を爲し、かをかへりみて慳然たらざるを得ず。

(ロ)その識見の一斑を察知することを得べきにあらずや。

(ハ)空の景色の千變萬化窮りなきや瞬時も同一状態に止まることあらざるなり。

【解答】 (イ)今年何事をなしたかを思ひかへして心の望みを失はないわけにはゆかない。

(ロ)その智識や見學の一部分を察し知ることが出来るではないか。

(ハ)空の景色のいろいろにかはつてはてしのないのは一寸の間もおなじありさまにとどまることがないのである。

七九 左ノ成語ノ右側ニ假名ヲ振り解釋セヨ。

經綸 時鳥 弱冠 均霑 木鐸 杜絕 成算 裁可 耽讀 自得

【解答】 經綸、(國)をさめと、のふること(時鳥、(華木類)に屬する鳥(弱冠、(男子二十歳の別稱)均霑、(他)と同一に利益を受くること)木鐸、(舌)を木にて作りたる鈴、支那の上古に文事に關する教令を宣傳するとき鳴らしたるもの、轉じて世人を教導すること)杜絶、(ふさがりたゆること)成算、(成し遂ぐる見込)裁可、(天皇が臣下の奏請などを許可したまふこと)耽讀、(讀みふけること)自得、(自分自身が得ること)。

八〇 左ノ文ヲ解釋シ括弧内ノ漢字ニハ假名ヲツケナサイ。

イ、我が科學の發達を以て模倣なりと言ふものあれど「模倣すべきは模倣して可なり、何ぞ模倣を耻ぢて、現代科學の成果を「擷取」するに於て殘す所あるべけんや。模倣なりとも「獨創」なりとも、學問は力なり。現代の一切の事は科學を基礎とす。

科學を「等閑」に付するものは現代に於ける「劣敗者」なり。

ロ、「廉耻」ヲ重シ「食汚」ノ所爲アルベカラズ。

【解答】 イ、我國の科學の發達を、それはまねであると云ふものが、あるがまねすべきものはまねをしてよろしい、どうしてまねすることを耻ぢて現代の科學の成せる結果をおさめとるに餘す所あつてよからうか。まねであつても又我自らの新しい考へであつても學問は力なのである。現代の一切の事柄は科學を立脚としてゐるのである。故に科學をなほざりにするものは現代に於ける劣敗者である。

模倣、擷取、獨創、等閑、劣敗者。

ロ、心を清廉潔白にして耻を深く重んじ、むさほりいやしいおこなひがあつてはならない。

廉耻、食汚、所以。

八一 左ノ平假名ヲ漢字ニ改メナサイ。

火藥其ノ他「ばくはつ」質「きけん」品ノ運送ヲ「きよぜつ」ス。

手荷物ヲ「きそん」ス

機關車ニ「ねんれう」ヲ「たふさい」ス

【解答】爆發 危險 拒絶 毀損 燃料 搭載

八二 晩近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レドモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ズ今ニ及ビテ時弊ヲ革メズムバ或ハ前緒ヲ失墜セム事ヲ恐ル
【解答】 晩近學術益々開ケ人智日ニ進ム然レドモ浮華放縱ノ習漸ク萌シ輕佻詭激ノ風モ亦生ズ今ニ及ビテ時弊ヲ革メズムバ或ハ前緒ヲ失墜セムコトヲ恐ル。

近來學問や技術がますます開けて来て、人の智識は日に進んで行きます。けれどもはなやかでうはつつらな、ほしいままにふるまう風習が次第におこりはじめ、けいはくで言葉や行ひが隠微でなくはけしい氣風もまた生じます。故に今の間に此の時代の悪い風習を掃せしめをかなかつたならば、或は死んだ先輩が遺して置いた事業をうしなつて了ふ様な事はないかを案するのであります
八三 左ノ語句ニ振假名ヲ附シ意味ヲ書ケ。

イ、筋子ノ粕漬 ロ、氣息奄々 ハ、些細ナ事情

ニ、社會ノ木鐸 ホ、運命ノ寵兒 ヘ、容貌風采

【解答】 イ、筋子ノ粕漬（鮭ノ子ヲ酒粕デ漬ケクモノ）。ロ、氣息奄々（呼吸ノ苦シクシテタヘダヘナルコト）。ハ、些細ナ事情（ワヅカナコトガラ）。ニ、社會ノ木鐸（世ノ中ノ指導者タルベキ人）。ホ、運命ノ寵兒（世ノ中ノコト何ンデモ調子ヨクイツテ其ノ時代ニ時メク幸運ナ人）。ヘ、容貌風采（ホカタチトミカケ）。

八四 左ノ語句ノ片假名ノ箇所ヲ漢字ニ改メヨ。

イ、「センデン」の時代。ロ、「カイサツグチ」に「ミツシユウ」せる「リヨカク。ハ、「セキシンアラ」が如し。ニ、「サンカンヘキチ」にも皇恩アマネシ。ホ、アイサツ。

【解答】 イ、宣傳の時代。ロ、改札口に密集せる旅客。ハ、赤貧洗うが如し。ニ、山間僻地にも皇恩普し。ホ、挨拶。

八五 全文を解釋すべし。

由來交通の整備は經國の大本である。殊に鐵道は

其の骨幹を爲すものであつて、其の活動は恰も人體に於ける動脈の如き重責と威力とを有し民生興業に關する所頗大である。故に鐵道網の疎密は當に一國の消長地方の隆替に繋るものである。

【解答】 由來交通機關をととのへそなふることは濟世經國の根本である。殊に鐵道は其骨組みをなすものであつて、鐵道の活動は丁度人間のからだに於て動脈が心臟から出る血をからだ中に輸送するやうな重い責任と權威とをもつてゐて、人民の生活や工業などの興隆に關するところが非常に大きいのである。それで鐵道の網の目のあらいと、こまかいのとはたしかに一國の盛衰、又は地方の盛んとなるとすたれるとにかかはるものである。

八六 「」の部分の讀方並に意義を問ふ。

「潑刺」たる活氣を「以て」匪勉事に當り、「冗用」を省き、「遊惰」を戒め、「放漫」を制し、「儉安」「姑息」の弊風を一掃して「勇往邁進」の氣を「鼓舞」し忠實に、眞面目に、「敢爲」に、懇切に各自其の本分を守り、「義務」「職責」を重んじ、全力を「傾注」

して國家の進運を翼賛すべきなり。

【解答】 潑刺（勢ひよきこと）。匪勉（一生懸命につとむること。冗用（むだな用事）。遊惰（あそびひこたる）。放漫（ほしいまま）。儉安（ほねをしみ）姑息（一時のまにあはせ）。勇往邁進（いさみに勇んでドン／＼進む。鼓舞（ふるひおこす）。敢爲（困難をものともせざると。懇切（ねん／＼にしんせつ）。職責（職務上の責任）傾注（み／＼をかたむけそ／＼）。進運（すすむ處の運命）

八七 片假名を漢字に改めよ。

イ、「シサイ」に「ギンミ」すべし。
ロ、社會を「ベンタツ」し、「クンタウ」す。
ハ、「ロウシフ」を「ダハ」す。
ニ、青年は宜しく「ケツキ」すべし。

ホ、「センエツ」ながら君に「クゲン」を呈す。
【解答】 イ、仔細に吟味すべし。ロ、社會を鞭撻し、熏陶す。ハ、陋習を打破す。コ、青年は宜しく感起すべし。ホ、僭越ながら君に苦言を呈す。
八八 左に假名を附し下に意義を記せ。

イ、鯨波 ロ、招聘 ハ、濫觴 ニ、執筆 ホ、措置
【解答】イ、鯨波、ときの聲を云ふ。ロ、招聘、禮を厚くして人を招くこと。ハ、濫觴、昔、楊子江に盃を流した故事に起りもの、起りはじめ。ニ、執筆、事務をつかさどること。ホ、措置、とりはからふこと。

八九 全文を解釋せよ。

世道人心ノ頹廢今日ノ如キニ當リ斯ル災厄ノ突如トシテ起レルヲ見ル、恰モ一天痛棒ヲ下シテ覺醒ヲ促サントスル天意ノ顯現タルヲ感ゼズンバアラズ、寔ニ志ヲ新ニシテ轉禍爲福ノ機縁トナスベキノ時ナリ。

【解答】世間の道德や人の心のすたれたること今日の如きに當つて斯様なわざはいの突然に起つたのを見たのは、丁度一つの大きなていたき棒を下して、目ざめることをうながさうとする天の意志のあらはれたるを感ぜずにはゐられないのであるまことに今は志を新らしくして、禍を轉じて福と

爲すのしほとなすべき時であるのである。

九〇 左に假名を附し下に意義を記せ。

イ、儉安 ロ、蹉跌 ハ、休戚 ニ、忸怩 ホ、炯眼

【解答】イ、儉安、將來を考へずしてただ目前の安樂を求めてほねをしみすること。ロ、蹉跌、つまづきたふるいこと。ハ、休戚、よろこびとかなしみ。ニ、忸怩、甚だ恥ぢいること。ホ、炯眼、するとき眼力。

九一 片假名を漢字に改めよ。

イ、「ケイヒセツゲン」の折柄半紙一枚と雖も「ラシヨウ」すべからず。
ロ、男子は當に「ユウヒ」すべし、徒に「シフク」すべけんや。

ハ、「スキホマンサン」として樹間を「セウヨウ」す。

【解答】イ、經費節減 濫用 ロ、雄飛 雌伏
ハ、醉歩踟躕 逍遙

九二 讀み假名を附せ。

イ、流罪 ロ、只管 ハ、鬨斗 ニ、腹都 ホ、

續

【解答】イ、るざい ロ、ひたすら ハ、のし
ニ、ふくい く ホ、びはう

九三 假名を附し意味を書け。

荏苒 愆愆 均霑 酌量 掣肘

【解答】荏苒、(歲月の次第に進むこと)。愆愆(人)に事をすいめること。均霑、(他と同一に利益を受けること。酌量、おしはかること)。掣肘、(人を牽制すること)。

九四 書取。

イ、カカクのテイレン ロ、クワジヨウ ハ、フ
ウセツをルフス ニ、ハタンをセウす ホ、ホリ
ウのシツ

【解答】イ、價格の低廉 ロ、過剩 ハ、風説を流布す ニ、破綻を生ず ホ、蒲柳の質

九五 左の全文を解釋せよ。

從來、その指導宜しきを得たるが爲に一致戮力の美風を馴致し、歐洲戦亂の餘弊東漸人心安定を缺き、動もすれば詭激放縱に逸出せむとするの言動

を敢てするものあるの今日、我現業員が毅然として時流に超越し健實なる精神を以て其の職責に盡

瘁しつゝあるは、國家社會の爲慶賀に堪へざる所なり。

【解答】從來現業員をおしへみちびくことが適當であつたがために皆の者が一致して力をあはせる美しいならばしを次第にならして來て歐羅巴戦争のこのりの弊害が東の方へ次第に進み入つて人の心がおちつきを失つて、ともすれば中正を欠きはけしくなりほしいまゝにしまりがなくなつたりする方にはなれ出やうとする言葉や舉動を思い切つてするものゝある現今に於て我現業に従事する者が強く猛く時の風潮を飛び越えてつよい眞面目な心をもつて其の職務上の責任に力を盡しはけんで居るのは國家社會のためによろこびにたへない次第である。

九六 假名を附し意味を書け。

(イ)墨守 (ロ)邂逅 (ハ)食言 (ニ)壟斷 (ホ)落魄

【解答】(イ)墨守 自分の意見をかたく守ること
(ロ)邂逅 おもはずめぐりあふこと。(ハ)食言
約束を違ふること。(ニ)壟斷 獨り占めすること。
(ホ)落魄 おちぶれること。

九七 假名を漢字に改めよ。

- (イ)私はテットウテツピ不賛成であります。
- (ロ)フタイの徒をシソウしてパウキヨを計る。
- (ハ)彼はキベンを弄する傾向あり。
- (ニ)敢てゼイゲンを要せず。

【解答】(イ)私は徹頭徹尾不賛成であります。
(ロ)不逞の徒を使喚して暴舉を計る。
(ハ)彼は詭辯を弄する傾向あり。
(ニ)敢て贅言を要せず。

九八 側線ヲ施セル文字ノ讀方ヲ記セ。

イ、君の「故山」に「歸養」せしより久しく「聲咳」に接することを得ざりしかど余豈一日も君を忘れむや。圖らざりき一日「滄桑」の變にあひて爰に君と「旗鼓」の間に相見ゆるに至らむとは。ロ「未曾有」の天變地異に當り罹災民の救護は國民的共同「援

助」の下に迅速に進捗せり。

【解答】イ、故山、コザン。歸養、キヤウ。聲咳、ケイガイ。滄桑、サウサウ。旗鼓、キコ。ロ、未曾有、ミゾウ。罹災、リサイ。救護、キウゴ。援助、エンジョ。進捗、シンショウ。

九九 意義ヲ簡明ニ記セ。

故山に歸養す。
聲咳に接す。
滄桑の變。
未曾有。
進捗。

【解答】故山に歸養す。(故郷に歸つて保養すること)。聲咳に接す。(聲咳は笑ひ且つ語ること。聲咳に接すは面會を得ること)。
滄桑の變。(世の中がうつりかはりの甚しいこと)。
未曾有。(未だ曾つて有らざること)。
進捗。(すゝみはかどること)。

一〇〇 適確ナル漢字ヲ記セ。
大樹が「かれる」。

池水が「かれる」。

外遊を「おくる」。

名産を「おくる」。

所在を「たづねる」。

知己を「たづねる」。

職務を「とる」。

薪木を「とる」。

動途に「つく」。

大阪に「つく」。

【解答】大樹が「枯れる」。池水が「涸れる」。

外遊を「送る」。

名産を「贈る」。

所在を「尋ねる」。

知己を「訪ねる」。

職務を「執る」。

薪木を「採る」。

官途に「就く」。

大阪に「著く」。

一〇一 過般文部省臨時國語調査會ヨリ發表セラレタル常用略字ノ内五字ヲ記セ。

(例)ハバ驛ヲ駅、萬ヲ万ト書クガ如シ)

【解答】國・鉄・経・身・札。

一〇二 左ノ語句ノ右方ニ讀方ヲ、其ノ下ニ意義ヲ記入スベシ。

- 一、扶掖獎勵。
- 二、物價調節。
- 三、毀譽褒貶を度外視す。
- 四、奢侈安逸。

五、冗費。

- 一、扶掖獎勵、扶助しみちびます、め勵ますこと。
- 二、物價調節、物の價を適當にとのへること。
- 三、毀譽褒貶を度外視す、他人からのほめられたりけなされたりすることを氣にとめないこと。四、奢侈安逸、おごりなまけること。五、冗費、むだな費用。

一〇三 左ノ文字ニ誤リアラバ正セ。

- 一、雄辨、ユウベン、演説ノ達者ナコト。
- 二、治療、チレウ、醫者ノ手當ヲ受ケルコト。
- 三、膨漲、ポウチヨウ、大キクナルコト。
- 四、循環、ジュンクワン、メグリマハルコト。
- 五、混淆、コンコウ、トリマゼルコト。
- 六、億側、オクソク、ヨキホドニオシハカルコト。
- 七、緻密、チミツ、目デミテコマカシイコト。
- 八、抱懷、ホウクワイ、ムネニモツテキルコト。
- 九、勤忍、カンニン、シノビコラヘルコト。
- 十、轉撤器、テンテツキ、クルマ道ヲカヘル道具。

【解答】一、雄辯。二、治療。三、膨脹。四、循環。

環。五、誤ナシ。六、憶測。七、綴密。八、抱懷九、堪忍。十、轉輸器

一〇四 左ノ句ヲ解釋シナサイ。

(イ)常軌を逸す。(ロ)臆測をたくましくす。(ハ)聲望一時に加はる。(ニ)思ふ様あれば語るまじ。(ホ)甚だ心許なし。

【解答】 (イ)常道をふみはずしてゐること。(ロ)よい加減のあて推量をする。(ハ)名聲と人望が一時に集る。(ニ)考へることがあるから語ることをしてしない。(ホ)ひどくきづかひはし心配である

一〇五 左ノ語句ニ假名ヲ付ケソノ上解釋シナサイ

(イ)父母に事ふ。(ロ)鍍金。(ハ)内帑。(ニ)伽藍。(ホ)下知する。(ヘ)供御。(ト)時日を違ふ。(チ)輔弼。(リ)異口同音。(又)一人。

【解答】 (イ)父母に事ふ。父母に孝養をつくす。(ロ)鍍金、ある金屬の上に他の金屬をかけること(ハ)内帑、天皇の御手許金。(ニ)伽藍、僧侶の修業する所、又寺の建物のと(ホ)下知する、指圖令をする。(ヘ)供御、天皇の御膳(ト)時日を違ふ時

日をとちちがへる。(チ)輔弼、主上を御助けすること。(リ)異口同音、多くの人が同じ説をなすこと。(又)一人、一層。

一〇六 左記甲乙ノ各文章ヲ比較シ乙ニ附セル括弧内ニ之ト意味相通ズル甲ノ文章ノ番號ヲ記入セヨ
甲1、なせばなる なさねばならぬ なるわざをならずとすつる人のほかなさ。

2、明日ありと思ふ心の仇櫻夜半の嵐の吹かぬものかは。
3、立て初むる志だにたゆまずば龍のあぎとの玉もとるべし。

乙()思ひ立つ日が吉日。

()精神一到何事か成らざらん。

()能はざるに非ず爲さざるなり。

【解答】 (2)思ひ立つ日が吉日。

(3)精神一到何事か成らざらん。

(1)能はざるに非ず爲さざるなり。

一〇七 左ノ語ト反對ノ意味ヲ有スル語ヲ一ツツ、舉ゲヨ。

卑近 精密 淺薄 間接 内容 離伏

【解答】 高遠 粗糲 深厚 直接 外形 雄飛

一〇八 解釋。

一夜徹宵して翌日弱る様なることにては到底世界的國民として列國の間に凋歩致候事はむつかしかるべしと存候今更めきたる申條ながら卑見述べ候餘は面晤を期し候。

【解答】 一晩夜あかして翌日弱るやうなことではどうしても廣く世界の一國民として數多國々の間に大股にて歩くことはむづかしいであらうと思はれます。今更事あたらしく云ふほどのことでもないが私の考へを申し述べましたそのあとは御面會した時に申し上げませう。

一〇九 次の語の右傍に片假名にて読み方を附し然る後意義を解け。

(イ)功を一簣に虧く。(ロ)嚆矢。(ハ)東帶。(ニ)藩翰譜。(ホ)泉路の首途。

【解答】 (イ)功を一簣に虧く、今迄やつてきて成就したものを僅かの誤ちからとりかへしのつかぬ

ことにする。(ロ)嚆矢、もの事のはじめ。(ハ)東帶、昔時正式 裝束の稱、冠、靴、石帶等正式に具備して裝ふもの。(ニ)藩翰譜、徳川時代の學者新井白石の著述せるもの。(ホ)泉路の首途、泉路は死者のゆく路死にゆく旅立と云ふ意。

一一〇 左の熟語を用ひて文語體の短文を作れ。(但し一熟語一文のこと)

(イ)風光 (ロ)類聚 (ハ)回天 (ニ)諄々。

【解答】 (イ)山紫に水清くして風光明媚の地なり(ロ)自叙傳を(ハ)回天の偉等を企つ(ニ)忠孝の道を諄々と説く。

一一一 左の諸文章中()の所に正確なる平假名を入れよ。

(イ)梅は散りて鶯の聲も老()たり。

(ロ)君の植()し草花咲く頃となれり。

(ハ)宇宙の洪大無邊なるを想()て莊嚴の處に堪()ざるべし。

【解答】 (イ)梅は散りて鶯の聲も老(い)たり。(ロ)君の植(え)し草花咲く頃となれり。(ハ)宇宙の洪大無邊なるを想(おぼ)て莊嚴の處に堪(た)ざるべし。

大無邊なるを想(ひ)て莊嚴の感に堪(へ)ざるべし

一一二 次の語句を解釋せよ。

(イ)父母の健かに在すは子たる者の無上の幸福たるを思ひ和氣愉色を以て朝夕之に事ふべし。

(ロ)ほととぎすの聲は晝よりも夜聞くに哀深し落ちかゝる下弦の月、さてはほのくくと明けそむる東雲の空は風情更に多し。

(ハ)塗炭の苦。仔細ありけに。

【解答】 (イ)父母が健全で居ることは子としてこの上もない幸福であることを思ふてやさしい心もちでうれしそうな顔色をもつて朝夕父母につかへねばならぬ。

(ロ)ほととぎすの聲は晝聞くよりも夜聞く方が趣味が多い。落ちかゝつた二十日すぎの月夜、又はほのかに白むあけがたの春空に聞けばおもむきが一層多いものである。

(ハ)水火のくるしみひどい苦しみ。わけがあるらしく。

一一三 左ノ文ヲ解釋セヨ。

イ、まだ改良の餘地がある。

ロ、敬虔の情を起させずにはなかつた。

ハ、全く其の選を異にするものと言つてよい。

【解答】 イ、これ以上改良せねばならぬところがある。

ロ、うやまひつゝしむ心を起させたいやでも起させずにはおかないと云ふ意。

ハ、全く選擇したものゝ内飛びぬけてよいと云つてもよろしい。

一一四 書取。

コンクワイのギヤウセイセイリにトモナふ、各省クワンセイカイセイアンは二十五日をモツてゼンブテソロつて、法制局にクワイソウされたから同局のシンギシウレウシダイジュンジ閣議にジャウテイされるハズである。

【解答】 今回の行政整理に伴ふ、各省官制改正案は二十五日を以て全部出揃つて、法制局に廻送されたから、同局の審議終了次第順次閣議に上程される筈である。

一一五 左ノ字ノ意味ヲヨク考へ假名及送假名ヲ附シテ二種類ノ讀様ヲ示セ(例)「着」ノ字ナレバ「着る」着く」ノ如シ。

1 忽。2 好。3 覺。4 與。5 盡。

【解答】 1 忽。2 好。3 覺。4 與。5 盡。

3 覺。覺ゆ。覺る。4 與。與る。與に。5 盡。盡く。盡く。

大正十五年五月二日施行

一一六 左ノ文中、括弧内の箇所ヲ解釋セヨ。

義勇あるものは、「已に克ち」、「過を貳たびせず」、「信じて行ひ」、「權威に阿らず」、「名利に惑はず」、「偏せず」、「黨せず」、「主義節操に堅く、君に忠に、國に竭し、「危を見て命を致す」

【解答】 1 自分の欲望に打ち勝つ。

2、過失を二度くりかへすことをしない。

3、信念を持つて行動する。

4、権力にへつらはない。

5、名譽や利益に迷はない。

6、ある一方にかたよらず、徒黨を組まない。

7、危難にのぞんで生命を投げ出す。

一一七 次ノ語ニ讀方ト意義トヲ附セ。

1、日和。2、服膺。3、雄飛。4、唐突。5、微恙。

【解答】

1、日和、空模様。

2、服膺、心にとめてよく守ること。

3、雄飛、奮起して他を威服すること。

4、唐突、不意。

5、微恙、すこしく身體のすぐれないこと。

一一八 次ノ片假名ノ部分ニ漢字ヲ入レヨ。

甲、レイジャウの心アツク、ザサシンタイのギハウはソナハリたれども、一パン公シユウにタイする公トク心はナホハナハだエウチなるが如し。

乙、1、ハンシヨク(ましふえる、こと)

2、クワンマン(ゆるやか)

3、ハンブク(くりかへす)

【解答】 甲、禮讓の心厚く、坐作進退の儀法は備

りたれども、一般公衆に對する公德心は尙甚だ幼稚なるが如し。
乙、1、繁殖。2、緩漫。3、反復。

第二篇 講讀法

第一章 獨學

いかなる良き教師なりとも獨學の心なきものを如何ともする能はず、昔より勝れたる人は皆獨學の人なり、獨學とは父母教師の勧め促を待たずして自ら進み、自ら勉めて、わが志すことを練習するを云ふ。注込まるゝを待たずしてわれに觸るゝものを吸ひ取るなり、漏斗に似ずして海綿に似たるが獨學なり、獨學は下等動物と異なる點の一つなり、下等動物とても幾らかは教育することを得れど獨學さすることは難し象はさすがにかしこければ稀には教へられし藝を獨習することあり鸚鵡もまた、時としては、教へられし言葉を復習すと云ふ。されどこれらは稀なる例なり。

【語義】いかなるゝどんな、●良き教師なりともゝよい先生でも、●獨學ゝ自分で學問やわざ品行を學ぶ
●如何ともする能はずゝどうすることも出来ない、よくすることが出来ない、勝れゝ他人より勝つた、
●なりゝである、●教師の「の」は「が」●勧め促すを待たずゝさあなさいとすゝめたり催促するのを待つてゐないので、●自ら自分で、●志すゝしやうと思ふ、●練習くりかへし稽古する、●注込むゝ教へ込

まれる、教へることを水類を注込むにたとへて云ふ、●觸るゝさはる●目や耳や鼻等に見えたり●聞こえたり香つたりする事を云ふ、●吸取るゝ取り込む、●漏斗ゝ液体をつぎ込む時に用ひる器、●海綿ゝ液体を吸込む性質が強く海に産す、●人の「の」は「が」の意、●異なる點ゝ異ふ事柄、●さすがに「だけあつて」の意味で象は賢しいと人から言われてゐるだけあつて、●ければゝから、●稀ゝたまに、●教へられし「し」は「た」象はラツバを吹いたりいろゝの藝をする、●復習ゝおさらひ、●と云ふゝと云ふことです、さうです、●されどゝしかし、●稀なる例ゝたまにあるためし。

(文意) どんな良い先生でも獨學の心が無いものを、どうすることも出来ない。昔から勝れた人は皆獨學の人である、獨學と云ふのは、父母や先生が進めるのを待たず、自分で進み勉めて自分の目指す事を練習するのを云ふのである。教へ込まれるのを待たないで自分に觸れるものを吸ひ取るのである。漏斗に似ないで海綿に似たのが獨學である。

獨學は人間が下等動物と異ふ事柄の一つである、下等動物でもどれだけかは教へる事が出来るが獨學させる事は難かしい象は賢いと云われるだけあつて、たまには教へられた藝を獨學する事もある獨鶴もまたたまには教へられた言葉をおさらひすると云ふことです。しかし之等は稀にある例です。

獨學は教場にては家庭にては、途中にてはなし得べきことなればこの志ある者の進歩は、月日を重ねて著しきに至る、體も心も手も足も目も耳も獨學次第にて驚くべき發達をなせばなり。

體育に熱心なる人の體格と並の人とを比べて其の差の甚だしきを見よ、或は音樂好きの耳の感じの秀でたる、細工好きの、手の器用なる、いづれも平生の心掛による「好きこそ物の上手なれ」とは獨學の効能を云へるなり。

(語義) 教場にては「でも」は「でも」●家庭ゝうち●途中ゝみちなか、●得べきゝ出来る、●なれば「なれ」は「である」●「ば」は「から」の意味と「なら」の意味、と「行けば」を「行く」と云ふ様に三つの意味がある、こゝでは「から」の意、●著しゝ目につく、●至るゝなる、●體ゝからだ●獨學次第にてゝ獨學の工合で、●驚くべき發達をなせばなりゝ驚かねばならぬ程發達をなせばなり「ばかり」は「からです」の意で説明する時に用ひる、●體育ゝ身體をよくしようとする、●熱心ゝせいを出す●「なる」は「な」の意、●體格、ゝからだのしくみ、●並み普通ゝあたりまへ、●差ゝちがひ●音樂好きゝ、音樂をよく人、●秀でたるゝすぐれた事や、●細工ゝ、小さい手わざ、●器用ゝこまかい事に上手、●平生ゝふだん、●好きこそゝ好きだと物が上手になると云ふ語、こゝは強めて云ふ言葉、こゝがあれば「なり」と云ふ所は「なれ」と云ふ「なれ」も「た」の意、●とはと「云ふのは」とゝと思ふのは「の」二意がある、こゝでは上の意、●効能ゝきゝめ普通は効能と書くが効の古い字は效である、●いへるゝ云つた。

(文意) 獨學は教場でも家庭でも、道中でも出来る事であるから、獨學の氣があるものゝ進みかたは月日が重なるにつれて目につく様になる、體も心も、手足も耳も目も、獨學次第で驚かねばならぬ程發達するからです體育に熱心な人の體格と普通の人の體格とを比べてその差の甚だしいのを見なさい

或は音楽好きの人の耳の感じが勝れたのも手わざの上手なものも皆ふだんからの心掛けが異ふのである好きだと物事が上手になると云ふ諺があるのは獨學の効めを云つたのである。

外國には目づもりにて目方又は間尺をあつることを専門とする者あり、遠方より見たるばかりにて、其の靈には茶ならば幾何砂糖ならば幾何這入るべし、其の石は何貫何十目その丸太は何間何尺など云ふにあたらざるは稀なりとぞ。雀は並の人の目には、どれもこれも同じ様に見ゆれども或る老人の鳥さしは一羽々々に見分けて、「今そこ一飛びしはきのふそこの枝に來りをりし雀なり、それそちらへおりしは去年巢立ちたるにて、今飛びし雀の甥なりなどいひけり、鳴く聲も喜怒哀樂、それ／＼に區別ありとぞこれらは教へ得べきにあらず、又學び得べきことにてもなし、ひとり獨學の力のみこれをよくすべきなり。

(語義) 目づもり一實際斗らないで目で見たゞけで、●間尺一幾間幾尺、●あつる一云ひあてる、●専門一そればかりを仕事にする、●稀れ一めづらしい、●とぞ下に「いふ」と云ふ語を略した」と云ふことである」の意、●並の人一普通の人、●巢立つ一巢から出て獨立する、●甥一自分の兄弟姉妹の子を自分で云ふ、●喜怒哀樂一よろこびいかり、かなしみたのしみ、●ひとり一たゞ、●よくすべき一出來させられる。

(文章) 外國では目で見たゞけで、目方や何間何尺を云ひ當てることを仕事とする人がある、遠くから

見たゞけで、其の靈には茶なればとれだけ砂糖なればとれだけ、這入つて居るだろふ。その石は何貫何十目其の丸太は何間何尺など言ひ當てると當らないのが稀らしいと云ふ事である、雀は、普通の人の目には皆同じに見えるが或る年取つたとりさしは一羽／＼に見わけて「今そこへ飛んだのはきのふそこの枝に來て居つた雀である、それからそこへ下りたのは去年巢から出たもので、今飛んだ雀の甥である」など云つた鳴き聲も喜び、いかりかなしみ、それぞれ異があると云ふことである。これらは教へられるものではない、又學び得られる事でもない、たゞ獨學の力だけが之をよくさせるのである。獨學の力を以つてすれば、意志弱き者も剛毅となるべく記憶鈍き者も物覺へよくなるべく手先の不器用なる者も器用となり脚弱き者腕力なき者、何れも生れかわりたる如くなることあり、とりわけ心立の獨學こそ大切に、常に申しき話、申しき友に遠ざかり勝れたる人善き人の噂に親しみ、これを手本に自から學び習ふことを勉むる者は、年を経て其の手本に近寄ること必定なり。

(語義) 意志一、心や思ひこみ、意志は心の力、●剛毅強一くたけし、●なるべく一なるでせう●記憶鈍き一、物覚えのわるい、●腕力一腕の力と云ふ字であるが、腕の力ばかりでなく、身體の力と云ふ意にも用ひる、●生れかわる一前とまるで違ふ、●とりわけ一特別に、●心立一精神●こそ大切なれ「こそ」とあるから下に「なれ」となる「こそ」が無ければ「なれ」は「なり」となる申しき、下品な、●遠ざかる一近よらない、●勝れ一まさる、●噂一世の評判、●手本一手本として、●年を経て一永年

の間には、●手本に近寄る―手本に似て来る、●必定―必ずそうだ。

(文意) 獨學の力ですれば、心が弱い人も強くたけくなる。物覚えがわるい人もよくなる、手先きが不器用なものも器用となり脚の弱いものも腕の弱いものも皆生れ變つたやふになる事がある。特別に精神の獨學が大切である。いつも下品な言葉や、下品な友達に近寄らないで勝れた人やよい人の評判に親んで、これを手本として自分で學び勉めるものは、年月の経つにしたがつて其の手本に似て来る事はきつと間違ひはない。

第二章 那須與一宗高の扇的

與一宗高鎗を取つて番ひ、よつ引いてひやらと放つ、小兵といふ條、十二束、三伏、弓は強し鎗は浦響く程に長鳴りして、あやまたず扇の要際一寸許り置いてひいふつとぞ射切つたる鎗は海に入りければ扇は空にぞ揚りける暫しは虚空に閃きけるが、春風に一揉二揉もまれて、海にさつとぞ散つたりける、夕日の輝きたるに、皆紅の扇の日出したるが白波の上に漂ひ浮きぬ沈みぬゆられければ、沖には平家釧を叩いて感じたり。陸にて源氏箴を叩いてどよめきけり。

(語義) ●鎗―鎗矢のこと矢の一種、即ち矢竹の先に木又は角の蕪を、附けた物である、●よつ引いて

―よく引いての音便であつて力強く云ひ表した語●ひやう―矢が弦をはなれて飛ぶ音の形容語、●小兵―身體の小さいこと、●いふ條―云ひながらもの意、●十二束、三伏―一握指四本の幅十二と更に指三本伏せ竝べたゞけの矢の長さ、●ひいふつと―扇の射切られた音の形容語、●箴―矢を入れる器。(文意) 那須與一宗高は鎗矢を取つて弓の弦に掛け十分に引き絞つてひようと射てやつた。小さい身體とはいひながらも、十二束三伏の長い矢であつて弓は張りが強かつた。その鎗矢は海一帯に響き渡る程に長鳴りして、狙ひ外れず扇の要の側一寸許り置いてひいふとまつ切つた、そうしてその鎗矢は海に這入つたが扇は空に舞ひ揚がつた、暫くの間は空中にひらくとして居たが春風のために一度二度吹き廻されて海中にさつと散つてあつた夕日の輝いてるうちに眞赤な扇の日輪を描いたものが白い波の上に漂つて、ふわりふわりと浮いたり、さうつと沈んだりして揺られてあつたから沖の方では平家の武士が釧を叩いて感心した。又陸の方では、源氏の武士が矢を入れる箴を叩いてその音が鳴り響く様子であつた。

(注意) この文は最も有名な那須與一の扇的の箇所でも軍記文の特色を表してゐる。

第三章 楠木正成につきて

建武中與の人物にては、禪神家に藤原兼房頼鈴家に楠木正成、固より輿論に歸する所なり。もし其の人品

をいはい、藤房は公卿輔弼の臣たり正成は將帥禦侮の臣たり。其の材の大小は正成の材、藤房の及ぶ所にあらず。藤房龍馬の諫は、直言極諫朝廷を聳動せり。誠に朝陽の風鳴といふべし。然れども正成恢復の巧とは並べ論じ難し其上藤房は一諫の後國を去り世を遁れしが、正成は其の身國難に殉ぜしのみならず、忠義代々家に傳へ天下に著る。當時誰か正成に比する人あるべき。

(語義) 建武中興Ⅱ後醍醐天皇の北條高時を誅滅し、王政を復興して建武と改元して、天下を統治せられた事を指す。●紺紳家Ⅱ官位身分の貴い人公卿をさす。「紺」とはさしはさむ「紳」とは大帯、笏を大帯にさしはさむ人の義、●鞘鈴家Ⅱ兵法家を云ふ「鞘」とは弓袋「鈴」とは矛の柄の義●輔弼Ⅱ天皇を助けて政治を行ふと云ふ意味にして輔弼の臣とは即ち天皇を助けて政治を行ふ大臣の事なり、●禦侮の臣Ⅱ敵人の衝き来る侮を挫きふせぐ武臣、●龍馬の諫Ⅱ監治判官佐々木高貞が龍馬と稱して駿馬を後醍醐天皇に獻じた時藤房獨り凶事となし、政治に御心を盡されし事を諫めた事は、大平記卷十三、龍馬進奏の事の條に見えた、●聳動Ⅱ耳をそばだて、驚き、感動すること、●朝陽の風鳴Ⅱ世に稀なるすぐれた事をいふ。

(文意) 後醍醐天皇建武の盛運を復興された事に大功あつた偉人の中では公卿には藤原藤房兵法家には楠木正成を數へることは言ふまでもなく世人一般の議論の定つてゐる事である。もしその人の身分をいふならば藤房は公卿として天皇を助けて政治を行つた大臣であり、正成は軍隊の指揮者として、敵人の侮を挫きふせいだ武臣であるその材能の優秀を云ふならば正成の材能は藤房の及ぶ所でない。かの藤房が、監治判官、龍馬の獻上の際の諫は憚る所なく正直に云ひ語を盡して諫めて列座の朝臣を

驚かして感動させた、誠に世に稀なるすぐれた事と云つても宜しいであらふさうではあるけれど正成が皇運をとりかへした功とは並べて言ふことが出来ない。其の上に藤房は一度諫めた後は國元を去り世の中を逃れ去つたが正成は其の身國家の禍難に従つて死んだばかりでない、忠義の道を代々その家に傳へて、世の人の間に知られてゐる、その時代に何人がその功を正成に較べる人があらふか、較べる人がないのである。

第四章 書を讀む樂

書を読めば千歳の前にあひまみゆ。わが如き愚者と云へども古の聖賢に對してまのあたりその教をうくるが如し。その理高くして大いなること天の如く深くして廣きこと海の如し、學問の道の深く大いなること、天と海とのほかには譬ふべき物なしこのゆゑに、天下の樂みこれに似たるはなし。世の人この樂を知らず、大なる不幸なり。譬へば日本にゐる富士の嶽、吉野の花を見ざる人だに見せまくほし。況んや世の人にこの書を見せまくほしくこの道をしらせまくほし。人となりて書を読まずしてこの道をかゝわざる人はきはめて不幸の人にして、人となれる樂なしあはれむべし。

(語義) ●まのあたりⅡ目の當りの義、目前にの意、●譬ふべきものなしⅡ譬へることの出来る物がなく「ふま」は可能の意、●富士の嶽Ⅱ富士の山と同じ「たけ」は「高」の通音、●見せまほしⅡ見せたく

思ふの意、「まく」は「まし」の活用中にある希望その意の助動詞ほしは「欲し」の義から出た語である。
(文意) 書物を読むと、凡そ千年ともいふ様な多数の年の前の人に面會する様な心地がする自分(作者自身)のやうな愚なものであつても昔の聖人賢者に向つて目前にその尊い教へを受けるやうな心地がする、その書き記してある所の道理が高尙であつて範圍の廣いことは天の無限に高く廣いやうなもので、又その道理の深遠であつて範圍の廣いことは海の無限に深く廣い様なものである、學問の道の道理の深く範圍の廣いことは天と海とのほかに譬へる事の出来るものがない。このゆゑに世の中の樂はこれに似寄つた物がない然るに世の中の人はこの書物を読む樂を知らないこれは大きな不仕合である。例を擧げていふと日本の國に居つて富士の山や吉野の花を見ない人ですら、その人に見せたく思ふ。況して世の中の人にこの書物を見せたく思ふ、況して世の中の人にこの書物を見せたく思ふこの書物に記してある聖賢の道を知らせたく思ふことである。それゆゑに、人となつて書物を読まないでこの聖賢の道を知らない人は至つて不仕合な人で、人間と生れて來た樂がないのである。此等の人には可哀相なものと言つて宜しいのである。

第五章 旅行の樂

旅行して他郷に遊び、名勝の地、山水のうるはしき佳境にのぞめば、良心を感じおこし、鄙吝を洗ひすいぐ助となる。是も亦吾が徳をすゝめ智をひろむるよすがなるべし。又いひしらぬ靈境にゆきて見なれぬ山川のありさまを見て目をあそばしめ、その里人にあひて、その風土をとひあるひはおくまりたる

山ふところに、岩根ふみてたづね入りもとより山水の癖ありて、青山夢に入ることしきりなる人は、心をとめて歸ることを忘れぬ。あるひは山遠く眼界廣き海へのながめは、萬戸侯の富にもまされり。

(語義) ●良心●本然の善心即ち人間固有の善心を云ふ、●よすが●便りとなること即ち方便の意寄處の義から出た語、●靈境●神聖な土地又神社佛閣などのある土地を云ふ、●山ふところ●山と山との間の懐のやふに圍まれた所、●萬戸侯●一萬戸の封邑を有する諸侯を云ふ。

(文意) 旅行をして他の地方に遊び、名高く風光のすぐれた土地や山や、水の有様の美しい好い所に行くとい人間固有の善心を感じ起し卑しい心を洗ひ清める助けとなるものである、是もまた自分の道徳を進め智識を擴める方便であらふ又、言語で表し得ない様な神聖な土地に行つて見慣れない山や川の有様を見て人の目を樂ませその地方の人に會つて、其の處の土地柄を尋ね或は奥まつた山の間の處に、岩を陥んで尋ね入る事などをすると、元來深く山水を愛好する癖があつて香山の状態を度々夢に見るやうな人は心を留めて、歸る事を忘れてしまふ、或は山が遠く見渡しの廣い海邊の眺めは、一萬戸位の封邑を領して居る大名の富にも優つてをる事である。

(文意) この文即ち兼好法師の旅の文は精神修養上の意義深く、これを読むもの、本文の如く誰か青山しきりに夢に入ることを感じないものであらふか。

受驗漢文講座

緒言

一、漢文を學ぶ必要

漢文は漢字ばかりで書いた文章である。支那の文章、即ち外國の文章であるけれども、これを外國の文章なりとして疎にする事は出来ぬ。國文と等しく、十分に之を研究せねばならぬ。といふのは我々が今日使つてゐる文章には多分の漢文が交つてゐるので、漢文を知らないでは、十分に今日の文章を解釋する事が出来ぬからである。實際今日我々が國語國文として用ふる言語文章の、もとをとゞせば、漢語漢文から出たものが非常に多く、どこまでが國語國文であつて、どこ迄か漢語漢文であるかわからぬ程である。此意味から我々が書を読むにも、又文章を書くにも、漢文の研究は極めて必要である。

二、漢文に就いて

近頃漢字全廢論だの羅馬字採用説だのを唱へる人がある。羅馬字採用説の如きは今に於ては寧ろ空想

に近い、漢字全廢論者の説く處は一應の理窟は聞えてゐるが、しかし未だ實行には程遠い。試に漢字を一つも使つてはならぬとしたらどんなに不自由だらう。じゅうと書いたのでは、自由だが十だか判らない。

さて漢字を講ずる前にこゝで一つ漢文の要素たる漢字について少しく説いて置かう。漢字には、一つ字にも種々の読み方がある少なくとも二つ以上は訖度ある。例へば例といふ字にもレイとよむ読み方と、タメシとかタトヘバとか読む讀方と二つある。前者を音といひ、後者を訓といふ。訓は、日本の固有の言葉に漢字に宛てたのである。音にも、漢音・吳音・唐音等の區別がある。普通用ひる音は漢音である。次に漢字がどうして出来たかについてざつと説かう。漢字は其出来方によつて、象形文字・指示文字・會意文字・諧聲文字等に分つ事が出来る。(一)象形文字とは、其物の象を描いたもの、即ち繪を以て直に夫を字としたもので、日とか月とか龜とか鳥とかはこれである。字態が次第に變つて來て、今用ひてゐるものは餘程繪とは遠いものとなつてゐるが、もとを尋ねて見るとこれを會得される(二)指示文字とは數量とか方向とか形の無いものを、符號を以て現はしたもので、一・二・三・とか上下左右とかはこれである。(三)會意文字とは、二個の文字を組合はせて、其意味をとつたもので、日と月とを並べて、明とし三水即ち水が青いといふ意味から、清としたのなどが其例である。(四)諧聲文字とは象形文字若くは指

示文字と、聲を現はす文字とを組合せて拵へたもので、同じ川でも流が急でカツカツと瀬音を立てるのは三水の偏に、可といふ字をとり合せて河とし、流が大きく緩かにゴックくと鳴るものは江といふ字をとり合せて江とする等である。其他轉注假借などの法があるが、こゝには略する。

大日本帝國

大日本帝國ニ在亞細亞洲東一氣溫和土壤肥沃物産豊饒山水亦秀麗建國以來二千五百七十餘年皇統一系君仁臣忠國體之美冠ニ絶字内一。

(讀方) 大日本帝國は亞細亞洲の東に在り。氣候温和に土壤肥沃にして、物産豊饒に山水も亦秀麗なり、建國以來二千五百七十餘年皇統一系君仁に臣忠にして、國體の美なること字内に冠絶せり。

(語譯) ●氣候ニじこう、●溫和ニおだやか、●土壤ニ土地、●肥沃ニ土地がこえて農作物のよく出来ること、●物産ニこの土地から出たもの、産物、●豊饒ニゆたか、●山水ニ山や水のけしき、●秀麗ニすぐれてうるはしい、●建國以來ニ國のたてはじめからこのかた、●皇統ニ天子の御ちすぢ、●一系ニひとすぢ、●君仁臣忠ニ君はめぐみふかく臣は忠義にあつゐ、●國體ニくにがら、●冠ニ絶字内ニ天一下にすぐれてゐる。

(意譯) 大日本帝國は亞細亞洲の東にある、氣候おだやかで、土地がよくこえてゐて、物産がゆたかで、山や水の景色も亦すぐれてうるはしい、國をたてはじめからこのかた二千五百七十餘年の間天子の御血統がひとすぢであつて天皇は恵み深く亦臣民は忠義の心にあつく、そのくにがらの美しいことは天下にすぐれてゐる。

平氏篇

平氏出レ自ニ桓武天皇。天皇夫人多治比莫宗、生ニ四子。長曰ニ葛原親王。幼有ニ才名。長而謙謹、好ニ讀ニ書史。觀ニ古今成敗。以自鑒。叙ニ四品。任ニ式部卿。子高見孫高望。高望賜ニ姓平民。拜ニ上總介。子孫世々爲ニ武臣。其旗用レ赤。

(讀方) 平氏は桓武天皇より出づ。天皇の夫人多治比莫宗。四子を生めり。長を葛原親王と曰ふ。幼より才名あり。長じて謙謹にして書史を讀むを好み、古今の成敗を觀て以て自ら鑒む。四品に叙せられ式部卿に任ぜらる。子を高見、孫を高望といふ。高望姓を平氏と賜ふ。上總介に拜す。子孫世々武臣と爲り其旗赤を用ふ。

【語譯】 天皇夫人ニ我國にて中古の頃、妃の次に位して、天皇の御寢所に侍する女官にして、五位以

上に相當す。○四子一葛原、佐味、賀陽、大野の四親王。葛原は即ち長子なり。○親王もと皇子皇女は生れながらにして親王になりしも淳仁天皇より後は「親王」の宣下ありし御方をのみ親王と稱せり親王の子は「王」といひ三世の後、臣に列して姓を賜ふ。○謙謹「謙遜謹直」の略。○書史「歴史のこと皇の御ちすぢで君はめぐみふかく、人民は忠義に厚くその國がらのうるはしいことは天下第一である。○累遷「しきりに官位を進めらるゝ事。

○古今成敗「古より其時代に至るまでの成功と失敗との事蹟。○鑿む「手本とする意。○四品「親王の位は之を「品」といふ、一品より四品迄あり、四品は即ち第四位なり。○叙せらる「位を授けられること○式部卿「式部省の長官。○賜姓平氏「平氏といふ姓を賜つた。○拜す「命を拜するの意○介「國司(守)の次役。○武臣「武事を以て仕へる臣下。

○平氏は桓武天皇から出でてゐる。そして高望の時に「平」なる姓を賜つた。世に武臣となつて、後日源氏の白旗と對すべき赤旗を用ひた。

高望四子。國香、良將、良兼、良久。並爲東國守、介、鎮守府將軍。國香子曰「貞盛。材武善射。天慶中、以下平將門功叙從五位上。累遷從四位下。任鎮守府將軍。兼陸奥守。世呼平將軍。

(讀方) 高望に四子あり。國香・良將・良兼・良久といふ。並に東國の守・介・鎮守府の將軍と爲る。國香の子を貞盛と曰ふ。材武にして射を善くす。天慶中將門を平けし功を以て、從五位に叙せられ、從四位下に累遷す。鎮守府將軍に任せられ陸奥守を兼ね。世、平將軍と呼べり。

【語釋】 ○鎮守府將軍「東夷を鎮撫する重職。○材武善射「材力武勇ありて、そして射ることが巧み○平將門の亂は、既に諸君が日本歴史に於て研究せられたる如く、可成有名なものである。抑も彼れは始め檢非違使たらんことを希望して居つたのであるが、それが容れられなかつたので、遂に亂を起し、貞盛を信濃に要撃して之を敗走せしめ、常陸介藤原維幾を不意討ちにして生け取つたのである此の勝戦に内心大いに誇つて居た、時しも武藏守興世王なる者が來り參じて「關東八州は土地が肥えて物産が豊かに而も其の上四方には險阻なる山岳があつて之を圍繞し、他の國々から攻め入るのに、中々困難なる地方である。由來一州を取るも誅せられ、八州を取るも亦誅せられる。其の誅せらるゝ點は何れも一である。さればどうせやるなら大きい事をやつたがいゝぢやないか」と追縱旁々油を注ぎかけたので、將門大いに悦び、興世王を引き入れて自分の參謀長となし、關八州の大半を手に入れて例の偽官を造り文武百官を置いて僭越を極めたのである。これは貞盛が後日常陸守に任せらるるに及んで藤原秀卿と力を併せ討滅したので其功によつて位階が進み遂に平將軍と呼はるゝに至つたのであ

る。茲で諸君は考へなければならぬ。即ち平氏からは將門の如き不忠の臣を出したのであるから洵に一族の大恥辱であらねばならぬのだが、然し之が平定も亦能く平氏それ自身の手で之を爲したのであるから結局功罪相半ばすと云つて云はれぬことはないが、此の事は本篇の最後に、山陽が「平氏評論」として論ぜられてあるから、詳細は其の節に譲ることにする。

貞盛四子。季維衡。最勇。興平致頼源頼信、藤原保昌。齊名稱四天王。維衡曾孫正盛。有武幹正盛生忠盛。忠盛居伊賀、伊勢之間爲人眇一目。大治中。山陽、南海盜起。忠盛速捕有功。事白河、鳥羽二上皇。並有寵焉。

(讀方) 貞盛に四子あり。季を維衡といふ。最も勇あり。平致頼、源頼信、藤原保昌と名を齊しし、四天王と稱せらる。維衡の曾孫を正盛といふ。武幹あり。正盛、忠盛を生めり、忠盛伊賀伊勢の間に居る。人と爲り一目を眇す、大治中、山陽、南海に盜起る。忠盛速捕して功あり、白河鳥羽の二上皇に事へ並に寵あり。

【語釋】 ○季末子のこと。○平致頼平太夫。○源頼信鎮守府將軍。○藤原保昌左京大夫致忠が子也。○齊名同じ程の名聲あること。○四天王佛經に、「東方は持國天、西方は廣目天、南方は增長天、北方は多聞天の四天王ありて、四方を守護す」とある。之が轉じて武勇の勝れたる者等を以

て之に比し稱するに所謂「四天王」を以てするに至つた。○維衡曾孫貞盛—維衡—正度—正衡—正盛—忠盛の關係。○有武幹—武術に勝れてゐる。○眇一目—片目のこと。「眇」は和名を「スガメ」と云ふ片目が普通の人と異つてゐること。○大治—崇徳天皇時代の年號。○速捕—「召し取る」の意。○並有寵—御二方に愛せられた。

○平氏が桓武天皇から出、其の後幾代かを経て、例の將門の一件があり、爾來此の章に出てゐる忠盛までのことを諸君はよく系統的に頭に入れて居られたい。これから忠盛に関する一挿話を述べて次に愈々清盛の事柄から一族滅亡にまで至るのである。

鳥羽上皇建得長壽院。以忠盛董役。役竣除但馬守。聽昇殿。舉朝憎之。謀以豊明節會。乘暗刺之。忠盛曰。朝即蒙詬。不朝爲怯。其辱宗一也。乃帶刀而入。家人。平家貞與其子家長。衷申從焉。吏訶止之。家貞對曰。主君有戒心。臣將與同死。吏不得止。忠盛昇殿。就闇。拔刀。刀光外射。衆大畏。不敢發。及宴召忠盛命舞。衆歌曰。伊勢瓶子醋甕。蓋國音瓶子通平氏。醋甕通眇也。忠盛愧之。不終宴退。呼主殿司。脫刀授之而出。

(讀方) 鳥羽上皇、得長壽院を建てたまひ、忠盛を以て役を董さしむ。役竣りて但馬守に叙せられ、昇殿を聽さる。舉朝之を憎み、豊明節會を以て、暗に乗じて之を刺さんことを謀る。忠盛曰く、「朝すれば即ち詔を蒙り朝せざれば怯と爲る其の宗を辱むるは一也」と。乃ち刀を帯して入る。家人、平家貞、其の子家長と甲を衷して従ふ。吏之を訶止す。家貞對へて曰く「主君戒心有り。臣將に與に死を同じうせんとす」と。吏止むることを得ず。忠盛、殿に昇り、闇に就き刀を抜く。刀光外射す。衆大いに畏れ、敢て發せず。宴に及び、忠盛を召して舞を命ず衆歌ひて曰く、伊勢の瓶子は醋甕なりと蓋し國音瓶子は平氏に通じ、醋甕は眇に通ずる也。忠盛之を愧ぢ、宴を終へずして退き主殿司を呼び刀を脱し之に授けて出づ。

【語釋】 ○得長壽院 源平盛衰記に「鳥羽院の御願、三十三間の御堂を造進し一千一體の觀音に据ゑ奉る」とあるより三十三間堂だともいふ説もあるが未だ詳かでない。○董役 工事を監督せしむる○役竣 工事落成して。○叙せらる 位を拜するをいふ。○聽昇殿 清涼殿に昇ることを許さる。○舉朝 朝臣等悉く。○豊明節會 天皇より酒宴を賜ふ儀式、十一月中の丑の日之行ふ。○蒙詔 恥かしめらる。詔は「恥」と同義。○怯 卑怯。憶病。○辱宗 一家一門を辱しむ。○家人 家來。○衷甲 鎧を衣服の下に着ること。○訶止 叱り止むる。○戒心 「用心」と同義。○就闇 暗い處に行つて。○不致獲 手出しをし様としない。○伊勢瓶子 錯甕 伊勢にて出来る瓶子(ヘイシ)は錯甕(スガメ)である。即ち忠盛は伊賀、伊勢の間に居た。且つ瓶子と平子と音相通じ、錯甕と眇(スガメ)——忠盛は、即ち片目であるから——と音相通ずるによつて。斯く歌つて忠を盛辱かしたものである。○愧 心中恥かしく思ふ。○主殿司 殿中で掃除など司る役人。

衆勅 奏忠盛帶劍上殿、以兵自衛。請正典刑。上皇驚。召忠盛問之。對曰。臣之家人聞道路之言。尾臣而來。不使臣知。唯陛下斷其罪。如其佩刀。請問之。主殿司進之。木刀塗銀也。上皇。嘻曰。忠盛用意良苦。以死衛君。則武人之習耳。遂無所問。

(讀方) 衆、忠盛劍を帯び、殿に上り、兵を以て自ら衛るを勅奏し、典刑を正さんと請ふ。上皇驚き忠盛を召し之を問ふ對へて曰く臣が家人道路の言を聞き臣に尾して來り、臣をして知らしめず。唯陛下其の罪を斷ぜよ其の佩刀の如きは、請ふ之を主殿司に問ひたまへと。主殿司之を進む。木刀に銀を塗れるなり。上皇嘻ひて曰く、「忠盛意を用ふること良に苦めたり。死を以て君を衛るは、即ち武人の習ひのみと。遂に問ふ所なかりき。

【語釋】 ○勅奏 罪狀を申し上ぐること。○典刑 典は法律。刑は刑罰。故に典刑は法律に則つて其の罰を定むること。○道路之言 世間之評判(噂)のこと。○尾 跡からついて来る。○斷 裁判。即ちさばくこと。○佩刀 佩びてゐる刀。○嘻 感心してほめること。○良苦 まことに苦心した。○以死 生命を賭して。○無所問 別段に吟味しなかつた。

○忠盛が豊明の節會の演上、舞をなした一齣を平家物語から抄録して諸君の参考に資する。尙ほ今後も時々かうした古文の抄録をなすつもりであるから、現代文とはまたかけはなれた古文獨特の抄録を充分に味はれたい。「忠盛又御前の召に舞はれけるに、人々拍子をかへて」「伊勢瓶子は酢瓶なりけりとぞはやされける。掛卷も恭く此の人々は柏原天皇の御末とは申しながら、中比は都の住居もうとうとしく地、下にのみ振舞なりて伊勢の國に住給ふかゝりしかば其の國の器によせて、伊勢平氏とぞはやされける。その上忠盛の目の、すがまされたりける故にこそ、かやうにはやされけるなれ。忠盛如何にすべき様もなくして、御遊も未だ終らざるさきに、御前を罷り出でらるゝとて、紫宸殿の御後に於て人々の見られける所にて、横へさゝれたりける腰の刀をば主殿司に預け置きてぞ出でられける……(下略) 忠盛果遷、以正四位下刑部卿。卒於仁平中。忠盛有七子。曰清盛、經盛、教盛、家盛、賴盛、忠重、忠度。而清盛最極寵貴。

(讀方) 忠盛、果遷して、正四位下刑部卿を以て、仁平中に卒せり、忠盛七子あり。清盛、經盛、教盛、家盛、賴盛、忠重、忠度と曰ふ。而して清盛最も寵貴を極む。

【語譯】 ○刑部卿 刑部省の長官であつて、裁判監獄等の事を司どり、今の司法大臣に當る。○卒 五位以上の人の死をいふ。○仁平 近衛天皇時代の年號。○寵貴 恩寵、即ち信愛されたこと。○清盛が忠盛の子となつたについては一つのロマンスがある。それはかうだ、初め忠盛が白河上皇に仕へてをつた頃に、上皇に寵幸せられた宮女に兵衛佐局といふものがあつたが、忠盛は之と密通して懐妊させたのである。處が上皇は之を知つてをつたが、別に御咎めならず其のまゝ女官を忠盛に賜ひ、そして「若し生れた子が女であるならば、朕が之を引きとり、男であつたならば、其方に取らすであらう」と仰せられた。やがて生れた子を見ると男の子であつたので、御約束通り忠盛が頂戴して清盛と命名したのである。後の平家の御大は實に此の男なのだ。

義朝視平氏聲望出己上二也。心常嫉之。藤原通憲娶清盛女爲婦。亦與義朝有隙。通憲參與大議。多所釐正。帝授位太子。是爲二條帝。而上皇仍聽政。政在於通憲。上皇嬖人曰藤原信賴。水爲近衛大將。上皇欲聽之。通憲不可。因唐安藤山事

跡一上焉。以諷之。信賴慚恨。乃與義朝一深相結納。陰謀作亂。藤原經宗。藤原成親。藤惟原方等。皆與其謀。謀既定。而畏清盛一不致發。

(讀方) 義朝平氏の聲望己が上に出づるを視るや、心常に之を嫉む。藤原通憲、清盛の女を娶りて歸と爲す。亦義朝と隙あり、通憲、大議に參與し、釐正する所多し、帝位を太子に授く。是を二條帝とす而して上皇仍政を聽く。政通憲に在り。上皇の嬖人を藤原信賴と曰ふ。近衛大將たらんことを求む。上皇之を聽さんと欲す、通憲可かず因りて唐の安祿山の事跡を圖して上り、以て之を諷す。信賴慚恨し、乃ち義朝と深く結納し、陰に亂を作さんことを謀る藤原經宗、藤原成親、藤原惟方等、皆其の謀に與かる。謀既に定まる。而れども清盛を畏れて敢て發せず。

【語譯】 ○聲一望聲望譽人望の略。○嫉一所謂そねむ。○婦一子の妻。即ち嫁のこと。○有隙一仲の悪いこと。○參與一か、はりあづかる。關係する。○大議一重大なる政治の評議。○釐正一釐は治めることである。従つて釐正は秩序を立て、治め、以て失なき様にする。○仍一依然として。○嬖人一御氣に入りの者。○藤原信賴一中納言右近衛門督。○近衛大將一平城天皇の大同二年に、近衛を以て左近衛となし、中衛を以て右近衛となし、以て諸宿衛の禁軍を統領したものであるが、大將は即

ち其の長官である。○圖一繪卷物にすること。○安祿山事跡一唐の安祿山は玄宗に仕へて非常に寵愛を受けてをつた。玄宗は安祿山に罪あれど之を宥し、遂に營州の都督と爲した。然るに祿山は天寶十四年に反して兵十五萬を率ひ、南進して京師を陥れ、爲に玄宗は蜀に走つたのである、祿山は僭號一、年餘にして誅に伏した、通憲は即ち此の古事を引用して上皇を諷めたのである。○諷一それと明かに言はずに他のことのやうにして諷めること。○慚恨一慚ちて無念に思ふこと。○結納一互に結び納れる即ち深く相結託すること。○經宗一大納言。○成親一權大納言。○惟方一檢非違使。○與一あづかる。關係すること。

平治元年冬。清盛、重盛、率筑後守家貞五十人。詣熊野。行至切部。六波羅使者來告曰。昨夜信賴、義朝與源賴政、源光基等。率兵五百。圍三條殿。火之。並火少納言第一。殺傷無算。遂幽上皇及主上於禁內。少納言亦遭害矣。衆愕然。清盛曰。爲之何如。宜到熊野一計之乎。重盛曰。武臣赴天子之急。何猶豫爲。清盛曰。如無申何。家貞曰。臣慮有是事一矣。開其擔。出甲冑五十。器械弓箭稱之。衆乃結東北還。

(讀方) 平治元年冬清盛、重盛、筑後守家貞等五十人を率る熊野に詣ず、行きて切り部に至る。六波

羅の使者來りて告げて曰く。昨夜信賴、義朝、源賴政、源光基等と兵五百を率ゐ、三條殿を圍みて之を火き並に少納言の第を火く殺傷算なし、遂に上皇及び主上を禁内に幽し、少納言も亦害に遭ふと。衆愕然たり。清盛曰く。之を爲すこと如何。宜しく熊野に到り之を計るべきかと。重盛曰く。武臣天子の急に赴く。何ぞ猶豫を爲さんと。清盛曰く。甲なきを如何せん。家貞曰く。臣豫め是事あるを慮ると其の擔を開きて甲冑五十を出す。器械弓箭之に稱ふ。衆乃ち結束して北に還る。

【語譯】 ○平治二條帝の時の年號。○熊野一紀伊國牟婁郡に在る社。祭神に速玉男神。事解男神。伊弉册神。○切部一紀伊國日高郡に在り。○三條殿一三條鳥丸に在る上皇の御所。○火一「燒く」と同音同義。○少納言第一少納言通意の邸宅。○殺傷無算一殺されたり傷つけられたものが數の知れぬ程多い。○幽一押し込める。○禁内一御所の内。○遭害一即ち殺されたこと。○愕然一不意の事に逢ふて驚く貌。○爲之何如一此の處置をどうしやう。○急一事變。○猶豫一ためらふ。○擔一になはせて來た櫃。○甲冑一鎧兜などの武具。○器械一こゝでは諸道具の意。○稱之―相應の數だけあつて整つてゐる。○結束―身仕度すること。

已而聞源氏公要阿部野。清盛曰。彼衆我寡。我且避之四國。以謀再舉。重盛曰。機不可失。失今不伐。彼將先我。我寡而敗何恥有之今日之事有死而已。清盛曰。吾

志決矣。率衆疾馳。未至阿部野。遇一騎。衆意源氏使也。騎至曰。臣至自六波羅。六波羅之共迎駕。見在阿部野。請速歸。衆相喜慶。踴躍入京師。

(讀方) 已にして源氏の公、阿部野に要すと聞く。清盛曰く。彼は衆、我は寡、我れ且く之を四國に避けて以て再舉を謀らんと。重盛曰く。機失ふべからず。今を失ひて伐たずんば彼れ將に我先せん。我れ寡にして敗るゝとも何の恥か之れあらん。今日の事死あるのみと。清盛曰く。吾が志決せりと衆を率ゐて疾く馳す。未だ阿部野に至らざるに、一騎に遭ふ。衆意へらく。源氏の使ならんと。騎至りて曰く。臣は六波羅より至れり。六波羅の共、駕を迎へて見に阿部野に在り請ふ速に歸れと。衆相喜慶し、踴躍して京師に入る。

【語譯】 ○要す―待ちうける。○阿部野―攝津の國に在り。○再舉―後日の旗上げ。○機―機會○迎駕―貴下を迎へて…………と云ふ意。○見に―けんにと讀みて目のあたり即ち現在の意。○喜慶―喜び祝ふ。○踴躍―小をどりすること。喜びの極度に達せる形容。

當是時。信賴自爲大臣大將。義朝以下皆拜官。信賴衣冠僭擬乘輿。坐百官上。聽斷庶政。百官莫敢仰視。獨左衛門督藤原光賴不屈。因會議一挫信賴。勗其弟惟方。謹

二宮。以待清盛。清盛既還、信賴聞之。益諸門守兵。清盛謀息其備。乃致名簿於信賴。以示無他。清盛計拔帝。乃與惟方通謀。夜放火二條大宮。守門兵舍守救之。天皇乃與皇后同車。蒙衣而伏。出藻壁門。惟方從。門者誰何。惟方曰。宮人也。門者獨於車中曰。可矣。既出。重盛以騎三百迎謁于途。奉入六波羅。百官奉焉。

(讀方) 是の時に當り信賴自ら大臣大將と爲り、義朝以下皆官に拜す。信賴衣冠乘輿に僭擬し百官の上^上に坐し、庶政を聽斷す。百官敢て仰ぎ視るなし。獨り左衛門督藤原光賴屈せず會議により信賴を挫き其弟惟方^{つひかた}を勗め、二宮を守り以て清盛を待たしむ。清盛既に還る。信賴之を聞き、諸門の守兵を益す。清盛其備を怠らしめんと謀り乃ち名簿^{なほ}を信賴に致し以て他なきを示す。清盛帝を抜くを謀り、乃ち惟方と謀を通じ、夜火を二條の大宮に放つ守門の兵守を捨て、之を救ふ。天皇乃ち皇后と、車を同うし、衣を蒙りて伏し、藻壁門より出づ。惟方從ふ。門者誰何す。惟方曰く宮人也と。門者車中を燭して曰く可なりと。既に出づ。重盛、騎三百を以て途に迎謁し、奉じて六波羅に入る。百官奉れり。

【語譯】 ○衣冠僭擬乘輿。服裝其の分を踰えて天子に眞似ること。平治物語に「信賴卿は小袖に赤き大口冠に巾子紙入れて偏に天子の御振舞の如くなり」とあり。○庶政。もろくの政治。○聽斷。と

りさばく、處置すること。○左衛門督。左衛門府の長官のこと。○不屈。心をまけて従はぬこと。

○會議。集會評議の略。○因り。機會とし。○勗め。意見をして勵み勉めさす。○二宮。二條天皇と後白河上皇の御二方を指す。○名簿。名前を書き連ねしもの、即ち連名帳。○致す。差し出す。○無他。二心なし。○計拔帝。幽せられたる帝を取り出すことを計り。○救之。茲にては鎮火につとむるの意。○蒙衣。かつぎといふ婦人の衣を頭よりかぶり。○藻壁門。皇居の西の門。○門者。門番。○誰何。「何の誰か」と問ひ訊すこと。○宮人。宮女。○燭して。ともしびを照らして。○可矣。よろしい。○迎謁。お迎ひ申して。○奉じ。御供して。○奉る。集ると同様。

已而上皇又逃於仁和寺。而信賴等仍據大內。帝召清盛。命討賊。且戒之曰。宜伴退走誘賊出宮。莫使宮闕罹兵燹也。清盛對曰。臣誅逆賊。如指之掌。勿以勞天心。至若後命。臣甚惑焉。雖然不敢不盡心。乃勸兵三千騎。令重盛教盛賴盛將之。分兵赴大內。

(讀方) 已にして上皇又仁和寺に逃れたまふ。而して信賴等仍ほ大内に據る。帝清盛を召し、賊を討つを命じ、且つ之を戒めて曰く「宜しく偽りて退き走り、賊を誘ひて宮を出すべし宮闕をして兵燹に

覆らしむるなかれ。」と清盛對へて曰く「臣逆賊を誅すること之を掌に指すが如し。以て天心を勞したまふ勿れ。後命の若きに至りては、臣、甚だ惑ひぬ。然りと雖も、敢て心を盡さずんばあらず」と乃ち兵三千騎を勅し重盛、教盛、頼盛をして之に將たらしめ、兵を分けて大内に赴く。

【語釋】 ○仁和寺にんなじと讀む。京都の北にある寺。○大内御所のこと。○伴るいつはること。○官闕御所の意、官は即ち宮、闕は宮門合して御所。○兵變兵亂より起れる火災。○如指之掌はたとへば掌を指すが如く、物事のいと容易なること。○後命即ち御所を兵火の災にかからしむるなどの御命令。○惑こまる、迷ひ惑ふ意。○勅整へ。

賊開承明建禮二門。閉陽明待賢郁芳三門。樹白旗二十餘旒守之。我兵望見色動重盛勸衆曰。年爲平治。地爲平安。而我平氏也。天示吉兆。獲勝必矣。汝輩努力。乃分其兵爲二。留一于大宮巷。以其一薄待賢門。大呼挑戰。信賴怖墮馬。重盛排門而入。至大庭椋樹下。與源義平大戰。紫宸殿前。七匝櫻橘樹。出至大宮巷。杖弓以息。平家貞目之曰。可謂平將軍再生矣。

(讀方) 賊、承明・建禮の二門を開き、陽明・待賢・郁芳の三門を閉ぢ、白旗二十餘旒を樹て、之を守

れり。我が兵、望見して色動く。重盛是れを勵まして曰く「年は平治也、地は平安也。而して我は平氏也。天。吉兆を示せり。勝を獲んこと必せり矣。汝が輩、努力せよ」と。乃ち其の兵を二と爲し、一を大宮の巷に留め其の一を以て待賢門に薄り、大いに呼んで戰を挑む。信賴、怖れて馬より墮つ。重盛、門を排して入り、大庭の椋樹下に至り源義平と大いに、紫宸殿の前に戦ひ、櫻橘の樹を七匝し出で、大宮の巷に至り、弓を杖きて以て息ふ平家貞、之を目して曰く「平將軍、再生すと謂ふ可し」と。

【語釋】 ○陽明・待賢・郁芳三門紫宸殿の東に在り。○旒一とながれ。旒幾本といふときに旒幾旒といふ。○色動く恐怖の念顔色にあらはると。○平安所謂「平安京」にして今の「京都」。○吉兆めでたき前表。○大宮巷皇居の東なる南北の道路。○挑戦戰はんと仕掛けること。○排し押し開く。○大庭南殿の庭。○椋樹椋の木。○紫宸殿大内裏の正殿。○七匝七度めぐる。○櫻橘樹所謂左近の櫻と右近の橘となり。○平將軍貞盛のこと。○再生生れがはり。

○臆病者の信賴が馬から落ちた所を「平治物語」に非常に面白く書いてあるから次に採萃する。
【信賴卿落馬の事】 大内は皆源氏の勢なれば白旗二十餘旒打ちたてたり。大宮面には平家の赤旗三十餘旒差し掲げて、勇み進める三千餘騎、一度に関を咄と作りければ、大内も響き渡りて夥し。鯨波に驚きて、只今までは由々しく見えられつる信賴卿、顔色變りて草葉の如くにて、南階を下られけるが

膝震えて下りかねたり人なみくりに馬に乗らんと、引寄せたれども、ふとりせめたる大の男の、大
鎧は著たり。馬は大なり。乗煩ふ上、主の心にも似も似ず、はやり切りたる逸物なれば、つと出でん
出でんとしけるを、舍人七八人寄りて馬を抱へたり。放たば天へも飛びぬべし。穆王八匹の天馬の駒
も、かくやと覺ゆるばかりにて乗りかね給ふ所を、侍二人つと寄りて、疾く召し候へとて押し上げた
り、餘りにや押したりけん。弓手の方へ乗りこして、伏様にどつと落つ。急ぎ引起して見れば顔に砂
ひしと付き、鼻血流れて見苦しかりけり。義朝此の體を見て、日頃は大将とて恐れ給ひけるが、はた
と睨みて、あの信頼といふ不覺人は臆したりなとて、日華門を打出で、郁芳門に向はれければ、信
頼も鼻血押し拭ひ、兎角して馬に攝乗せられ、待賢門へ向はれけるが物の用に逢ふべしとても見えざ
りけり。

重盛更レ兵復入。義平呼曰。我源氏嫡子。公平氏嫡子。宜與決死也。重盛曰。諾哉。乃進。戰且
退。與三卒景安・家泰。俱走義平及鎌田政家追之。至三條濠。重盛險濠。政家射之
中。肩及背。甲堅不入。射馬。馬倒而胃墮。政家薄之。重盛扞以弓。取胃被之。景安至。
博三仆政家。爲義平所殺。重盛怒欲親闖一家泰進與義平相搏。爲政家所殺。重盛得
間走。

(讀方) 重盛、兵を更へて復た入る。義平呼んで曰く。「我は源氏の嫡子、公は平氏の嫡子也。宜しく

與に死を決すべしと。重盛曰く。諾せりと。乃ち進んで戦ひ、且つ退き、三卒景安、家泰と俱に走る。義
平及び鎌田政家、之を追ひて二條の濠に至る。重盛濠を險ゆ。政家之を射て、肩及び背に中つ。甲堅う
して入らず。馬を射る馬倒れて胃墮つ。政家之に薄る。重盛扞ぐに弓を以てし。胃を取りて之を被る。
景安至り政家を搏ち仆し、義平の殺す所となる。重盛怒りて親ら闖はん欲す。家泰進みて義平と相搏
ち政家の殺す所と爲る。重盛間を得て走れり。

【語釋】 ○更兵―新丁の兵を入れかへる。○嫡子―總領息子。即ち長男 (平治物語に「幸に義平、源氏の嫡子也。御邊も平家の嫡子也

敵には誰や嫌はん。寄れや組まんとといふまゝに……とあり。○諾哉―「もとより承知なり」との意。○薄近く寄せつめる。○扞―

「防ぐ」と同訓同義。○搏ち―組み打ちして倒す。○間―すきまのこと。

ける、二人の侍なからまはば、) (平治物語に「此の間に虎口を
助かり命也」とあり)

當ニ是時。賴盛等攻三郁芳門。與三義朝戰退走。義朝卒有善走者八町二郎。以三鐵搭三鈎三
其冑。賴盛拔刀截搭。二郎仰仆。賴盛走。源氏兵空宮而出。教賴乃以三千騎橫入三大内。
閉三諸門守之。義朝、義平無所獲而還。宮官皆赤旗矣。進退失據。遂進攻三六波羅。清盛
乃上三北台。踞床指麾。賊兵沓至。官軍遂巡。賊乘勝而進。矢及三内戶。清盛怒上馬。大敗馳

出。親突敵陣。更兵交々進。賊遂大敗走。清盛乃入大内。收名簿。笑曰。昨予今取。何違也。乃分兵追賊。

(讀方) 是の時に當り頼盛等郁芳門を攻め義朝と戦ひ退き走る義朝の卒に善く走る者八町二郎あり。鐵搭を以て、其冑を鉤す。頼盛刀を抜いて搭を截る。郎仰ぎ仆る。頼盛走る。源氏の兵、宮を空ふして出づ。教盛即ち千騎を以て、横より大内に入り、諸門を閉ぢて之を守る。義朝義平、獲る所なくして宮に還れば、宮は皆亦族なり矣。進退據を失ひ、遂に進んで六波羅を攻む。清盛乃ち北臺に上り、床に踞して指麾す。賊兵奔至し官軍遠巡す。賊、勝に乗じて進み、矢、内戸に及ぶ。清盛怒りて、馬に上り大に呼びて馳せ出で、親ら敵陣を突き、兵を更へて交々進む。賊遂に大に敗走す。清盛乃ち大内に入り名簿を收め、笑ひて曰く「昨予へ、今取る何ぞ速かなるや」と。乃ち兵を分ちて賊を追ふ。

【語譯】 ○善走者 かけることの上手なる者。○鐵搭 鐵の熊手。○鉤 ひとつかける。○截る 二つに立ち切る。○空宮 御所の中より兵士が殘らず出たること。○進退失據後 にも先にも據り所(行く所)の無くなれること。○北臺 北の方の物見やぐら。(平治物語)清盛は、北の臺の西の妻戸に軍の下知して居給ひけるが、妻戸の扉に敵の射る矢、雨の降る如く(中) ○踞床 床几に腰をかけて。○指麾 指圖すること。○奔至 かさなりあつて攻めよせてくる。○遠巡 ためらふ、しりごみ、あとしさり。○内戸 天子の御座所。○交々進 かはるがはる進む。

る進む。

○昨予今取 昨日與へて今日もう取り返す。

義朝奔關東。信賴至仁和寺。乞哀於上皇。上皇爲請之於帝。帝不許。重盛曰。即宥之。彼何能爲。清盛曰。首惡不可不誅。且如帝命。何。乃遣教賴。引兵圍仁和寺。捕信賴及其黨源師仲、藤原成親等五十餘人。斬信賴于六條磧。重盛。教盛與成親有姻。乞而宥之。帝賞清盛戰功。進其子弟官爵。尾張人長田忠致。誅義朝。獻其首。梟之獄門。頼盛將平宗清亦捕義朝少子頼朝。至。將斬。宗清憫之。因池尼請宥。池尼頼盛母。於清盛爲繼母。清盛不聽。尼怒曰。刑部卿而在。汝安得侮我言乎。重盛與頼盛固請。乃減死一等。流于伊豆。義平變服入京師。狙擊清盛。清盛覺之。捕獲斬之。平氏委振天下。

(讀方) 義朝關東に奔る。信賴仁和寺に至りて哀を上皇に乞ふ。上皇爲に之を帝に請ふ。帝許したまはず。重盛曰く、「即し之を許すとも、彼何ぞ能く爲さん」と。清盛曰く、「首惡誅せざるべからず。且帝の命なるを如何せん」と。乃ち教賴を遣し、兵を引いて仁和寺を圍み、信賴及び其の黨源師仲、藤原成親

等五十餘人を捕えしめ信頼を六條嶺に斬る重盛・教盛・成親と姻有り、乞ふて之を宥す。帝、清盛の戦功を賞し、其の子弟の官爵を進めたまふ。尾張の人長田忠致、義朝を誅して其の首を献す。之を獄門に梟す。頼盛の將平宗清も亦、義朝の少子頼朝を捕えて至る。將に斬らんとす。宗清之を憐み、池尼に囚りて宥されんことを請ふ。池尼は頼盛の母にして、清盛に於ては繼母なり、清盛聽かず。尼怒りて曰く、刑部卿にして在さば、汝安ぞ我が言を侮るを得ん乎と重盛頼盛と固く請ふ乃ち死一等を減じ伊豆に流す義平服を變じて京師に入り、清盛を狙撃せんとす清盛之を覺り、捕え獲て之を斬る。平氏の威天下に振えたり。

【語譯】 ○彼何能爲。彼れは何程の事を爲し得やう。平治物語「あれほどの不覺人、助け置かせ給へたりとも、何程の事候ふべき云々」。○乞哀。哀れみ（こゝにては助命）を願ふこと。○首惡。惡事の發起人、謀叛の頭領。○磧。河原と同意義。○有姻。親戚の間柄。○憫。ふびんに想ふ。○池尼。清盛の繼母。○刑部卿。忠盛（即ち清盛の父）のこと。○狙撃。狙ひ撃つこと。○覺る。見あらはす。仁安元年。以清盛叙正二位。任内大臣。二年遂至從一位。陸太政大臣。賜隨身兵仗。聽轝車入宮。勅賜邑于播磨、肥前、肥後。爲大功田。世襲。重盛叙從二位。任大納言。聽帶劍昇殿。次子宗盛叙正三位。任參議。

（讀方） 仁安元年清盛を以て正二位に叙し内大臣に任ぜらる。二年、從一位に至り、太政大臣に陞る。隨身兵仗を賜ひ、轝車にて宮に入るを聽さる。勅して邑を播磨・肥前・肥後に賜ひて大功田と爲し世襲せしむ。重盛從二位に叙し、權大納言に任ぜられ帶劍昇殿を聽さる。次子宗盛從三位に叙し、參議に任ぜらる。

【語譯】 ○仁安。仁あん。と訓ずる。六條帝の時の年號なり。○内大臣。左大臣に亞ぎ、之等不參の時は代りて政務儀式を舉行す。○太政大臣。天下の高機を總掌する官。天智帝の朝始めて此の官を置く。○隨身兵仗。武器を帯びたる者を護衛の爲め隨ふるを云ふ。平治物語「大將にあらねども兵仗を賜つて、隨身を召具して、執政の人の如し。轝車に乗りて宮中を出入す、偏に女御入内の儀式なり」。○轝車。牛馬を用ひず手にて挽く車にて皇太子、親王、大臣、僧正等の勅許を蒙りたる者が待賢門より春花門の間を乗り通る車也。○大功田。功田は國家に功勞ありたる者に賜る田地にて大功田は子孫に傳ふるを得るなり。○世襲。代々子孫に相續するの意義。

三年二月憲仁受禪。甫五歲。是爲高倉帝。後白河上皇寵后滋子之出也。而后爲清盛妻時子妹。帝母之兄大納言平時忠謂衆曰。方今天下之人。非平族者。非人也。當是時。平

族爲三朝官者。六十餘人。其采邑跨三十餘州。朝政盡決。清盛。既而清盛削髮稱淨海。與別第于西八條一居焉。

【讀方】三年二月、憲仁禪を受く、甫めて五歳なり是を高倉帝と爲す。後白河上皇の寵后滋子の出也而して后は清盛の妻時子の妹なり。

帝の母の兄大納言平時忠、衆に謂つて曰く方今平族に非ざれば人に非ざる也と。

是の時に當りて平族の朝官と爲る者六十餘人なり其采邑は三十餘州に跨り。朝政盡く清盛に決す。既にして清盛髮を削つて淨海と稱し別第を西條に興し焉に居る。

【語譯】○采邑一支配して居る領地。盛衰記に「日本秋津島は僅かに六十六ヶ國、平家知行は三十餘ヶ國、既に半國に及べり、其上庭園五百餘所、田畠は幾らといふ數を知らず」○別第一下屋敷。○削髮一出家すること。

選童三百。服異服。散布京城内外。察誹謗者。輒處法。京師側目。上皇積不能平。嘉應元年。上皇削髮稱法皇。平氏益橫。

【讀方】童三百を選び異服を服せしめ、京城の内外に散布し、誹謗する者を察して輒ち法に處す。京

師目を側立つ。上皇積つて平かなる能はず。嘉應元年上皇削髮して法皇と稱す。平氏益々橫也。

【語譯】○童一小供。○異服一普通と異なる服装。○散布一あちらこちらに配り置く。○誹謗一そしる。惡口すること。○處法一法律にあてて罰する。○側目一目をそばだつと訓す。おそれ憚りて眞向に見ないこと。○積不能平一積る不平に堪えぬ也。○嘉應一高倉帝の時の年號。○橫一專横と同義。我儘勝手なること。

承安元年、清盛進其女德子爲女御。遂立爲中宮。治承元年、重盛任左近衛大將。尋拜内大臣。居小松第一弟宗盛爲右近衛大將。已而進正二位。朝臣舉妬平氏。

【讀方】承安元年清盛其の女の德子を進めて女御と爲し遂に立て、中宮と爲す治承元年重盛左近衛大將に任ぜらる尋いで内大臣に拜し、小松の第一に居る弟宗盛右近衛の大將と爲る已にして正二位に進む。朝臣舉つて平氏を妬む。

【語譯】○承安、治承一共に高倉帝の時の年號。○女御一ニヨゴと讀み皇后の宮中に入りし時先づ女御と稱し後皇后となるが例なりしなり。○小松一京都堀河の西八條の北に在りしと云ふ。○舉一こぞりて、皆。

藤原成親以一種大納言爲法皇執事。重盛娶其妹。生子維盛。又娶其女。爲子婦。成親子成經娶教盛女。然成親殊希爲大將。而不得。居常憤憤。遂圖滅平氏。乃與西光謀。鑿藏人源行綱。密語之曰。平氏專恣子所目也。吾受院勅。陰圖之。而未得將卒焉。子源子也。蓋爲我將。成殊功。取顯位。行綱諾之。

(讀方) 藤原成親は種大納言たるを以て法皇の執事と爲る。重盛其の妹を娶りて子維盛を生む。又其の女を娶りて子の婦となす。成親の子成經は教盛の女を娶る。然るに、成親殊に大將と爲らん事を希ひて。院で得ず居常憤々たり。遂に平氏を滅さん事を圖る。乃ち西光と謀る。藏人源行綱を鑿す。密に之を語りて曰はく「平氏の專恣は子の目する所なり。吾院勅を受けて陰に之を圖る。而れども未だ將卒を得ず。子は源氏の胄なり。蓋ぞ我が將となり殊功を成して顯位を取らざる」と。行綱之を諾す。

【語譯】 ○法皇こゝでは後白河法皇。○執事院中の百事を掌る長官又別當ともいふ。○居常いつねに、平生。○憤憤心の中に憤りのつゝのる有様を云ふ。○圖る計畫すること。○謀相談すること。○藏人くらんど若はくらうどと讀む。殿上に侍して機密の文書や訴訟の事を掌る官。○專恣はしこまり、我儘。○院勅法皇のみことのり。○陰ひそかにと訓す。○將卒將帥に同じ。大將

のこと卒は帥に同じ。○胄ちすぢ即ち後裔のこと。○蓋「何ぞ……さる」と訓じ何ぞと同義。○殊功すぐれた功。○顯位世に顯れた高き位。

成親遂結檢非違使平康賴。式部大輔藤原章綱。前近江守源成雅等。又欲結法勝寺執行俊寛。數飲之酒。令姫人侍焉。因乘間說之。會其鹿谷別館計事。宴酣馬逸。坐者驚起。誤仆瓶子。成親曰。平氏仆矣。西光曰。盍梟其首。康賴進曰。梟首檢非違使之任也。取瓶懸之柱上。一坐大笑。成親因建策曰。祇園祭日京師雜沓。乘此時縱火平氏。第一疾攻之。可三以逞矣。乃部署諸將所向。未發。

(讀方) 成親遂に檢非違使平康賴・式部大輔藤原章綱・前近衛守源成雅等に結び又法勝寺の執行俊寛に結ばんと欲し。數々に酒を飲ましめ、姫人を侍せしむ因つて間に乘じて之に説き、其の鹿谷の別館に會して事を計る。宴酣にして馬逸す。座する者驚き立ち、誤りて瓶子を倒す。成親曰く「平氏倒れたり」と。西光曰く「盍ぞ其の首を梟せざる」と。康賴進みて曰く「首を梟するは檢非違使の任なり」と。瓶を取りて之を柱上に懸く。一坐大に笑ふ。成親因て策を建て、曰く、「祇園の祭日には京師雜沓す。此時に乘じて、火を平氏の第に縱ち、疾く之を攻め、以て逞くすべし」と。乃ち諸將の向ふ

所を部署し未だ發せず。

【語譯】 ○檢非違使非法違法を取締る役。○式部大輔式部省の次官也。○執行寺の長を云ふ。○姪人貴人の侍女。屢元。○乘間機會に因つて。○鹿谷京都の東北にあり。○瓶子徳利のこと、平氏と音相通ず。○梟首を木の上にさらすこと。獄門。○雜沓雜は聚まる也。沓は重なる也故に雜沓は人ごみにて混雜するをいふ。○逞思ふ存分にやつけるの意。○部署分部處置也。手分けすること。

行綱自度。事竟下成。不若自首。乃夜馳赴福原。面清盛告事曰。嚮日新大納言氏。俄要行綱于鹿谷。謀云々。聞法皇亦欲親臨焉。因法印靜憲練之而止。事已至此。不敢不告。清盛大駭。直歸京師。悉召子弟宗族。就院中奏曰。有凶徒。圖滅臣宗。臣且執而鞠之。然事必有源。是以敢奏。法皇失色。不知所答。

(讀方) 行綱自ら圖るに「事竟に成らず。自首するに若かず」と。乃ち夜馳せて福原に赴き、清盛に面し事を告げて曰く「嚮の日新大納言氏俄かに行綱を鹿谷に要し、云々せんことを謀る。聞く法皇も亦親ら臨みたまはんと欲す、法印靜憲の之を諫めしに因つて止みたまへりと。事已に此に至れり。敢て告

げずんばあらず」と。清盛大に駭き直ちに京師に歸り、悉く子弟宗族を召し院中に就て奏して曰く「凶徒あり、臣が宗を滅さんことを圖る。臣、且に執へて之を鞠せんとす。然れども事必ず源あらん。是を以て敢て奏す」と。法皇色を失ひ答へたまふ所を知らず。

【語譯】 ○度るかんがへはかる。みつもりをつける。○竟つひに、しまひには。○自首おのれの罪を自ら陳べ告ぐること。○福原攝津國神戸市に其の古跡あり。○云々しかく、かやうくの法印僧の位の第一位であつて、僧の官の第一たる僧正に相當する。○靜憲少納言信西子。○宗族一門のこと。○凶徒凶惡なともがら。○鞠罪を推窮する。吟味すること。

○法皇をして顔色なからしめた清盛の不敵な態度によつて、當時の清盛の羽振が察せられやう。

清盛使檢非違使阿部資成縛西光至。痛掠治之得實。命裂其口。又使人召成親。成親末知事覺。乃往。比及西八條。見甲士釋轡心驚。及入門。平氏士難波經遠、妹尾兼康、耦進捧之。囚於小室。將待昏殺之。

(讀方) 清盛檢非違使阿部資成をして、西光を縛して至らしめ、痛く掠治して實を得、命じて其の口を裂かしめ、又人をして成親を召さしむ成親未だ事の覺はれしを知らず。乃ち往く。西八條に及ぶ比、

甲士の釋贖するを見て、心驚く。門に入るに及び平氏の土難波經遠、妹尾兼康、精進して之を拵し、小室に囚へ將に昏を待つて之を殺さんとす。

【語譯】 ○掠治 鞭うちて罪をしらぶること。「掠」は「かすめ取る」といふ意味の時には、音「リヤク」であつて「むらうつ」といふ意味のときは音「リヤウ」である。○覺 二「あらはる」と訓じ、露顯すること。○往 二「ゆく」と訓するが「行」く字とは意味が違ふ。即ち「往」は「來」の反對で「一定の場所に志してゆく」などの場合に「往」「復」「往」「還」等と運用する字であるが「行」の字は「止」の反對で「動いて居る」ことである。○甲士 二よろひを着たる兵士。鎧武者。○釋贖 二ひつきりなしに騒ぐこと。○精進 二二人相並びて進むこと。主に左右より進み出づるをいふ。○拵 二手にて頭髮をつかむこと。○囚 二とらへて逃亡せぬ様にしておくこと。

○成親は行綱が自首した爲めに事の露顯した事は少しも知らなかつた。だから、其の宅に使者が行つた時も「平公(清盛)が延曆寺僧徒の罪を宥したいと思ふて、吾をして後白河法皇に之を請はしめらるゝだけの用事であらう」と言つて出たのだつた。それが途中に於て、鎧武者等の騒いでる様を見て些か不安に陥り、門に入るに及び捕へられて始めて事の發覺したのを悟つたのであつた。門を入ると平氏の家臣の難波經遠、妹尾兼康の二人の者が、兩方から立ち並んで進んで來て、成親を手で引き摺

み、小さな部屋に押し込め、そして日が暮れるのを待つて之を殺さうとした。

久之重盛至。衆迎而謂之曰、有大事。公來何晚。重盛曰是私事。何言大事。入謂清盛曰、聞欲殺大納言。願再思之。兒豈以姻戚云爾哉。彼爲名族。受君寵。未可下以私怨殺也。往時少納言信西、與行死刑。發惡左府之墳。未二歲信西之墓亦爲藤原信賴所發。善惡之應、殃慶立至。願再思之。出見經遠、兼康、讓其亡狀。因戒之曰、慎勿使我公乘怒抵悔。乃歸。

(讀方) 之を久しうして重盛至る。衆迎へて之に謂つて曰く「大事あり、公の來る何ぞ晚か」と。重盛曰く「之れ私事のみ。何をか大事と言ふ」と。入つて清盛に謂つて曰く「聞く、大納言を殺さんと欲すと。願はくば之を再思せよ。兒豈姻戚を以て爾云はんや。彼は名族たり、君の寵を受く。未だ私怨を以て殺すべからざる也。往時、少納言信西死刑を興行し、惡左府の墳を發けり。未だ二歲ならずして信西の墓も亦藤原信賴の發く所と爲れり、善惡の應殃慶立ちどころに至る。願はくば之を再思せよ」と。出でて經遠兼康を見て其の亡狀を聽め因て之を戒めて曰く「慎みて我が公をして怒に乗じて悔に抵らしむる勿れ」と。乃ち歸る。

【語譯】 ○再思 思案をしかへる。○姻戚 縁者。重盛との重縁の間なることは既に述べた通りである。源平盛衰記に「重盛、彼の大納言の妹に相具し維盛又嫁なり。旁々親しく成つて候へばかく申すとや思召さるらん。一切其の儀は侍らず。世の爲家の爲に候を思ひて歎き申すなり」とある。○名族 名高い家柄。○私怨 私の怨「公怨」に對す。○往時 むかし。○少納言 此の言葉は前述してあるが職責を説明しておかなかつたから茲に説明しておく。少納言といふのは内印(天皇御璽)官印(太政官印)を取扱ひ詔勅宣下の事を掌る官で藏人をおかる、前までは其の職權が重かつた。○信西 ンサイと云ふ。藤原通憲の剃髮して後の名。○興行 一旦絶えておつたのを復興して行ふこと。嵯峨帝の時より久しく朝臣を死刑に處することがなかつたのを信西が之を復興せしめた。○發く しばく。即ち掘りかへす。○惡左府 藤原頼長のこと「左府」とは「左大臣」のこと。○墳 墓と同義。○善惡之應 善因善果、惡因惡果。即ち善き因あれば善き果あり、惡しき因あれば惡しき果ある應報のこと。○殃慶 殃は禍、慶は福、吉凶と云ふと同じ。○立至 早速來る。○謹め 事の次第を問ひ糺して責むること。○亡狀 亡は「無」と同じ。不埒なること。又無禮なることに解してもよい。○抵悔 後悔するに至る。「抵る」は「至る」と同訓同義。

清盛怒不自禁 令經遠兼康拷掠成親 於是清盛乃被甲執長刀而出 召平貞能曰

亟戒將士。今舉朝之人、嫉我圖我。蓋謂我官爵隆分耳。在昔田村丸微者也。以下平東夷功超拜大將、他多類此者豈獨淨海。淨勤勞非一日也。保元之變、我宗族大半赴新院。且重仁親王者、我父所覆育也。而我思故院遺詔、獨屬官軍、終克平亂逆。平治之變、信賴、義朝之猖獗、吾而自愛、事未可知。重命輕躬、夷滅凶黨。以至於收經宗、惟方等數々冒大難、無非爲官家者。以此言之、官家恩宥、雖窮子孫可也。今乃輕信讒言、欲見族滅。即母告者豈不危殆。異日細人有再進言則下宣討我、目我爲賊。不可悔也。吾欲先發移之鳥羽宮、否者請幸於此耳。北面奴輩、或且扞我。亟戒將士。

(讀方) 清盛、怒りを自ら禁ぜず、經遠兼康をして成親を拷掠せしむ。是に於て清盛乃ち甲を被り長刀を執りて出で、平貞能を召して曰く「亟かに將士を戒めよ。今舉朝の人、我を嫉み我を圖る。蓋し我が官爵分に踰えしを謂へるのみ。在昔田村丸は微者なり東夷を平けし功を以て、超えて大將に拜す。他此に類する者多し豈獨り淨海のみならんや。淨海の勤勞は一日に非ざる也。保元之變、我が宗族大半新院に赴けり。且つ重仁親王は、我が父の覆育したまふ所なり。而して我れ故院の遺詔を思ひて獨り官

軍に屬し、終に亂逆を克平せり。平治之變、信賴義朝の猖獗なる、吾にして自愛せば事未だ知るべからず命を重んじ、躬を輕んじ凶黨を夷滅し以て經宗、惟方等を收むるに至れり、數々大難を冒せるは官家の爲めにするに非ざるものなし。此を以て之を言へば、官家の恩宥、子孫を窮むと雖も、可なり、今乃ち輕々しく讒言を信じて族滅せんと欲す即ち告ぐる者なくば豈危殆ならずや。異日細人再び言を進むることあらば、則ち宣を下して我を討ち、我を目して賊と爲さん。悔ゆべからざる也。吾れ先づ發して之れを烏羽の宮に移さんと欲す、否らずんば此に幸したまはんことを請はんのみ、北面の双輩、或は且に我を扞がんとす。亟に將士を戒めよ」と。

【語譯】 ○不自禁 自分で我慢し堪へ忍ぶことが出来ぬ。盛衰記に「入道かくしても猶腹に据え兼ねて……」とあり。○掠拷 拷問と同義。○被る 着ること。○亟かに すみやかに、取り急いで。○戒む 用意せしむる。○舉朝の人 朝廷に居る人が皆。○圖我 我を滅ぼさんと企る。○踰分 分限に越ゆる、即ち身分不相應のこと。○在昔 むかし「昔在」とも書く。○田村丸 阪上田村麿。○微者 身分卑しき者。○超拜 順序を飛び越して拜命する。○淨海 清盛の削髮したる後の法名。○新院 崇徳上皇。○重仁 崇徳帝の皇子。○覆育 はぐくみ育てる。○故院 烏羽法皇。○亂逆 むぼん。反逆。○克平 勝ち平らぐる。○猖獗 宛ら猛獸の狂ひまはる如くわる強きこと。○自愛 自分

の身を大切にする。○事未可知 事件の結果がどうなつたか分らぬ。○重命 勅命を重んず。○夷滅 根絶の意味即ち滅ぼしつくす。○凶黨 逆徒信賴義朝等を指す。○經宗惟方 二人は後白河法皇と一條天皇との御仲を悪くした人。○收む 召し捕ふる。○冒 向う見ずに進む。○官家 朝廷。王室の意。○恩宥 恩恵を以て罪を赦す。○窮子孫 子孫のあらん限りをつくす。○族滅 一族を滅ぼし絶やす意。○即 「若し」と同訓同義。○母 「無し」と同訓同義。○危殆 あやふし。○異日 他日。○細人 つまらぬ者。小人。○再進言 又何とか申し上げる。○下宣 院宣を下す。○目我 自分を指して。○不可悔 後悔しても及ばぬ。○烏羽 京都の南にあり。○幸 御幸。○北面 法皇の武官。○扞 防ぐ。

有ニ主馬盛國者 馳告ニ重盛ニ重盛大驚、急命ニ駕赴之、入ニ第門。族人皆振甲鞍馬、旗幟成、列將起。重盛烏帽直衣而入、宗盛叩ニ其袖曰。公何以不被甲。重盛睨曰、汝等何以被甲。敵人何在焉。吾爲ニ大臣大將。自非有ニ寇賊犯ニ闕、即不宣被甲也。

(讀方) 主馬盛國といふ者あり。馳て重盛に告ぐ。重盛大に驚き急に駕を命じて之に赴き、第門に入る。族人皆甲を振て馬に鞍おき、旗幟列を成し將に起たんとす。重盛烏帽直衣にして入る。宗盛其の袖を

叩へて曰く「公、何を以て甲を被らざる」と。重盛睨んで曰く「汝等何を以て甲を被る。敵人何くに在るか。吾れは大臣大將たり。寇賊闕を犯すことあるに非ざるよりは、即ち宜しく甲を被るからざるなり」と。

【語譯】 主馬盛國、檢非遣使討（判官）となつてゐた人。○命駕、乗物の仕度をさせる。○第門、第宅の門。○撥甲、鎧を着ること。○鞍馬、馬に鞍をおいて出陣の用意をすること。○旗幟成列、旗や幟を立てならべたる様をいふ。○烏帽、「ゑぼうし」ともいひ「ゑほし」ともいふ。○直衣、なほし大臣以下參議以上の人の略服にて袍の如き形し、常に着る服である。○叩、「控」と通ずる字で引き止むること。○大臣大將、重盛は時に内大臣で左近衛大將を兼ねてゐた。○寇賊、あだ、かたき。○闕、官門、又宮城にもいふ。

清盛望見之、遽起表、黒衣而出。數正襟、襟、咳甲親。謂重盛曰、吾見西光狀、如成親等、乃其枝葉耳。閒羣小彙進、覬覦不已。而御以輕躁之君。何所不至。我欲且請幸一邊、以待事定。

（讀方） 清盛之を望見して遽かに起つて黒衣を表して出で數々襟を正す。襟、咳き甲親ゆ。重盛に謂つ

て曰く「吾れ西光の狀を見るに、成親等の如きは乃ち其の枝葉のみ。閒羣小彙進し、覬覦已ます而して御するに輕躁の君を以てす、何の至らざる所あらん。我れ且く一邊の幸したまはんことを請ひ、以て事の定まるを待たんと欲す。

【語譯】 ○望見、遠くより見ゆ。○表、黒衣、軍装の上に黒の僧衣をまとふて。○咳く、「開く」。○枝葉、枝葉、こゝでは法皇が根本にして成親等は其の枝葉のごときものであるとの意。○羣小、多くのつまらぬ小人共。○彙進、類を以て進む。○覬覦、下たる者上の間隙を伺ひ下たるもの、望むまじきものを得んとすること。○御、上にあつて引き廻す。○輕躁之君、輕はづみにして落ち着かぬ、即ち後白河法皇を指す。○何所不至、何を仕出かすか危険千萬である。○且、「しばらく」。當分、で先づ。○一邊、一方の邊地かたほとり。○事定、事の落着すること。

語未、畢、重盛泣數行下。久之、言曰、重盛熟視尊親、知家門已屬衰運也。重盛聞之、世有四恩、皇恩爲最。抑我門雖辱、桓武葛原之胤、而降爲人臣、中微不顯。以平將軍之功、而不過國守、刑部卿聽、內昇殿、萬入反唇。及至大人、乃陞太政大臣、以見之不肖、且辱大臣大將、宗族駢植朝廷、田園半於天下。叨恩極矣。爲官家所疾。誰謂不宜。而運命求艾、隳人既獲、宜論罪所、當退陳事由、則公家豈有不霽威。何必草爲也。

昭和五年三月十日印刷
昭和五年三月十三日發行

【國語漢文講座】

定價金八拾錢

不許複製

發行人

東京市芝區字田川町十三
松井巳壽

印刷所

東京市芝區字田川町十三
松壽堂印刷部

東京市芝區字田川町十三

發行所

松壽堂出版部

電話芝(43)三一四四番
總發東京八一三三番

群書を越せ松壽堂の受験獨習書

松壽堂出版部編集

各諸學校 各科擔任講師紙上放送
受験の伴侶

● 四六版 印刷鮮明製本優美 定價金貳圓 送料本社負擔
● 送金は（振替用紙利用か小爲替にて願ひます）着金次第迅速に御送本します
本書は各受験科目に涉り各擔任講師の親切、熱心なる教授振りは居ながらにして學
校の教室にて親しく恩師に接し教授を受けると何等かはりなき気分にて勉學が出来
る他に比類なき本社獨特の獨學最優良書なり

目次
概略
英語擔任講師紙上放送（特に此の科目だけ解りよく徹底する爲め）
國語擔任講師紙上放送（教科書付きにて一日より十五日間教授）
作文擔任講師紙上放送（一日より八日間教授）
算術擔任講師紙上放送（一日より十二日間教授）

東京市芝區
宇田川町十三番地

松壽堂出版部

電話芝(43)三一四四番
振替東京八一—二二三番

受験と就職社々長 吉田先生校閲 松壽堂出版部苦心編集

昭和全鐵道員養成講座

全國の國有鐵道私設鐵道員たらんとする諸君の必讀書
全國鐵道局教習所電信科を受験する諸君

●前途洋々たる鐵道界に

雄飛せんとする者に本書の一讀を奨む

就職難の解決

◎體裁 (四六版箱入金文字上製) ●定價 (上卷金貳圓 下卷金壹圓八拾錢) 送料本社負擔

◎送金法 (振替口座拂込み) 東京芝區宇田川町十三三三松壽堂出版部
又は書留爲替の事) 振替口座東京八一二二三

受験と就職社々長 吉田先生校閲 松壽堂出版部苦心編集

昭和通信官吏養成講座

◆全國通信講習所 官吏となる最も近道
◆通信官吏練習所 受験者諸君は必らず讀め
◆燈臺局看守傳習所

◎將來官界に雄飛して立身出世を
希ふものに本書の一讀を奨む

就職難の解決

◎體裁 (四六版箱入金文字上製) ●定價 (上卷金貳圓 下卷金貳圓) 送料本社負擔

◎送金法 (振替口座拂込み) 東京芝區宇田川町十三三三松壽堂出版部
又は書留爲替の事) 振替口座東京八一二二三

書習獨驗受の堂壽松るせ越超と書群

松壽堂出版部編纂

算術の真髓 最新算術解法の秘訣

● 四六版 洋装金文字箱入美本 定價金壹圓八拾錢 送料本社負擔
 ● 送金は（振替用紙利用か小爲替にて願ひます）着金次第迅速に御送本します
 本書はよく急所をつかみ得たる算術の多年の苦心と相俟て實に算術の真髓全巻に満
 世に於て居る諸君よ本書によつて實際上の算術の真髓にふれられん事を切望する内
 容の豊富他に類なし

目次

第一編	整数及小数	第一章より第五章まで
第二編	分数の性質	第一章より第五章まで
第三編	比及比例	第一章より第五章まで
第四編	歩合算	第一章より第五章まで
第五編	實力養成問題及其解答、模範試験問題及其解答、諸税別摘要、鐵道運賃問題集	第一章より第五章まで
第六編	歩合算	第一章より第五章まで
第七編	實力養成問題及其解答、模範試験問題及其解答、諸税別摘要、鐵道運賃問題集	第一章より第五章まで

徹より細に入れた説明振りは群書を超越
 せる事を裏書せり

東京市芝区
 宇田川町十三番地

松壽堂出版部

電話芝(43)三一四四番
 振替東京八一二二三番

書習獨驗受の堂壽松るせ越超と書群

松壽堂出版部編纂

徹底せる代數學解法と算術講義

● 四六版 印刷鮮明製本優美 定價金壹圓貳拾錢 送料本社負擔
 ● 送金は（振替用紙利用か小爲替にて願ひます）着金次第迅速に御送本します
 本書は徹底せる代數學解法として算術講義として解り易くやさしく凡そ代數學を學
 ばんとするもの、無二の伴侶であり恩師である事を誇りとする本書に依て實力を獲
 得せよ

目次

第一編	代數緒論	第一章
第二編	整数、負数の規則	第二章
第三編	方程式の四則	第三章
第四編	方程式	第四章
第五編	式の四則演算	第五章
第六編	分数式	第六章
第七編	累及根	第七章
第八編	二次方程式	第八章
第九編	比及比例	第九章
第十編	算術	第十章
第十一編	算術講義	第十一章
第十二編	歩合算	第十二章

最近各諸學校試験問題及其の解答集
 一章より一二三章まで講義してある

東京市芝区
 宇田川町十三番地

松壽堂出版部

電話芝(43)三一四四番
 振替東京八一二二三番

書習獨驗受の堂壽松越超と書群

松壽堂出版部編集

獨學者の手ほどき
講師の紙上教授
英語の初歩より

●四六版 印刷鮮明製本優美 定價金壹圓 送料本社負擔
●送金は（振替用紙利用か小爲替にて願ひます）着金次第迅速に御送本します

英語は萬國共通語にして又第二の日本語なり何人といへども英語を解せずしては是れから社會に立てば必ず悲惨なる落伍者とならねばならぬ本社編輯局にては是れを眼し極めてやさしく初學者に覺へ易く誰れでも本書を一度手にすれば樂々と英語に會得出来る様他の類書と違ひ居ながらにして本校の教室にて恩師に接する心地を社會の活舞臺に活躍せよ前途有爲の青年諸兄よ本書に依て英語を我物とせよ而して

目次

- 第一編 英語の引方
- 第二編 アラベント
- 第三編 英語の綴り
- 第四編 英文の譯法

各編をまた各章に分ち誰でも吞み込める様に親切丁寧に講義してあります

◇本書は一冊で初歩の人が勉強出来る様編纂したる獨家内容である◇

東京市芝區宇田川町十三番地

松壽堂出版部

電話芝(43)三一四四番
振替東京八一三三番

書習獨驗受の堂壽松越超と書群

松壽堂出版部編集

最新
新作文の作り方及着眼點と文例

●四六版 印刷鮮明製本優美 定價金八拾錢 送料本社負擔
●送金は（振替用紙利用か小爲替にて願ひます）着金次第迅速に御送本します

文の力を以て未だ見ぬ人に其の人格を崇拜され文の力を以て風物を詩的化し文の力を以て全世界の思想を統一する偉大なる文を生むは文の力である貧弱なる思想は貧弱なる文を生み偉大なる思想は偉大なる文を生むは文の力に依るべきなり文の作り方を習得せよ試験官は作文に依りて頭腦の善し悪しを見分け様として居るうべなるかな

●目次
一 作文の目的と注意事項、如何にせば文が巧に書けるか、
二 表現の目的と注意事項、如何にせば文が巧に書けるか、
三 個性の表現と注意事項、如何にせば文が巧に書けるか、
四 口語體文例(二十二章) 文語體文例(四十章) 書簡文體文例(五章)

東京市芝區
宇田川町十三番地

松壽堂出版部

電話芝(43)三一四四番
振替東京八一三三番

群書と超越せる松壽堂の受驗獨習書

松壽堂出版部編集

受驗必携
根抵となる
歴史地理講座

● 四六版 印刷鮮明製本優美 定價金八拾錢 送料本社負擔
● 送金は（振替用紙利用か小爲替にて願ひます）着金次第迅速に御送本します

凡そ國民である以上我母國を愛せぬ者なし國を愛する以上自國の歴史地理に通ぜざるべからず受驗用として正確を期し自習獨學用として親切丁寧に講義したもので本書一冊の精讀は如何なる問題も立所に解答し得る實力を獲得することが出来る

目次 歴史講座（各諸學校入學試験歴史百題）試験問題の急所
内容 地理講座（各諸學校入學試験地理百題）をつかみ得たる
概略 最近試験問題より見たる地理歴史の要點 編述

東京市芝區
宇田川町十三番地

松壽堂出版部

電話芝(43)三一四四番
振替東京八一一二三番

